

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (7)
— 『キエフ年代記集成』 (1172 ~ 1180 年)

中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香

富山大学人文学部紀要第 67 号抜刷

2017年8月

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (7) — 『キエフ年代記集成』 (1172 ~ 1180 年)

中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香

この年, 神と聖なる聖母はキエフの十分の一税教会¹⁾で奇蹟をなした。この教会はウラジーミル [06] が創建したものであり, かれは [ルーシの] 地に洗礼を施し, すべてのルーシの地からこの教会に十分の一 [の税収入] を与えたのだった²⁾。【555】その神の母はわれらの期待にもまして奇蹟を起こした³⁾。

さて, キエフでグレーブ・ユーリエヴィチ [D178] が, その父と祖父の公座に就いていた最初の年⁴⁾, ポロヴェツの大軍がやって来た。軍勢は二手に分かれ, 一方はペレヤスラヴリへと向かい, ベソチェン⁵⁾ (Песочен) の近くに陣を張った。もう一方は, ドニエプル川の反対側⁶⁾ をキエフへ向かって進み, コルスニ⁷⁾ (Корсунь) の付近に布陣した。両方 [の陣営] とともに, グレーブ [D178] に使者を遣って, こう言った。「神とアンドレイ公 [D173] は, そなたをキエフの自

1) 「十分の一税教会」(церковь Десятинная) のキエフにおける創建については, 『原初年代記』 983 年, 989 年, 996 年, 1039 年の項に「聖母教会」(церковь святых Богородица) として示されている教会に相当する。これによると石造りの聖堂は 989 年に定礎され, 996 年に完成された。[イパーチイ年代記 (4): 343 頁, 注 116] 参照。

2) 聖堂に対して, 税収の十分の一を与える規定については, [イパーチイ年代記 (5): 302 頁, 注 414] を参照。

3) この, キエフの十分の一税教会の聖母による奇蹟(чудо)とは, 以下に述べられているように, ミハルコ [D175] が率いる小勢の軍隊で, 多勢のポロヴェツ軍を打ち負かしたことを指している。下注 26 の聖母への讃詞を参照。

4) グレーブ [D178] は 6677(1169) 年 3 月 12 日にキエフの公座に就いており ([イパーチイ年代記 (6): 282 頁, 注 571]), 以下に描かれるポロヴェツ人のキエフへの接近と, ミハルコ [D175] によるドニエプル右岸でのポロヴェツ人討伐があったのは, 1169 年の春~夏のことと考えられる。

なお, 時系列から見れば, この事件は, 1169 年 3 月のグレーブ [D178] のキエフ公就位 ([イパーチイ年代記 (6): 282 頁, 注 571]) の記事の後におかれるべき記事になる。

5) 「ベソチェン」(Пѣсочен) は「砂州」を意味し, ペレヤスラヴリから南東方向に約 60km ほど離れた, ドニエプル川左岸の川沿いにあった城砦の名称。現在の, キエフ州ペレヤスラフ=フメリニツキイ区のピシチャネ(Піщане)村あたりにあったと推定されている。

6) この「ドニエプル川の反対側(оная сторона Днѣпра)は, 先述のベソチェンやペレヤスラヴリの側から見て対岸ということで, ドニエプル右岸に相当する。

7) 「コルスニ」(Корсунь) は, 主要城市カネフ(Канев)から南南西に 40km ほど離れた, ロシ川左岸の河口近くにあった城砦。ドニエプル川の右岸にあたる。現在のコルスニ・シェフチェンキウスクイ(Корсунь-Шевченківський)の場所に相当する。

分の祖父と父の〔公座〕に就かせた。われらはそなたと互いに約定を結ぼう。われらは誓いを立てよう⁸⁾。そなたも、われらに〔誓いを立てよ〕。そなたが、われらを恐れることがないように。われらも、そなたを〔恐れることがないように〕」。

グレーブ [D178] は、このポロヴェツ諸侯の言葉を聞いて、かれらと会合しようと考え、ポロヴェツ人の使者に言った。「わしはそなたたちのもとへ行こう」。かれ〔グレーブ〕は、最初にどちらへ行くか、従士たちと相談した。そして、ペレヤスラヴリを守るために、最初にペレヤスラヴリへと行くことを決めた⁹⁾。なぜなら、ペレヤスラヴリの公、ウラジーミル・グレーボヴィチ [D1782] は、その頃年少で、12歳だったからである¹⁰⁾。

グレーブ [D178] は、ペレヤスラヴリへ、ポロヴェツとの会合へと向かった。かれ〔グレーブ〕は、他方のルーシのポロヴェツ人に宛てて¹¹⁾ 使者を遣って、こう言った。「そこでわしを待て。わしは、ペレヤスラヴリへと向かっている。わしは、そのポロヴェツ人と和を結ぶつもりだ。それから、和議のために、そなたたちのもとに行こう」。かれ〔グレーブ〕は〔ペレヤスラヴリで〕ポロヴェツ人と和を結び、かれらに贈物を与え **[556]**、そのもとを去った。〔ペレヤスラヴリの〕ポロヴェツ人は、ポロヴェツ人の地へ戻って行った。

グレーブ・ユーリエヴィチ [D178] は、自分の兄弟ミハルコ¹²⁾ [D175] と自分の従士たちと

8) この「誓約」は、諸公が異教徒の間で行う儀礼の呼び名として *pota* という語が用いられている。ここでは、約定を結んだあとで、これを遵守することを誓う儀礼を指している。

9) ペレヤスラヴリに近い、ベソチェン付近に布陣しているポロヴェツ人部隊と最初に会合することを決めたのである。

10) これは1169年春～夏の出来事であることから（上注4）、グレーブの息子ウラジーミル [D1782] は、1157年前後の生まれということになる。父グレーブ [D178] は出自未詳の前妻を1154年に亡くし、翌年イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] の娘と再婚を果たした（『イパーチイ年代記(5):287頁、注330』）。そこから、ウラジーミル [D1782] は、この後妻との子であることが分かる。

グレーブ [D178] には、1183年のヴォルガ・ブルガールへの遠征で戦死したイジャスラフ [D1781] という息子がいるが、どちらが年上の兄弟か定かではない。イジャスラフ [D1781] が兄で前妻との子だとすれば、かれよりも弟のウラジーミル [D1782] の方が母方由来の（チェルニゴフ＝ノヴゴロド・セヴェルスキ諸公との）姻戚関係があるためにペレヤスラヴリ公として据えるのに心強かったという事情が想定できる。〔イパーチイ年代記(6):282頁、注572〕も参照。

11) 「ルーシのポロヴェツ人に宛てて」（к <...> половцемъ, к руськимъ）は、明らかに「ロシ川の（роськимъ）ポロヴェツ人」の誤記で、上記（上注7）のコルスニ付近で陣を張っていたポロヴェツの陣営を指している。Рось と Русь の語の類似から生じたものだろう。ただし、『ラヴレンチイ年代記』6677(1169)年の項の並行記事でも同様の к руськимъ の読みになっている。なお、『ラヂヴィール年代記』の6677(1169)年の項の並行記事ではこの個所が к корсуньскимъ（コルスニの）となっており〔ПСРЛ Т. 38, 1989: С. 133〕、これが本来の読みで、脱落によって『イパーチイ年代記』（『ラヴレンチイ年代記』）の読みが生じた可能性もある。

12) 当時、ミハルコ [D175] は、コルスニからほど近い（北西へ約53km）、トルチェスク（Торческ）の公座に就いていたと考えられる。〔イパーチイ年代記(6):272頁、注502〕

もに、コルスニのポロヴェツ人のもとへと向かった。かれ〔グレーブ〕は、ベレペトヴォの平原¹³⁾ (Перепетовське поле) に到着した。ところが、コルスニのポロヴェツ人は、グレーブ [D178] がベレヤスラヴリへと向かったことを聞いて、協議してこう決めていた。「見よ、グレーブ [D178] は、〔ドニエプル川の〕 向こう側に渡り、向こう側のポロヴェツ人のところに向かっている。かれはそこで、ぐずぐずとしているだろう。〔グレーブは〕 われらのもとに来なかったのだ。われらは、キエフの向こうに行こう¹⁴⁾。村々を掠奪し、捕虜をつれてポロヴェツの地へと戻ろうではないか」。こうして、かれら〔ポロヴェツ人〕は、掠奪するためにキエフの向こうへと進んだ。そして、聖母〔教会〕の城市、すなわち十分の一税教会の城市¹⁵⁾ であるポロノエ¹⁶⁾ (Полоное) とセムイチ¹⁷⁾ (Сѣмьчъ) へ到達した。そして、村々を残すことなく略取し、人々を男も女も〔捕虜にした〕。馬、家畜〔牛〕、羊も、ポロヴェツ人のところへと追い立てて行った。

グレーブ [D178] がベレヤスラヴリから戻って、ポロヴェツ人と会合するためにドニエプル川を渡り、コルスニへ行く途中、ベレペトヴォの平原に到着した。そこで、ポロヴェツ人が会合を待たずに、掠奪に行き、〔城市や村を〕 荒廃させているという報告が、かれにもたらされた。グレーブ [D178] はこれを聞くと、自ら進軍してかれらを攻めようとした。しかし、ベレンディ人が〔公の馬の〕 手綱をとってこう言った。「公よ、行ってはいけません。あなたは、大軍を率いて行くべきです。兄弟たち **【557】** と合流してから。今は、誰か兄弟のうちの一人と、幾らかの〔少数〕のベレンディ人を派遣しなさい」。そこで、グレーブ [D178] は、自分の兄弟のミハルコ [D175] を派遣した。かれとともに、100 人のベレヤスラヴリ人と 1500 人のベレンディ人を〔派遣した〕。ミハルコ [D175] は、兄弟〔グレーブ〕の命令に従った。かれ〔ミハルコ〕の従士たちは、かれと一緒にではなかったために、自分たちの公が出陣するのを、すぐに知ることはできなかった。

13) 「ベレペトヴォの平原」 (Перепетовське поле) は、ストウグナ川 (Стугна) とロシ川 (Рось) の間に広がる平地のこと。[イパーチイ年代記 (4): 340 頁, 注 102] を参照。

14) キエフから公 (グレーブ [D178]) とその従士団が出払っている際に、キエフ郊外の村々を襲撃して掠奪することを呼びかけている。

15) 「聖母教会」と「十分の一税教会」は同じものを指す (上注 1)。次の「ポロニイ」と「セムイチ」の城市は、キエフの「十分の一税教会」 (Десятинная церковь) が所領として直接に管理する裕福な領地だったのだろう。

16) 「ポロニイ」 (Полоний; Полонный) は、ホモラ川 (Хомора) 右岸の城市で、キエフから西南西方向に 220km ほど離れた城市。現在のポロンネ市 (Полонне) に相当する。このポロヴェツによる掠奪 (1169 年春~夏) の後、1170 年の初頭には、ウラジーミル [D115] がこの城市の公に就いている。[イパーチイ年代記 (6): 284 頁, 注 585] 参照。

17) 「セムイチ」 (Сѣмьчъ; Семоц) は、キエフから西に 210km ほど離れた、キエフ公領に属する城市。現在のスイェムツィ市 (Сумці) に相当する。

ミハルコ [D175] は、自分の兄弟グレーブ [D178] と、かれ[グレーブ]の従士たち全員に接吻[の挨拶を]して、ポロヴェツ人の後を追って進軍した。ベレンディ人はミハルコ [D175] とともに、ポロヴェツ人の [通った] 道を、その後を追って進んだ。そして、ポロヴェツ人の斥候部隊を見つけた。その数は 300 人だったが、ひそかに、かれら [斥候兵] を包囲して、不意打ちで撃ち殺した。他の者たちは捕虜にした。

かれ [ミハルコ] は、生け捕りにした [捕虜] を尋問した。「後方には、お前たちの [兵は] 大勢いるのか」。ポロヴェツ人たちは言った。「大勢いる。7000 人である」。われらの [側] は、これを聞いて協議して [次のことを決めた]。「われらが、この者たちを生かしておいても、後方には大勢のポロヴェツ人がいる。われらは小勢である。われらが、かれらと戦えば、この者たちはわれらの最初の敵になるだろう」。こうして、[ミハルコたちは]、かれら [ポロヴェツ人] を、身分の高い者も容赦せず一人残らず殺し、かれらの [ポロヴェツ人の通った] 道を進んで行った。ミハルコ [D175] の軍司令官は、ヤンの兄弟のヴワディスワフ¹⁸⁾ だった。

かれら [ミハルコたち] は、捕虜を連れたポロヴェツ人 [の軍に] 遭遇した。かれらは戦い、これを撃ち破り、相手を殺し、略奪品を取り返した。かれらは、その [敵] を尋問した。「後方には、お前たちの [兵は] 大勢いるのか」。【558】 [ポロヴェツ人は] 言った。「今に後方から大軍がやって来る」。

われらの [軍勢は] 神の助けと聖母によって力を得ていた。かれら [ミハルコたち] は、大軍が来るのを待ち受けて、尊い十字架に望みを掛けて、敵に向かって行った。邪教徒のもとでは槍で武装した兵が 900 人いたが、ルーシのもと¹⁹⁾ では槍で武装した兵は 90 人だった。邪教徒どもは力に望みをかけてわれらの軍に向かって [進み]、われらの軍もかれらに向かって行った。ペレヤスラヴリ人は恐れることなく、ミハルコ [D175] とともに先に進んだ。ベレンディ人は、公 [ミハルコ] の手綱をつかんで、かれを先に行かせようとしなかった。かれら [ベレンディ人] は言った。「あなたたちは先に行ってはならない。あなたたちは、われらの城砦²⁰⁾ である。われらが、射手として先に行こう」。

双方は会戦し、激しく戦った。かれら [ポロヴェツ人] は、われらの旗手を殺し、軍旗の房

18) 「ヴワディスワフ」(Володислав) は、ポーランド出身のキエフの軍司令官 ([イパーチイ年代記 (6): 251 頁, 注 366] 参照) で、このときには、キエフ公グレーブ [D178] に勤務していたのだろう。

19) 「ルーシのもと」(в Руси) ([ラヴレンチイ年代記] の並行記事では у Руси) の表現は、「邪教徒のもと」(у поганых) との対比で用いられており、この「ルーシ人」は、上記の「100 人のペレヤスラヴリ人」を指している。ペレヤスラヴリは「ルーシの地」の代表的な城市だった。

20) 「われわれの城砦」(нашъ городъ) とは、「守り手」を意味する転義的な用法。

飾りを奪い取った²¹⁾。双方は戦いながら混乱した。ヴワディスワフは機転を利かせて、ミハルコ [D175] の軍旗を手にとると、それ〔軍旗〕にかぶり物を取り付けた²²⁾。そして、かれら〔ヴワディスワフたち〕は、集合すると、かれら〔敵軍〕に飛びかかり、ポロヴェツ人の旗手を殺した。〔敵の〕兵士たちは二本の槍でミハルコ [D175] の腿を突き、三本目の槍で腕を突いた。しかし、かれ〔ミハルコ〕の父の祈りによって、神はかれ〔ミハルコ〕を死から救った。〔われらの軍は〕、かつて入江で〔戦ったとき〕²³⁾と同様にかれら〔ポロヴェツ人〕と激しく戦った。そして、ポロヴェツ人たちは、〔このことを〕見て、逃げ始めた。そして、われらの〔軍は〕、かれらの後を追い、ある者は殺し、他の者は捕らえた。1500 人を捕虜として生け捕りにし、残りは殺した。かれら〔ポロヴェツ人〕の侯トグリイ²⁴⁾ (Тоглий) は逃げのびた。

尊い十字架と聖母、領地を占領されていた十分の一税教会の聖母の助けによるものだった。平民への侮辱²⁵⁾が始まったとき、神がかれ〔平民〕への侮辱をゆるさないのであれば、神が御自身の母の家〔教会〕〔への侮辱を許さないことは〕当然である。

21) 当時の軍旗 (стяг) には、馬の毛で作った房飾り (челька стяговая) がその先端に付けられ、自軍の兵士にとっての目印になっていた。これが奪い取られることによって、敵味方の区別が付かなくなって混乱したのである。

22) 軍旗の房飾りの代わりにかぶり物 (прильбиця) を取り付けるとは、兵士たちに味方を判別させるための行動。прильбиця は兜の下に身に付けた帽子のようなものと考えられる。

23) 「かつて入江で〔戦ったとき〕」(якоже преже в луць моря) の「海の入江」は、通常はポロヴェツの本拠地であるドニエプル川及びブグ川下流域の海に面する一帯を指している。ただし、こより前にミハルコを含め、ルーシの諸公が海まで遠征を行ったという記述は年代記にはない。カラムジンは、1168 年にカネフに諸公を集合させたとき ([イパーチイ年代記(6)]:274 頁, 注 520; 275 頁, 注 523)], ギリシア商船の護衛のためにミハルコがドニエプル河口まで派遣されたのではないかと推定している。[Карамзин Т. II-III: прим. 2]

24) 「トグリイ侯」(князь Тоглий) はポロヴェツの部族の首長の名。O. Pritsak によればこれはポロヴェツ侯の個人名ではなく部族名であるという。「トグリイ」ないし「イトグリイ」(Итоглый) の原義は、古チュルク語では「犬の子孫」である。ポロヴェツ部族はドニエプル川中流域で二つに大別され、これらのうち左岸グループの方が右岸グループより優越していて、中でもそれぞれ二つの互いに優劣関係を持つ派閥があるとされる。イトグリ族はそのうち右岸ポロヴェツに部族の属し、その内部派閥においては優位な位置にあった。かれらはブグ川下流域に定住地を持っており、Лукоморские Половцы (入江のポロヴェツ) という通称があった。[Pritsak 1981: pp.1616-1617, 1623]

トグリイの名は年代記ではここが初出だが、1183 年 (もしくは 1184 年) 夏のスヴァトスラフ [C411:G] 等による討伐遠征におけるオレリ川河口の戦いで、かれは捕虜になり、その後買い取られて解放された。1190 年には、トルチェスクの侯 Кунтувдей のもとから逃げて来たスヴァトスラフ公 [C411:G] を保護し、公とともに、ロシ川地域の掠奪を行っている。さらに、1193 年の記事には、ポロヴェツ首長とキエフ公との和議の描写でアクシ (Акуш) とともに、部族連合の長としてイトグリイ (Итоглы) の名が言及されている。

25) この侮辱 (обида) は、一般的な加害という意味で使われている。[イパーチイ年代記(3): 368 頁, 注 196] を参照。

ミハルコ [D175] は、ペレヤスラヴリ人とベレンディ人とともに、キエフに戻って来た。〔かれらは〕ポロヴェツ人に勝利した。キリスト教徒たちは、奴隷の境遇から解放された。捕虜となっていた者たちは、故郷へ帰還した。他のすべてのキリスト教徒は、神とキリスト教徒への速き助け手たる聖母²⁶⁾を讃美した。

この年が終わる頃²⁷⁾、ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] は、〔ヴォルニの〕ヴラジミル²⁸⁾で病気になった。かれの病気は重かった。かれ〔ムスチスラフ〕は、兄弟のヤロスラフ²⁹⁾ [I2] に使者を派遣した。自分の子供たちについて約定を結ぶためであった。かれ〔ムスチスラフ [I1]〕は、兄弟〔ヤロスラフ [I2]〕と無事に約定を結び、〔その遵守を誓う〕十字架に接吻した。これは、〔ヤロスラフ [I2] が〕かれ〔ムスチスラフ〕の息子たちから、策略をもって領地を取り上げないようするためであった³⁰⁾。

ムスチスラフ公 [I1] は 8 月 19 日に逝去した³¹⁾。その遺体は大いなる名誉をもって、ほめ讃える聖歌に送られて布に包まれた。かれの遺体は、かれ自身がヴラジミルに創建した主教座聖

26) 「キリスト教の速き助け手」(скорая помощница роду крестяньску)の文言は聖母(святая Богородица)に献げる祈祷文の中の定型的表現である。

27) 創世紀元の 6680 年の末にという意味で、『イパーチイ年代記』の暦法によれば、1170 年の 2 月～3 月に相当する。

28) ムスチスラフ [I1] は、1169 年 3 月のアンドレイ [D173] の息子ムスチスラフ [D1732] の遠征軍によるキエフ攻撃に耐えられず退去して、このときから根拠地であるヴラジミル・ヴォルインスキイに住んでいた。〔イパーチイ年代記 (6) : 281 頁, 注 564]]

29) 当時、ヤロスラフ [I2] はヴォルニ地方のルチェスク公だった。

30) この約定の効果があつたのか、ヴラジミル=ヴォルインスキイの公座は、13 世紀初頭まではムスチスラフ [I1] の息子や孫たちが占めることになった。

ソロヴィヨフによれば、ヴラジミル=ヴォルインスキイの公座はムスチスラフ [I1] が、1157 年に叔父のウラジミル [D115] から「命をかけて」(実力で) (головую) 奪い取ったものであり、そのような領地については、年長制によらない息子たちへの相続の全面的な権利を主張できたとしている [Соловьев 1988: С. 521-522]。

31) 1170 年 8 月 19 日のこと。『ラヴレンチイ年代記』6678(1170)年の並行記事では「この年の秋、ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] が逝去した。そして、逝去した地である〔ヴォルニの〕ヴラジミルで埋葬された」と記されている。

母教会³²⁾に納棺された³³⁾。

6681 [1173] 年

ロマン・ロスチスラヴィチ [J1] は、兄弟のムスチスラフ [J5] とともに行軍した³⁴⁾。

アンドレイ [D173] は、息子のムスチスラフ [D1732] にすべての従士たちと、ロストフ、スーズダリの全部隊を率いさせて派遣した。リャザンの諸公も派遣した³⁵⁾。ムーロムの諸公も部隊とともに³⁶⁾ [派遣した]。自分の軍司令官ボリス・ジロスラヴィチ (Борис Жирславич) を派遣

32) 『ニコン年代記』の6668(1160)年の項に「ムスチスラフ・イジャスラヴィチが、ヴォルニニ地方のヴラジミルの聖なる教会の壁画を描き、これを飾った」(Мстиславъ Изяславичъ подписа святую церковь въ Володимери Волынскомъ, и украси ю...) [ПСРЛ Т.9, 2000: С. 229]とあり、これは石造りの聖堂を建てたことを言っているのだろう。本記事の「かれ自身が (...) 創建した」(бѣ самъ созда)はこれに対応する。ただし、主教座のある「聖母」(聖母就寝(Успение))に奉献された聖堂は、11世紀後半にはヴラジミルに主教座が置かれていたことから、それ以前から存在していたと考えられる。

なお、12世紀末～13世紀にはこの教会にムスチスラフ [I1] の末裔が埋葬されており、ムスチスラフ一族の菩提寺の役割も果たしていた。

33) なお、ムスチスラフ [I1] の死は1170年8月のことであり、以下に語られる1170年2月のスーズダリ勢によるノヴゴロド攻城戦よりも後の出来事になる。ムスチスラフ死亡記事の配置は、時系列から見ると逆転している。

34) この1170年2月のノヴゴロド遠征のとき、ロマン [J1] はスモレンスク公で、ムスチスラフ [J5] はベルゴロド公か、もしくはスモレンスクの兄ロマン [J1] のもとに身を置いていた。

この一文は、二人の公がノヴゴロド遠征に参加したことを語っている。本来は、アンドレイ [D173] の息子ムスチスラフ [D1732] が指揮する北東ルーシ諸公のノヴゴロド遠征についての資料があったが(『ラヴレンチイ年代記』6677(1169)年の並行記事がそれにあたる)、『イパーチイ年代記』が編集の際に、おそらく、スモレンスクのロマン [J1] とムスチスラフ [J5] の役割と自主性を強調するために、この一文を冒頭に追加したと思われる。そのため、意味が分かりにくくなっている。なお、『ラヴレンチイ年代記』並行記事では、ムスチスラフ・アンドレイヴィチ [D1732] の後に二人のスモレンスク公が言及されている。

35) リャザン諸公が誰を派遣した記されていないが、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では「リャザン公が息子を派遣した」(Рязаньскыи князь сына посла)となっている。その場合、当時のリャザン公はグレーブ・ロスチスラヴィチ [C542:H] と推定される。かれには史料に記されているだけで6人の息子がいたが、この「息子」が誰であるかは特定できない。

36) ムーロム公についても誰を派遣したかわからないが、『ラヴレンチイ年代記』では「ムーロム [公] は息子を派遣した」(Муромьскыи сына же посла)となっている。このムーロム公は、ユーリイ・ウラジーミロヴィチ [C5111] と推定される(下注237, 238参照)。このユーリイにも3人の息子が確認でき、ここの「息子」が誰かは特定できない。

なお、『ノヴゴロド第一年代記』6677(1169)年のこの遠征に関する並行記事では、「ムーロム人とリャザン人と二人の公たちとともに」(с муромци и с рязанци съ двѣма князьма)とあり、ムーロムとリャザンから一人ずつ公が派遣されたことは間違いない。

した³⁷⁾。これらは、ロマン・ムスチスラヴィチ [I11] を討伐するための、大ノヴゴロドへの遠征だった³⁸⁾。これは、非常な大軍であり、数えることができないくらいだった³⁹⁾。

かれらは、かれらの地〔ノヴゴロドの地〕へやって来るや、多くの悪行をなした。村々を掠奪し、焼き、人々を斬り殺し、女、子供、財産を奪い取り、家畜を略取した。こうして、城市〔ノヴゴロド〕へと迫った。ノヴゴロド人は、ロマン公 [I11] とともに城内に立て籠もり、城から激しく戦った。

〔スーズダリ勢の〕部隊が到着したが、城市から離れた場所で陣を張った。そして、部隊を送り、城下で激しく戦った。ムスチスラフ [D1732] は城門の中に入り込み、数人の〔敵の〕要人を〔槍で〕突き刺したが、再び、自分の陣営へと引き返した。そのとき、〔ムスチスラフの〕部隊の中では馬の疫病が大流行したのである⁴⁰⁾。

37) 1169年3月にアンドレイ [D173] が派遣したキエフ遠征軍の中に、ボリス・ジディスラヴィチ (Жидиславич) という軍司令官がいるが ([イパーチイ年代記 (6):287頁, 注537] 参照), このボリス・ジロスラヴィチとおそらく同一人物だろう。この名は『ラヴレンチイ年代記』の並行記事にはなく、『イパーチイ年代記』編集段階での挿入であり、かれを派遣した「自分」とは、アンドレイ [D173] のことと解釈することができる。

38) 『ノヴゴロド第一年代記』6677(1169)年の並行記事には、遠征参加者について、本記事の内容の他に、「トロベチ人」(торопчане) および「ポロツク公とポロツク人」(полоцкый князь с полоцканы) の名があがっている ([НПЛ: С. 221][ノヴゴロド第一年代記 (シノド本) 訳 [II]:28頁])。トロベチ (トロベツ) はスモレンスク領とノヴゴロドの境界に位置し、スモレンスク公がその市民軍を率いてきたのだろう。このポロツク公は、1167年にスモレンスクの公ダヴィド [J3] の手によって復位したフセスラフ [L221] ([イパーチイ年代記 (6):252頁, 注373]) のこと。なお、『ノヴゴロド第一年代記』によれば、アンドレイ [D173] の指示による1169年3月のキエフ懲罰・掠奪遠征にも、ポロツク人が参加している。

39) この遠征と攻城戦については、『ノヴゴロド第一年代記』の6677(1169)年の並行記事では次のように書かれている。「ノヴゴロドの人々はイジャスラフの孫のロマン・ムスチスラヴィチ公 [I11] および市長官ヤクンのまわりをしっかりと打ち固め、町の周囲に木柵を作った。そして (スーズダリ勢は)、日曜日 [1170年2月22日] に城市に会合にやって来て3日間 (2月22日～24日) にわたって会合して互いに条件について交渉を行った。4日目の水曜日 [2月25日] に (かれらは) 実力を行使して進撃し始めた。そして、終日戦ったが、夕方近くにロマン公 [I11] とノヴゴロドの人々が、かれらを打ち負かした。十字架の力と聖母マリアによるもの、および信心深い大主教イリヤの祈りによるものだった。2月25日、聖主教タラシイの日のことである。(ノヴゴロド人は) ある者たちを斬り殺し、他の者たちを捕えた。かれらの残りの者は逃げたが、悲惨だった。」とある。[НПЛ: С. 221][ノヴゴロド第一年代記 (シノド本) 訳 [II]:28頁] 参照。

40) 遠征軍の撤退とその理由を記したこの段落は、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事にはなく、『イパーチイ年代記』における追加挿入である。

なお、このスーズダリ勢によるノヴゴロド攻城戦では、後代に伝説が伝わり、14世紀半ばには、「しるしの聖母」の奇蹟による勝利を中心に戦闘を描いた「ノヴゴロドとスーズダリ人の戦闘についての説話」(Сказание о битве новгородцев с суздальцами) が成立している [БЛДР Т.6: С. 444-449]。ここでは、遠征の理由として、前年にドヴィナ地方での徴税権をめぐる、ノヴゴロド人とスーズダリ人が戦い、ノヴゴロド側の勝利に終わったことへの報復としている。

そして、〔ムスチスラフ側は〕かれら〔ノヴゴロド人〕の城市に対して何もできず、再び、引き返して帰郷した。徒歩でようやく故郷へたどり着いた者もいれば、餓死した者もいた。これらの家来たちにとって、未だかつてこれほどの苦難の遠征はなかった。ある者は大齋の精進期⁴¹⁾にもかかわらず馬肉を食べた。【561】

これは、われらの罪のゆえである。われらは、3年前にノヴゴロドでしるしがあったと聞いた。すべての人がこれを見ていた。ノヴゴロドの3つの教会で、3枚のイコンの聖母が泣いたのである。神の母は、将来ノヴゴロドとその領地が滅亡することを予見した。そして、涙を流して自分の御子に懇願をした。かつての、ソドムとゴモラのようにかれらを滅ぼすのではなく、ニネヴェの民に慈悲を与えたように⁴²⁾〔神がなすようにと〕。そして、そのようになった。われらが見てきたように、神と聖母がご自身の慈悲によって、かれら〔ノヴゴロドの民〕を救ったのだった。なぜなら、かれらはキリスト教徒だったのだから。

ダビデの言葉にはこう書かれている。「主はわたしを厳しくこらしめたが、死に渡すことはなさらなかった」⁴³⁾。まさにそこに〔書かれて〕あるように、〔主なる神は〕ノヴゴロドの人々を、徹底的に懲罰し鎮撫した。かれらの十字架接吻〔の違反〕と傲慢ゆえに、〔災いを〕もたらした。しかし、〔神は〕ご自身の慈悲によって、かれらの城市を救ったのだった。

われらは「ノヴゴロド人は義しい。かれらには、われらの諸公の曾祖父〔先祖〕たちによって（自由が昔から与えられているのだから）⁴⁴⁾」⁴⁵⁾とは言うまい。そうではなく、かれらの中には悪しき不信心が根付いていたのである。すなわち、諸公への十字架〔接吻の誓い〕に違反した。孫や曾孫の代の諸公に対しては、約束してもこれを蔑ろにして、尊い十字架への接吻して諸公に対して〔誓いながら〕、これに違反してきた。主なる神はかれらに対していつまでも我慢してはいなかった。そして罪に対して、〔神は〕篤信のアンドレイ公 [D173] の手によって、〔災いを〕もたらし、しかるべき懲罰を下したのである。

41) 1170年の大齋(Великий пост)の期間は、2月16～3月28日であり、ちょうど北東ルーシ勢のノヴゴロド遠征の時期に当たっていた。

42) 「ソドムとゴモラ」は、ともにヨルダンの低地にあった町。住民たちの道徳的頹廢と罪業ゆえに、神の下した火によって滅ぼされた故事(『創世記』19:24-28)を踏まえている。「ニネヴェ」はアッシリア帝国の首府。その住民は滅亡を預言されたが、改心したために災いから救われた故事(『ヨナ書』3:10)に由来している。

43) 『詩篇』117:18(邦訳118:18)からの引用。

44) 丸括弧の読み(яко издавна суть свобожени)は『イパーチイ年代記』のどの写本にもないが、そのままでは意味がとれないので、脱落と思われる。ここでは『ラヴレンチイ年代記』の並行記事にある読みを補って訳した。

45) カギ括弧の部分はノヴゴロド人の言い分であるが、これについてカラムジンは、『国史』第3巻1章で、ノヴゴロド人がヤロスラフ賢公のキエフ公座奪取を助けた功績(1019年)ゆえに、かれらは公を「自由に選ぶ」権利を獲得したことを指していると解釈している [Карамзин 1991: С. 360]。

この年が終わる頃⁴⁶⁾、〔ノヴゴロド公の〕ロマン [I11]のもとに父〔ムスチスラフ [I1]〕の死の知らせが届いた。ロマン [I11]は、【562】このことを自分の従士たちと、自分の仲間のノヴゴロド人たちに明かした。従士たちは評議をして決め、かれ〔ロマン〕に言った。「公よ、われらはここにいることは出来ません。ヴラジミルにいる兄弟たちのもとへと行って下さい」。かれ〔ロマン〕は、自分の従士たち〔の言葉〕を聞いて、兄弟たちのところへと出発した⁴⁷⁾。

その頃、かれの年少の弟（ウラジー）ミル [I14]が、ベレスチエ (Берестье) で逝去した⁴⁸⁾。

この年、アンドレイ [D173]は、リューリク・ロスチスラヴィチ⁴⁹⁾ [J2]のもとに使者を派遣して、かれに大ノヴゴロドを与えた。リューリク [J2]は、〔スモレンスクへ〕やって来て、自分の領地の管理を自分の兄弟ダヴィド⁵⁰⁾ [J3]に委ねた⁵¹⁾。そして、自分はノヴゴロドへと向かった。

46) この表現は、先のムスチスラフ [I1]の死と葬儀の記事の冒頭とまったく同じであり（上注 27）、内容的にはその続きになっている。編集過程で、上の「スーズダリ勢のノヴゴロド攻城物語」が挿入されたために、記事が分かれたということだろう。

なお、ロマン [I1]は1170年の8月後半には父の死を知ったはずであり、この年（創世紀元の6680年）の末（上注 27）というのは、時間的には整合していない。

47) ロマン [I11]は父ムスチスラフ [I1]の指示によって、スーズダリのアンドレイ [D173]に対抗するノヴゴロド人勢力の支持を受けてノヴゴロド公に就いており（1168年4月）、アンドレイが派遣した、大遠征によるスーズダリ勢の攻撃をなんとか撃退した（1170年2月）とは言え、後ろ盾になっていた父親が没した（1170年8月19日）以上、まだ20歳程度と若い（〔イパーチイ年代記(6): 277頁, 注532]参照）ロマンがノヴゴロドの公位を支えるのは無理であると、従士たちは判断したのである。当時は、キエフ公などの、権威と実力のある公の息子がノヴゴロドの公座に就くことが制度として常態化していた。ロマンがノヴゴロドを退去したのは1170年9月頃のことである。

なお、『ノヴゴロド第一年代記』には、ロマンの退去については別の理由が書かれている。それによれば、この年の秋の不作でノヴゴロドの物価が高騰し、スモレンスクやスーズダリ方面から食料を購入する必要に迫られた。ノヴゴロド人は相談の上、アンドレイ [D173]のもとに和議のための使者を派遣して、ロマンを退去させ、アンドレイにノヴゴロド公の派遣を要請した。その条件を提示することによって、食料調達をはかった、と解釈できる記事の内容になっている。（〔НПЛ: С. 221〕〔ノヴゴロド第一年代記（シノド本）訳〔II〕:28頁〕）

48) ウラジーミル・ムスチスラヴィチ [I14]の名は本年代記では初出である。実際にこの名前であるかものはっきりせず、「〔ウラジー〕ミル」は写本では、миръ とだけ記されている。ここでは、ゴラニンやマフノヴェツ等の翻訳にしたがって、Владимиръ の脱落形と解釈した。

ベレスチエは、1157年にウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181]からムスチスラフ [I1]の手に渡っており、その後、ヴォルニニ公領の中でも小城市であったこの城市は、ムスチスラフ [I1]の年少の息子である「ウラジーミル」 [I14]に譲渡されたと考えることができる。

49) リューリク [J2]は1157年からヴルーチイ (Вручий) (オヴルチ (Овруч)) の公座に就いており、ここがかれの拠点的な領地だった。

50) 当時、ダヴィド [J3]はスモレンスクに公座に就いていた。

51) この部分は、イパーチイ写本は за になっているが、これでは意味がとれないので、フレーブニコフ写本の読み приказа (委ねた) を採用した。リューリク [J2]の「自分の領地」とはヴルーチイ (オヴルチ) の城市とその周辺地のことを指す。

8月8日のことだった⁵²⁾。

この年、イーゴリ⁵³⁾ [C432] に息子が生まれた。10月8日だった。ウラジーミル [C4321] と名付け、洗礼名はピョートルだった⁵⁴⁾。

この年の冬⁵⁵⁾、ポロヴェツ人がキエフ地方に到来した。キエフの向こうの⁵⁶⁾ 多くの村々を襲い、人、家畜、馬を掠奪した。そして、多くの捕虜を連れてポロヴェツ [の地] へと引き上げた。

その時、キエフ公グレーブ [D178] は病気だった⁵⁷⁾。かれは、自分の二人の兄弟、ミハルコ [D175] とフセヴォロド [D177:K] を呼び寄せる⁵⁸⁾ ための使者を派遣した。ミハルコ [D175] とフセヴォロド [D177:K] は、すぐにかれ [グレーブ] のもとにやって来た。かれ [グレーブ] は二人を、ポロヴェツ追討のために派遣した。ミハルコ [D175] とフセヴォロド [D177:K] は、これ [命令] を聞くと、ベレンディ人、トルク人、自分の軍司令官ヴワディスワフ⁵⁹⁾ (Володислав) を引き連れて、急いでポロヴェツ人を追いかけて、ブグ川を渡ったところで追い付いた⁶⁰⁾。【563】かれら [ポ

52) ムスチスラフ [I1] が1170年8月19日で逝去し、その報を受けた息子のロマン [I11] がノヴゴロドを去ったあとでリュリック [J2] がノヴゴロドに向かったことになるのだから、「8月8日」はヴルーチイを出発した時としても、時系列的に矛盾している。『ノヴゴロド第一年代記』6678(1170)年の項には「同じ年、リュリック・ロスチスラヴィチ [J2] がノヴゴロドに入った。10月4日(聖エロフエイの日)だった」とあり、スモレンスク経由で行ったとしても時間がかかりすぎている。リュリックのヴルーチイ出発は、8月末～9月初めくらいではなかったか。

53) イーゴリ [C432] は、1164年に父スヴァトスラフ [C43] が没した後に、セイム川中流域の小城市ブチーヴリの公であったと推定される [Dimnik 2003: p. 122]。かれは、ガーリチ公ヤロスラフ八智公 [A1211] の娘エフロシニヤと結婚しており、ウラジーミル [C4321] は二人の間の息子である。

54) ウラジーミル [C4321] は、イーゴリ [C432] の第一子で、『イーゴリ軍記』の舞台となった1185年のポロヴェツ討伐遠征では父に同行している。誕生日の10月8日(1170年)は聖使徒ペトロの祝祭とは関わらないが、弟のオレーグ [C4322] の洗礼名がパーヴェル(パウロ)であることから(下注365参照)、なんらかの関連は想定できる。[Литвина, Успенский 2006: С. 499]

55) 1170/1171年の冬に相当する。以下の記事にあるように、グレーブ [D178] は1171年1月20日に没していることから、ポロヴェツの再度の襲来は、1170年末～1171年初頭に起こったと考えられる。

56) 「キエフの向こう」(за Киевом) とは、キエフの西から北に広がるキエフ公領のこと。ポロヴェツの地からみれば「向こう側」になる。

57) 下注66にあるように、グレーブ [D178] はまもなく、1171年1月20日に没している。

58) ミハルコ [D175] は公座を持っているトルチェスク(キエフから南方80kmほど)におり、フセヴォロド [D177:K] も兄のミハルコのもとに身を寄せていたと考えられる(上注12参照)。

59) ヴワディスワフは、歴代のキエフ公に勤務していたポーランド人の軍司令官。[イパーチイ年代記(6): 251頁, 注366]参照。

60) この部分から、掠奪遠征を仕掛けたポロヴェツ人は、ブク側下流域に根拠地を持つ「海の入江のポロヴェツ」(лукоморские половцы)ではないかと推定される。

ロヴェツ人]の街道を進み、街道で追い付いた⁶¹⁾。かれら〔ミハルコとフセヴォロド〕は、捕虜を連れた〔ポロヴェツ人〕に遭遇し、かれらと戦った。

ミハルコ [D175] とフセヴォロド [D177:K] は、神の助けによって、ある者を撃ち殺し、他の者を捕虜にした。そして、捕らえた捕虜たちに言った。「後方にはお前たちの味方は多くいるか」。「多くいる」と〔捕虜は〕答えた。ヴワディスワフが言った。「見よ、われらは、この拘留した捕虜を抱えていると滅びてしまう。公よ、かれらを斬り殺すよう命じて下さい」。こうして、全員が斬り殺された。

そして、かれらの後を道を進んだ、再び他の〔敵たち〕に遭遇し、敵と白兵戦となり、激しく戦った。神はミハルコ [D175] とフセヴォロド [D177:K] が邪教徒を討つのを助けた。祖父と父の祈り〔もかれらを助けた〕。

これが起こったのは日曜日のことだった。かれら〔ミハルコ [D175] とフセヴォロド [D177:K]〕は邪教徒を撃ち殺し、他の者は捕虜に獲った。〔ポロヴェツ人の〕捕虜となっていた400人の子供たち⁶²⁾を解放して、帰郷させた。そして、自分たちはキエフに帰還した。そして、〔かれらは〕神と聖母を讃えた。邪教徒との戦いを助けた尊い十字架と殉教聖人〔ボリスとグレーブ〕の力⁶³⁾〔も讃えた〕。

その頃、ユーリイ [D17] の息子にしてウラジーミル [D1] の孫である篤信の公グレーブ [D178] が逝去した。キエフの公座に就いて2年だった⁶⁴⁾。かれは兄弟を愛する公だった。誰であれ、かれが十字架接吻〔で誓いを立てた〕ときには、死ぬまで〔誓いに〕違反することはなかった。温順で善き徳をそなえ、修道院を愛し、修道士たちを尊び、乞食たちに善く施しをしていた。【565】かれの遺体は布で巻かれ、聖救世主修道院に埋葬された。そこは、かれの父〔ユーリイ

61) これ以下のポロヴェツとの戦闘と勝利の描写は、1169年春～夏のミハルコ [D175] によるポロヴェツ討伐の追撃戦の描写と類似点が多い（上注10）。同じ年代記記者が、先の記述をここで流用したと考えるべきだろう。

62) 『ラヴレンチイ年代記』6679(1171)年の項の並行記事では「90人の子供たち」(90 чади)となっている。どちらが正しいかは定めがたい。

63) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事には「邪教徒の戦いを助けた (...) 殉教聖人の力」の部分の文言はない。この部分は、聖ボリスとグレーブ信仰が盛んだった、キエフの年代記記者が『イパーチイ年代記』編集の際に追加した文言だろう。

64) グレーブ [D178] は1169年3月12日にキエフの公座に就き（『イパーチイ年代記』(6)：282頁、注571）、1171年1月20日（下注66）に死去していることから、在位期間は1年10ヶ月ほどになる。

[D17]] が埋葬されている場所だった⁶⁵⁾。グレーブ [D178] が逝去したのは 1 月 20 日⁶⁶⁾ の聖エフィーミー⁶⁷⁾ の祝祭日だった。

この年⁶⁸⁾、公妃⁶⁹⁾ が息子のウラジミルコ [A12111] を連れてガーリチからポーランドへと逃げ出した。クスチャンチン・セロスラヴィチ⁷⁰⁾ (Ксѣянтин Сѣрославичъ) や多くの貴族たちが同行した。その地に 8 ヶ月滞在した⁷¹⁾。

スヴァトボルク⁷²⁾ (Святополкъ) と他の従士たちが〔使者を〕派遣して、「われらは、あなたの公〔ヤロスラフ [A1211]] を捕まえる⁷³⁾ つもりです」と言って、再び〔戻るよう〕かの女を呼び招いた。

ウラジミルコ [A12111] は、スヴァトスラフ・ムスチスラヴィチ⁷⁴⁾ [I13] に使者を派遣して、チェ

65) 「聖救世主修道院」について、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事には、「ベレストヴォの」(на Берестовѣм) という文言がある。この修道院と父ユーレイ [D17] の埋葬については、[イパーチイ年代記 (5): 299 頁, 注 399] を参照。

66) 1171 年の 1 月 20 日のこと。

67) 「聖大エウフィミオス」(377 ~ 437 年) はパレスティナの修道院長。正教会とカトリックの両方で聖人として列されている。

68) 年代記記事の時系列から見ると、1171 年のことと推定される。ただし、ベレジコフは、この記事で 1170 年の出来事としている [Бережков 1963: С. 159]。このガーリチの政争は 1 年ほどの時間の幅があることから、1170 年 ~ 1171 年に起こった事態ということか。

69) ガーリチ公ヤロスラフ [A1211] (八智公) の妃のこと。かの女はユーレイ手長公 [D17] の娘オリガ (Ольга) (下注 152 参照) で、1150 年にヤロスラフに嫁いでいる。([イパーチイ年代記 (4): 333 頁, 注 62] 参照)。

70) 「クスチャンチン・セロスラヴィチ」(Ксѣянтин Сѣрославич) は、ガーリチ公ヤロスラフ [A1211] 配下の軍司令官で、「公」に匹敵するほどの権力を持った上級貴族だった。

この人物はこれまで何度も、その名が登場している。一度目は 1157 年にイワン・ベルラドニクの身柄をユーレイ [D17] から引き取ろうとしてヤロスラフ [A1211] が派遣した貴族として登場しており ([イパーチイ年代記 (5): 298 頁, 注 395])、二度目は 1160 年、スヴァトスラフ [C43] がスヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341] を討伐しに遠征に出たときに同盟したガーリチ人を率いていた軍司令官として ([イパーチイ年代記 (6): 220 頁, 注 179]) 登場している。さらに、1170 年初頭のムスチスラフ [I1] によるヴィシェゴロド包囲攻撃にときに、援軍として駆けつけた「クスチャチン」(Ксѣянтин) と同じ人物だろう ([イパーチイ年代記 (6): 287 頁, 注 616])。

71) А・マイオーロフによれば、二人は「ポーランドへと逃げ出し」て、クラクフに滞在していたのではないかと推定している。[Майоров 2001: С. 256]

72) この「スヴァトボルク」は公ではなく、ガーリチに残留した公妃派の貴族の一人だろう。

73) 「捕まえる」(иметь) とは、以下の事件の進展に見るように、残留した公妃派の貴族グループが公を逮捕して、公妃と正常な関係を保つことを強引に公に誓わせるということが想定されている。

74) スヴァトスラフ・ムスチスラヴィチ [I13] についてはここが初出。1170 年 8 月に死去したヴォルニのヴラジミル公ムスチスラフ [I1] の息子で、このときは父親の跡を襲ってヴラジミルの公座に就き、ヴォルニ地方を支配していたのではないかと推定される。それゆえ、ウラジミルコ [A12111] は、かれと、当時はヴラジミル公の支配下にあったチェルヴェンの領有交渉を行ったのである [СЭ-2: С. 333]。

ルヴェン⁷⁵⁾ (Червѣн) [の領有] を求めて [こう言った]。「どうか、わたしがその [チェルヴェンの] 公座に就けますように。そうすれば、都合良くガーリチに [軍隊を] 派遣できます。もし、わたしがガーリチの公座に就いたなら、あなたにブージェスク⁷⁶⁾ (Бужьск) を返還します。3つの城市⁷⁷⁾ も加えて [返還します]」。スヴァトスラフ [I13] は、[チェルヴェン] をかれ [ウラジミルコ] に与え、十字架接吻して、かれを援助することを [誓った]。

ウラジミルコ [A12111] はチェルヴェンへ向けて出発した。母親も一緒だった。[その道中で] かれ [ウラジミルコ] は、ガーリチのスヴァトボルクからの知らせを受け取った。「急いで来て下さい。われらは、あなたの父親 [ヤロスラフ [A1211]] を捕らえました。その仲間であるチャルゴ一族⁷⁸⁾ (Чаргова чадь) を打ち殺しました。見よ、あなたにとっての敵はナスタシカ⁷⁹⁾ (Настаська) なのです」。ガーリチ人はかの女を火あぶり⁸⁰⁾ にして、その息子⁸¹⁾ を [獄舎に] 送

75) 「チェルヴェン」(Червен) は、ウラジミルから南西へ約 49km 離れたポーランド国境にあるヴォルニニ地方の城市。ガーリチとの境界線にも近く、ガーリチに遠征軍を派遣する拠点としては好適な位置にあった。

76) 「ブージェスク」(Бужьск) ブグ川上流域の城市。1152年の記事から、古来この城市とその周辺のブグ川流域の諸都市は、ヴォルニニ公領に属すると考えられていたが、ウラジミルコ [A121] 以来、ガーリチ公が所有していた。([イパーチイ年代記 (5) : 20 頁, 注 102] 参照)。

77) このブージェスク (Бужьск) の他に「3つの城市」とは、ヤロスラフ [A1211] の父ウラジミルコ [A121] が、ウラジミル・ヴォルィンスキイ公イジャスラフ [D112:I] に返還を約束しながら、果たしてこなかった、シュメスク (Шюмеск), ティホムリ (Тихомль), ヴィゴシエフ (Выгошев), グノイニツァ (Гноиниця) のうちのいずれかを指していることは明らかである。父ウラジミルコ [A121] の死のエピソード (1152/1153 年冬) の中でも、ガーリチ公が約束した諸城市の返還がなされていないことが言及されている。([イパーチイ年代記 (5) : 注 117, 172] を参照)

78) 「チャルゴ一族」(Чаргова чадь) については不祥だが、ヤロスラフ公 [A1211] に強い影響力を持っていた集団だった。これを、次注の公の側妻「ナスタシカ」の出身部族と考える説もある ([Войтович 2006: C. 350] など)。フロヤノフはこの出身部族説を排して、ヤロスラフ公の個人的な親衛隊を構成する異族だったのではないかと推定している ([Фроянов 2012: C. 497])。

なお、本年代記 6677(1169)年の項 (1167 年春～秋) にウラジミル [D115] が同盟を結んでいたベレンディ人の部族の一つとして「チャゴ一族」(Чарговичи) が、言及されている [イパーチイ年代記 (6): 267 頁, 注 471]。音の類似性から見て、ヤロスラフに勤務していたこのような異民族を指している可能性もある。([Пашут 1968 : C. 333] 参照)

79) 「ナスタシカ」(Настаська) は女性名「アナスタシヤ」(Анастасия) の単称。ヤロスラフ八智公 [A1211] の側妻。教会法では認められていないかの女が存在と行動が、貴族たちの背離の原因となったのだろう。

80) 通常火刑は、異端など教会法における重い「罪」(грех) への罰則としてなされている。ナスタシカもおそらくは姦淫罪など、教会法によって裁かれたのではないか。ただし、フロヤノフはこの背景に、騒乱を起こした民衆の「魔女狩り」としての異教的な風習を見ている。([Фроянов 2012: C. 497-498])

81) ヤロスラフ [A1211] とナスタシカの間の息子で、本年代記の 1187 年の記事によって、オレーグ [A12112] という名であることが確認できる ([СЭ-2: C. 83] 参照)。ヤロスラフが、正妻の子ウラジミルコ [A12111] よりも、このオレーグをを寵愛していたことは、かれの死後、1187 年にガーリチ公位を継いだのがオレーグの方であったことからもうかがえる。

り幽閉した。そして、公〔ヤロスラフ [A1211]〕を十字架に導いて、信義を守って公妃を処遇することを誓わせた。こうして秩序を取り戻した⁸²⁾。

この年の冬⁸³⁾、アンドレイ公 [D173] は、息子のムスチスラフ [D1732] をブルガール人討伐のために派遣した⁸⁴⁾。ムーロムの公も息子を派遣し、【566】リャザンの公も息子を派遣した⁸⁵⁾。この人々にとって遠征は快適なものではなかった。なぜなら、冬にブルガール人を掠奪するのは、よい時期ではなかったからである。進もうとしても、前に進まなかった。公〔ムスチスラフ [D1732]〕はゴロデツ⁸⁶⁾ (Городыц) に滞在し、それから、自分の兄弟であるムーロムとリャザンの〔公たち〕とオカ川河口で合流して、2週間のあいだ自分の従士たちの到着を待った。しかし、待ちきれずに、側近の従士たちとともに出発した。その時、軍司令官のボリス・ジディスラヴィチ⁸⁷⁾ (Борис Жидиславичь) が同行していた。すべての軍装を整えて、知られないように邪教徒のところへと侵攻し、6つの村と城市そのものを占領した。男は斬り殺し、女と子供

82) この政争の原因については諸説あるが、これを資料広く検討したフロヤーノフは、ヤロスラフ公とガーリチの有力貴族の間の対立よりも市民層 (община) の公への反発を見ており、ウラジミルコ [A1211] とその母 (公妃オリガ) は、これを利用して父ヤロスラフの公位を転覆しようとはかった可能性を指摘している。しかし、市民主導の反乱によって政争の元凶だったナスタシカと支持者が排除されたことから、帰国したウラジミルコと母は、ヤロスラフ公の「反省」で満足せざるを得なくなったと言っているのである [Фроянов 2012: С. 494-496]。

なお、公妃オリガは、その後ヤロスラフのもとを離れて、実家であるヴラジミル〔クリャジマ河畔〕のフセヴォロド公 [D177:K] のもとに身を寄せ、そこで 1181 年に没している。

83) 記事の時系列から見ると 1170/1171 年の冬と考えられる。ただし、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事が、6680(1172) 年の項にあることから、1171/1172 年冬の出来事の記事が編集の混乱によってここに置かれた可能性もある。

84) ヴォルガ・ブルガール人が居住していたのはカマ川やヴォルガ川の周辺で、現在のカザンの付近である。この地方は大陸性気候で冬は厳寒となる傾向があり、本遠征も軍事行動を起こしやすい冬季に行う掠奪遠征のひとつと考えられる。

なお、『ラヴレンチイ年代記』6672(1164) 年の記事によれば、アンドレイ [D173] は、この年に息子のイジャスラフ [D1731]、ヤロスラフ [D176] とともに、カマ川沿岸のブルガール人討伐遠征を行っている。また、1120 年にもユーリイ [D17] による遠征が行われた記録があり、地理的に近いウラジーミル・スズダリ地方の公との関わりが強かった。後にはフセヴォロド [D177:K] もヴォルガ・ブルガールに対する遠征をたびたび行っている。

85) この表現は、1170 年 2 月のアンドレイ [D173] の命令によるノヴゴロド遠征の文言と同じである。上注 35 と 36 を参照。なお、マフノヴェツはウクライナ語訳で、派遣されたムーロム公の息子をウラジーミル・ユーリエヴィチ [C51111]、リャザン公の息子をロマン・グレーボヴィチ [H2] とそれぞれ同定しているが、その根拠は不明。

86) 「ゴロデツ」(Городыц) は、オカ川の河口 (現在のニージニイ・ノヴゴロド) から上流へ 47km ほど遡ったところにある城砦で集合地点としては最適だった。現在も同名の都市である。

87) アンドレイ [D173] 配下の軍司令官。上注 37 参照。

は捕虜に獲った。

ブルガール人は、ムスチスラフ公 [D1732] が少数の従士だけで来襲し、捕虜を獲って戻ろうとしていることを聞くと、たちまち武装して、6千の兵をもって後を追いかけ、わずかな距離を残して追い付かなかった。20 露里離れたところで、ムスチスラフ [D1732] は小勢の従士とともに〔オカ川の〕河口にいた。かれ〔ムスチスラフ〕は、すべての従士たちを、手元から去らせていた。ところが、神は邪教徒どもをかれから追い払い、自らの手でキリスト教徒を庇護したのである。

われら〔スーズダリ人〕はこのことを聞いて、神を讚美した。〔神は〕明らかに邪教徒から守ったからである。聖母とキリスト教徒の祈りも〔守った〕。こうして、邪教徒は引き上げて行き、**[567]** キリスト教徒たちは、神といとも浄き聖母を称賛して、帰還して行った。

この年⁸⁸⁾、ダヴィド [J3] とムスチスラフ [J5] の二人は⁸⁹⁾、ドロゴブージュ (Дорогобужь)⁹⁰⁾ の自分の叔父〔ウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115]〕のもとに使者を派遣して、キエフの公座に就くようかれを招いた⁹¹⁾。

かれ〔ウラジーミル [D115]〕は、自分が十字架〔接吻によって誓った〕誓約相手⁹²⁾ のヤロ

88) 「この年」とは 1171 年 1 月 20 日にキエフ公グレーブ [D178] が死去した直後の時期を指している。

以下のウラジーミル [D115] のキエフ公就位についての記事は、編集の過程でスーズダリ関連記事に挟まれたもので、内容的には、先のグレーブ公の死亡記事からの続きになっている。

89) 当時、ダヴィド [J3] はヴィシエゴロドに公座を保持していた。ムスチスラフ [J5] も年少の公として、兄ダヴィドの領地であるヴィシエゴロドにいたか、あるいは、すでにベルゴロドにいた可能性もある。

90) ドロゴブージュは、ゴリニ川 (Горинь) 中流左岸の城市。ここは、1152 年以降、ウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] が拠点とする旧領だったが、1167 年春にウラジーミル・アンドレヴィチ [D181] に奪われていた。1170 年 1 月に後者が没すると、ウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] は、たちまちドロゴブージュの城市を占領し、故人の妃を追放して自分の領地として回復した。

91) ウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] は、モノマフ一族の諸公の中では年長の世代に属する公だった。ダヴィド [J3] は、キエフ公位をめぐるムスチスラフ [I1] とウラジーミル [D115] の確執においては、前者に与して、後者を裏切ったことなどもあったが、この度はキエフ公位就位の年長制原則を奉じて、ウラジーミル [D115] のキエフ公就位を推戴・支援する立場に立っている。この「招いた」(ваблячи; вабити) の語は「餌で獲物を招き寄せる」という意味合いをもっており、アンドレイ [D173] などの有力諸公には知らせずに、策略をもってなされたと理解できる。ダヴィド [J3] は、ウラジーミル [D115] をキエフ公に据えることで、兄のロマン [J1] に対抗して、次期のキエフ公位を狙っていたのではないだろうか。

92) 「誓約相手」には ротник という、通常は異教徒の誓約相手を指す語が用いられているが、これは、ウラジーミル [D115] が誓約違反の常習者であることを強調する侮蔑的な意図によるもの。

スラフ・ムスチスラヴィチ [I2] との約束を破って⁹³⁾、密かにキエフへと向かった。自分の息子ムスチスラフ [D1151] をドロゴブージの公座に据えた。

ウラジーミル [D115] のキエフにおける公支配の始まり。

ウラジーミル [D115] は、キエフの公座に就いた。乳酪の週⁹⁴⁾の2月15日のことだった。

アンドレイ [D173] は、ウラジーミル [D115] の〔キエフの〕公座就位を気に入らず、かれに反対する使者を派遣して、キエフから去るよう指示し、ロマン・ロスチスラヴィチ [J1] にキエフに行くよう命じた⁹⁵⁾。

この年、篤信の公ムスチスラフ・アンドレエヴィチ [D1732] が逝去した。3月28日火曜日⁹⁶⁾のことだった。遺体はヴラジミルの聖母教会に埋葬された。その聖堂は、かれの父アンドレイ [D173] が創建したものだ。かれの父とスーズダリの全土が、かれの死を悼んで泣いた。

93) ここで言っている誓約とは、本年代記の6680(1172)年の項の最初の記事にある、ムスチスラフ [I1] が大軍を率いてキエフへ入城した(1170年2月)ときに、ウラジーミル [D115] を初めとする同盟諸公(ヤロスラフ [I2], ムスチスラフ [F113], スヴァトポルク [B3213], ガーリチの軍司令官クスチャニン)及びキエフ人と結んだ約定の際の誓約を指している ([イパーチイ年代記 (6): 286 頁, 注 607] 参照)。この記事には誓約の詳しい内容は記されていないが、ムスチスラフ [I1] がキエフ公位に就いた後の、領地の配分と公位の継承について話し合われたと推定することができる。

94) キエフ公グレーブ [D178] が1171年1月20日に死去してすぐの、ウラジーミル [D115] のキエフ公位就位だから、1171年の2月15日のことになる。「乳酪の週」(масленая неделя) (通称マスレニツァ(масленица))とは、大齋(великий пост)に入る直前の一週間を指している。ただし、1171年の乳酪の週は2月1日~2月7日に当たっていることから、2月15日の日付と教会暦の日付は符合していない。マフノヴェツが指摘しているように、これは「2月5日」の誤記の可能性が高い。

95) このとき、ロマン [J1] はスモレンスク公だった。かれは、1170年2月のノヴゴロド攻城戦に参加するなど、アンドレイ [D173] の陣営における有力な公だった。「キエフに行く」(йти Киеву)とは、軍を率いてキエフを包囲し、和議に持ち込んで、キエフ公位の引き渡しを要求することを指している。以下に見るように、実際にはウラジーミル [D115] の死によって、ロマン [J1] は無条件でキエフの公位に就くことができた。

96) 1172年の3月28日のことで、火曜日に当たっている。前の記事のウラジーミル [D115] のキエフ公就位と、後の記事にあるかれの死は1171年2月~5月の事件であるので、それより1年あとの出来事の記事がここに挿入されており、時系列が混乱していることが分かる。

この年の冬⁹⁷⁾、リユーリク [J2] がノヴゴロドから立ち去った⁹⁸⁾。その後、ノヴゴロド人は、スーズダリのアンドレイ [D173] 公に使者を派遣した。〔アンドレイは〕かれら〔ノヴゴロド人〕に自分の子ユーレイ [D1733] を与えた。かれ〔ユーレイ〕は名誉をもって受け入れられた⁹⁹⁾。

リユーリク [J2] は、ノヴゴロドから行き、さらにスモレンスクから行った¹⁰⁰⁾。かれがルーチン¹⁰¹⁾ (Лучин) に滞在していた時、柳の週の日曜日¹⁰²⁾、日の出の頃に、かれに息子が生まれた。洗礼名は祖父¹⁰³⁾ の名をとってミハイルとし、公としての名も祖父の名をとってロスチスラフ [J21] とした。その誕生に大きな喜びが湧いた。かれの父〔リユーリク [J2]〕はかれ〔ロスチスラフ [J121]〕に、誕生の地であるルーチンを与えた。そして、その生まれた場所に、聖ミハイル教会を創建した。

6682 [1174] 年

ウラジーミル [D115] は重病になり、5月30日に亡くなった。逝去したのは、ルサリアの週

97) 1171/1172年冬の事。リユーリクのノヴゴロド退去は、1172年2月～3月と推定できる。前注と同様に時系列の混乱がある。

98) 『ノヴゴロド第一年代記』6679(1171)年の項には「リユーリクはノヴゴロドを出た」(иде Рюрикъ из Новгорода)とあり、『ラヴレンチイ年代記』の6682(1174)年の並行記事では「リユーリクはノヴゴロドから逃げ出した」(Выбъже Рюрикъ из Новгорода)とある。リユーリク [J2] のノヴゴロド退去は、ノヴゴロド内部の親アンドレイ [D173] の貴族によって半ば追放されたか、あるいは、アンドレイ [D173] の間接的な指示によるものだろう。

99) ユーレイ・アンドレエヴィチ [D1733] のノヴゴロド公就任については、『ノヴゴロド第一年代記』6680(1172)年の記事にも「ユーレイ [D17] の孫、ユーレイ・アンドレエヴィチ [D1733] がノヴゴロドに到着した」とある。記事の年紀から見て、ユーレイ [D1733] がノヴゴロドに到着したのは、1172年の春(3月以降)のことだろう。本年代記の「アンドレイ殺害物語」の直後に、「年少の一人息子はノヴゴロドに」いる(下注316とあることから、父親の名代としての名目的な統治だったのだろう)。

100) リユーリク [J2] はノヴゴロドを出て、兄弟ロマン [J1] のいるスモレンスクへ行った。ルーチン(次注)は、その途上に位置している。

101) 「ルーチン」(Лучин)は、は、スモレンスクの北100kmの地点に位置する、スモレンスク公領の城市。ノヴゴロドからスモレンスクに向かう途中にあった。

102) 「柳の週」(вербная неделя)とは、「主のエルサレム入城」(Вход Господень в Иерусалим)の祝祭日(民間では「柳の日曜日」(неделя ваий, вербное воскресенье)と言う)で終わる一週間のことを言い、1172年は4月3日～4月9日に相当した。その金曜日は4月7日である。

103) ロスチスラフ [J21] の祖父は、ロスチスラフ・ムスチスラヴィチ [D116:J]。その洗礼名については、本年代記6676(1168)年の項に、死に臨んでのかれ自身の祈りが記されており、そこに「罪深い僕であるわたし、ミハイルを憐れみ給え」とあり、「ミハイル」であることが確認できる。[イバーチイ年代記(6):260頁、注417]参照。

の日曜日¹⁰⁴⁾ だった。かれの遺体は、かれの父〔ムスチスラフ [D11]〕の修道院である聖テオドロス修道院¹⁰⁵⁾ に埋葬された。かれがキエフの公座に就いていたのは全部で4ヶ月だった¹⁰⁶⁾。

見よ、かれは多くの災いを引き受けた。かれはムスチスラフ [I1] を前にして逃げ回り、ときにガーリチへ、ときにハンガリーへ¹⁰⁷⁾、ときにリャザンへ、ときにポロヴェツ人のところへ¹⁰⁸⁾ と、自分のせいで行くことになった。なぜなら、十字架接吻〔の誓い〕を守らず、いつも何かを追いかけていたからである。

104) 「ルサリアの週」(русальная неделя) は、移動祭日である五旬節(пятидесятница)の翌日から始まる一週間を指し、その最終日は、五旬節の一週間後で教会暦の「万聖節の日曜日」(Неделя всех святых)に相当する。1171年だと、5月18日~23日で、その「日曜日」(в недѣлю)は、5月23日にあたり、記事の日付である5月30日と一週間食い違っている。フレーブニコフ写本では「5月10日の月曜日に逝去した」となっており、1171年の出来事とすればこちらの曜日と日付は合致している。ただし、この日はルサリアの週にはあたらぬ。

この死亡記事では、「亡くなった」(сконьчася)と「逝去した」(прѣставися)と同じ意味の動詞がダブっており、由来の異なる二つの資料を組み合わせたことが想定される。記事の日付と教会暦による日付の食い違いも、資料の違いによるものかもしれない。

なお、ウラジーミル [D115] は、1132年に生まれているので ([イパーチイ年代記(2):306頁,注119]) 没したときの年齢は40歳だった。

105) ムスチスラフ [D11] が1129年にキエフ城内のウラジーミル区に創建した修道院。1154年にウラジーミル [D115] の兄イジャスラフ [D112:I] が逝去したときも、この修道院に埋葬されており、ムスチスラフ一族の菩提寺としての役割を担っていた。[イパーチイ年代記(2):303頁,注109]参照。

106) 本年代記の日付によれば、1171年の2月15日に公座に就き、5月30日に死亡したので在位期間は3ヶ月半ということになる。

107) 1156年にムスチスラフ [I1] の襲撃を受けたウラジーミル [D115] がペレムィシェリからハンガリーへと逃走したことを指している (イパーチイ年代記(5):292頁]参照)。

108) 1158年~1159年に、ヴォルィニ地方の所領をムスチスラフ [I1] に奪われたウラジーミル [D115] は、イジャスラフ [C35] がキエフ公になって以来、かれに同行して、ポロヴェツ人と同盟したり、ヴァティチの地の先、すなわちリャザン地方まで行ったことを指している。[イパーチイ年代記(6):206頁,注94]参照。

この年、アンドレイ [D173] は、使者をロスチスラフ一族¹⁰⁹⁾のもとに派遣して、こう言った。「そなたたちは、わしを自分たちの父親と見なすと言った。わしもそなたたちに善きことを望む。そなたたちの兄であるロマン [J1] にキエフを与えよう¹¹⁰⁾」。

そして、〔アンドレイは〕[568]スモレンスクへ、ロマン [J1] を呼び出すための使者を派遣した。ロマン [J1] はキエフへとやって来た。十字架をかれの手に出迎えたのは、府主教¹¹¹⁾、掌院、洞窟修道院の典院¹¹²⁾、他のすべての修道院の典院だった。すべてのキエフ人、かれの兄弟〔諸公〕たち〔も出迎えた〕¹¹³⁾。

ロマン・ロスチスラヴィチ [J1] のキエフにおける公支配の始まり。

ロマン公 [J1] はキエフに入城すると、その父と祖父の公座に就いた。そして、息子のヤロポルク [J11] にスモレンスクを与えた。すべての人々はロマン [J1] の公座就位を喜んだ。ロマン [J1] がキエフの公座に就いたのは7月¹¹⁴⁾ だった。

109) 「ロスチスラフ一族」は Ростиславичи の訳語で、文字通りは「ロスチスラフの息子たち」の意味で、「ロスチスラフ」はロスチスラフ・ムスチスラヴィチ [D116:J] のこと。ここでは、「息子たち」が誰を指すか書いていないが、先にアンドレイ [D173] は、リュウリク [J2] にノヴゴロドを〈与え〉、またロマン [J1] にはキエフに行くように〈命ずる〉など〈父親〉として振る舞っていることから、この二人を含むことは疑いない。他の息子であるダヴィド [J3] やムスチスラフ [J5] にも使者を派遣したかどうかは不明である。

「ロスチスラフ一族」(Ростиславич) の表現はこが初出だが、この表現は以下の年代記記述に類出する。これ以降の記事を書いた本年代記記者が、ロスチスラフの息子（おそらくリュウリク [J2]）に近い者であり、一族の団結を示すために、「オレーグ一族」(Ольговичи) などの表現に倣って、この表現を用いていると考えられる。なお、北東地方で編集された『ラヴレンチイ年代記』では、この表現は用いられていない。

110) このアンドレイ [D173] の言葉は、キエフ大公位がもはや、伝統的な原則に基づいて一族の「年長者」に属するものではなく、自分の命令によって分け与えるものになったこと、一族の権力継承の原則が変わったことを明確に示している。

111) 当時のキエフ府主教はコンスタンチン(Константин)。イジャスラフ [D112:I] が擁立したルーシ人府主教クリメントの後を襲って、1156年にユーリイ [D17] の支持でキエフ府主教に赴任している。かれは厳しい戒律主義の路線を取っており、しばしば世俗公を巻き込む政争に発展した。

112) 当時の洞窟修道院典院はポリカルプ(就任は1164年)。ロマン [J1] の父ロスチスラフ [D116:J] の死(1167年3月)に関するエピソードの中で、ポリカルプとロスチスラフが懇意の仲であったことが示唆されている。

113) 『ラヴレンチイ年代記』6680(1172)年の項の並行記事では「その年の冬、アンドレイ公 [D173] は、ロマン・ロスチスラヴィチ [J1] を公支配のためにキエフへと派遣した。キエフ人はかれ〔ロマン〕を名誉をもって受け入れた」とある。ただし、以下の『イパーチイ年代記』の記事にあるように、ロマン [J1] がキエフ公位に就いたのは7月(1171年)のことなので、並行記事の「その年の冬」は誤記か、あるいは、ウラジミール [D115] がキエフ公位に就いた直後のアンドレイ [D173] の行動(1171年2月下旬頃)(上注95参照)と混同しているのだろう。

114) 1171年7月に相当する。

その頃、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] がチェルニゴフの公座に就き¹¹⁵⁾、ロマン [J1] がキエフの公座に就いていた時、ポロヴェツ人がロシ川流域 (по Рьси) で悪事を始めた¹¹⁶⁾。

その頃、ヤロスラフ¹¹⁷⁾ [C412] に息子が生まれた。ロスチスラフ [C412I] と命名し、洗礼名はイワンだった。それは、洗礼者ヨハネの誕生の祭日¹¹⁸⁾ に生まれたからである。

この年のペトロ [・パウロ] の祭日¹¹⁹⁾ に、イーゴリ・スヴァトスラヴィチ [C432] は、自分の部隊を集めて、ヴォルスコル川 (Ворьскол) の向こうの原野へ行った¹²⁰⁾。そこでポロヴェツ人に遭遇し、情報をとるための捕虜を捕まえた。捕虜になった者は、かれ [イーゴリ] に、コビャク¹²¹⁾ (Кобякъ) とコンチャク (Концакъ) が、ペレヤスラヴリへ向けて進軍していると語った¹²²⁾。イーゴリ [C432] はこれを聞くと、ポロヴェツ人を迎撃するために軍を進めた。ルタヴァ¹²³⁾ (Лтава) でヴォルスコル川を渡り、**[569]** ペレヤスラヴリへと向かった¹²⁴⁾。そして、ポロヴェツ人の部隊と遭遇したが小競り合い程度だった。かれら [ポロヴェツ人] は、イーゴリに対抗して陣を張ることをせず、捕まえた捕虜たちをすべて置き去りにしたまま逃げ出した。かれら

115) スヴァトスラフ [C411:G] は 1164 年以降、チェルニゴフの公座に就いている。[イパーチイ年代記 (6) : 244 頁, 注 330]

116) これまでポロヴェツ人はキエフ公の交替の機会に、キエフ公領の境界地帯に出現し、掠奪や和平交渉を行ってきた。今回もそのような行動の一つと考えられる。ドニエプル右岸の一角の掠奪であることから、すぐ後に述べられるコビャクとコンチャクによる遠征とは別の部族によるものと思われる。

117) ヤロスラフ [C412] は 1164 年以降、スタロドゥーブの公座に就いていたか。

118) 「洗礼者ヨハネ生誕祭」(Рождество Ивана Крестителя) は 6 月 24 日である。年代は記事の時系列から判断すると、1172 年のことだろう。

119) 6 月 29 日に相当する。これも、1172 年のことだろう。

120) イーゴリ [C432] は当時ブチーヴリ公だった可能性が高い (上注 53)。その場合、ヴォルスクラ川及び北ドネツ川上流域の原野 (поле) と呼んでいる一角までは、130km ほど行軍しなければならず、ルタヴァまでなら 200km 近く離れていた。

121) 「コビャク」(Кобякъ) はドニエプル左岸下流域のポロヴェツ部族連合の首長で、本年代記ではここが初出。コンチャクの部族連合と接しており、ここでもコンチャクに合流して共同の行動をとっている。[Энциклопедия СПИ-3: С.51]

122) コンチャクは北ドネツ川中流域の「原野のポロヴェツ」の首長 ([イパーチイ年代記 (6) : 287 頁, 注 614] 参照)

123) ポロヴェツ人が北ドネツ川からペレヤスラヴリへ向かうためには、ヴォルスクラ川を渡らなければならない。「ルタヴァ」(Лтава) はヴォルスクラ川河口から 85km ほど遡った地点にルーシ勢が築いた最前線の城砦。

124) いったんヴォルスクラ川を渡ったイーゴリ [C432] の軍勢は、すでにペレヤスラヴリへと追っているコビャク = コンチャク連合軍を追いかけるように、ルタヴァで再度渡河して、ペレヤスラヴリへと向かったのである。

は、セレブリャニイ¹²⁵⁾ (Серебряный) とバルーチ¹²⁶⁾ (Баруч) で掠奪して〔捕虜を獲ったのである〕。イーゴリ [C432] の従士たちは追いかけて、ある者は撃ち殺し、他の者は捕虜とした。こうして、預言者聖エリアの日¹²⁷⁾ に、神はキリスト教徒をお助けになったのである。

〔イーゴリ [C432] は〕、聖殉教者ボリスとグレーブの祝日に間に合わせようと¹²⁸⁾、ペレヤスラヴリから出発したが、〔祝日の〕前日は間に合わずに、〔当日の〕晩課が過ぎたところに〔キエフに〕到着した。翌日、〔イーゴリ [C432]〕は、諸公や家臣たちに捕獲品の分け前¹²⁹⁾ を与え始めた。こうして、ロマン [J1]、リューリク [J2]、ムスチスラフ [J5] もかれ〔イーゴリ [C432]〕に贈物を与え¹³⁰⁾、かれを帰郷させた。

この年¹³¹⁾、アンドレイ [D173] は、ロスチスラフ一族¹³²⁾ の罪を問うた。かれらのもとにミフン¹³³⁾ (Михн) を使者として派遣して、こう言った。「わしにグリゴリ・ホトヴィチ¹³⁴⁾ (Григорь Хотович)、ステパネツ (Степанец)、オレクサ・スヴャトスラヴェツ (Олекса Святославец) を引

125) 「セレブリャニイ」 (Серебряный) はペレヤスラヴリ公領スーラ川上流域の城砦都市で、ペレヤスラヴリからだ北東に 130km ほど隔たっている。現在のチェルニヒウ州スリヴネ市 (Срібне) に相当する。

126) 「バルーチ」 (Баруч) はバルーチ (Баручь) は、ペレヤスラヴリから北に 40km ほどに位置する公領の城砦都市。現在のキエフ州バリシフカ村 (Барішівка) に相当する。セレブリャニイからだ、さらに 130km ほど西に進まないと到達しない。

127) 1172 年 7 月 20 日に相当する。日付から見て、バルーチでの戦闘で勝利した日と推定できる。その後イーゴリは 4 日かけてペレヤスラヴリ経由でキエフへと急いだのである。

128) 1172 年 7 月 24 日に相当する。諸公の庇護者とされる聖ボリス＝グレーブ公の日は特別な祝日だった。イーゴリはこの日の奉事（前夜に行われる）に間に合うようにキエフ入城を急いだのである。

129) 「捕獲品の分け前」は原文では *саигат* で、チュルク語系の語彙と推定される。

130) リューリク [J2] はヴルーチイから、ムスチスラフ [J5] はベルゴロドから、キエフに来て滞在していたのであろう。そこで、ロスチスラフ一族とイーゴリ [C432] の間で贈物（戦利品）の交換の儀礼が行われたのである。

131) この事件は、およそ 1172 年の後半に起こったと考えられる。下注 136 を参照。ただし、ベレジコフは 1173 年初めのこととしている [Goranin 1994: p. 196, n. 15][Бережков 1963: с. 189]

132) ここでは、リューリク [J2]、ダヴィド [J3]、ムスチスラフ [J5] を指している。

133) 「ミフン」は、後の記事（下注 165）では「執行官」(мечник) と呼ばれている。これは、公や貴族の命令によって、裁判や強制取り立てなどの執行にあたる宮廷の下級役人を指し、名前の呼び方からみても、地位の高い人物ではないだろう。

134) この「グリゴリ」については、『ゲーストィンスカヤ年代記』6681-1173 年の並行記事では「モスクワのアンドレイ・ユーリイは、ロスチスラフ一族を悪人と見なしてその罪を問うた。キエフにおいて、グリゴリー・ホトヴィチという人物が、かれの兄弟グレーブを毒殺したと、かれ〔アンドレイ〕は考えたのである。しかし、そのようなことはなかった」[ПСРЛ Т. 40, 2003: С. 96] と、アンドレイは、虚偽の嫌疑によってロマン [J1] に怒りを発したように書かれている。

ソロヴィヨフによれば、このグリゴリはキエフの貴族で、千人長を務め、兄弟にコンスタンチン・ホトヴィチがおり、ポロヴェツ人の出自としている [Соловьев 1988: С. 523]。

き渡せ。なぜならこの者たちはわしの兄弟グレーブ [D178] を死なせたのだ。この者たちはわれら全てにとって敵である。』。しかし、ロスチスラフ一族はこれに聴き従わず、グリゴリを自分たちの所から逃がしてやった。

アンドレイ [D173] は、ロマン [J1] にこう言った。「そなたが兄弟たちと一緒に、わしの意に従わないのなら、そなたはキエフから去れ。ダヴィド [J3] はヴィシェゴロドから去れ。【570】ムスチスラフ [J5] はベルゴロド¹³⁵⁾ から去れ。そなたたちにはスモレンスクがある、これを分けるがよい」。ロスチスラフ一族は、自分たちがルーシの地を失い、〔アンドレイが〕自分の弟のミハルコ [D175] にキエフを与えようとしていることを、大変残念に思った。

ロマン [J1] はスモレンスクへと行ったが¹³⁶⁾、ミハルコ [D175] 自身は、トルチェスク¹³⁷⁾ を出てキエフへ行くことを望まず¹³⁸⁾、そこ〔キエフ〕へは弟のフセヴォロド [D177:K] と自分の甥のヤロポルク・ロスチスラヴィチ¹³⁹⁾ [D1712] を派遣した。こうして、フセヴォロド [D177:K]

135) ムスチスラフ [J5] は、兄ロマン [J1] のキエフ公就位 (1171 年 7 月) にともなって、ベルゴロドに公座を与えられていたのである。

136) 『ノヴゴロド第一年代記』 6680(1172) 年の記事にも、「ロマン・ロスチスラヴィチ [J1] が自ら望んでキエフを去り、ミハルコ・ユーリエヴィチ [D175] がキエフの公座に就いた」とあることから、ロマン [J1] だけは、ひとまずアンドレイ [D173] の指示にしたがって、キエフを退去してスモレンスクへ戻ったことが確認できる。他の 3 人の兄弟 (リューリク [J2]、ダヴィド [J3]、ムスチスラフ [J5]) はキエフ公領内のそれぞれの城市にとどまっていた。なお、『ノヴゴロド第一年代記』の年紀はおおむね信頼性があることから、ロマンのキエフ退去は 1172 年のことだろう。直前の記事との関係 (1172 年 7 月にロマン [J1] はキエフにいた) でみれば、8 月以降ということになる。

なお、この「ルーシの地」(Руская земля) は、キエフ、チェルニゴフ、ペレヤスラヴリ周辺に限った本来的な意味で用いられている。

137) 「トルチェスク」(Торцький; Торческ) は、ロシ川左岸支流のゴロフヴァトカ (Горхуватка) 川河岸に位置し、歴代のキエフ公に仕えるベレンディ人やトルク人が居住する城市。キエフから南方へ 80km ほど離れている。

138) アンドレイ [D173] が命令した、1169 年冬の諸公によるムスチスラフ [I1] 討伐の際、ミハルコ [D175] はムスチスラフ陣営で戦っており ([イパーチイ年代記 (6) : 279 頁, 注 544])、当初から、ミハルコはアンドレイに対しては、独立的、対立的な行動をとっていた。これも、アンドレイへの不信任によるものだろう。

139) ヤロポルク [D1712] は本年代記では初出。かれは、父ロスチスラフ [D171] の死後 (1151 年) は、叔父のアンドレイ [D173] に引き取られたが、その後 1162 年頃にアンドレイの手で追放され『イパーチイ年代記 (6) : 237 頁, 注 286] 参照)、叔父のミハルコ [D175] の庇護下に入ったと考えられる。そのため、ミハルコの命令で、フセヴォロド [D177:K] とともにキエフに派遣されたのである。(下注 144 参照)

が5週間キエフの公座に就いていた¹⁴⁰⁾。

ロスチスラフ一族、すなわちリューリク [J2]、ダヴィド [J3]、ムスチスラフ [J5] は、アンドレイ [D173] のもとに使者を遣って、こう言った。「兄弟よ、確かにわれらはあなたを父と見なして、あなたに〔忠誠を誓う〕十字架接吻をした¹⁴¹⁾。われらは、あなたに善きことを望んで、十字架接吻〔の誓いを〕守っている。ところが見よ、あなたは、われらの兄弟ロマン [J1] をキエフから退去させ、われらに罪はないのに、ルーシの地から立ち去るよう指示をしている。これについては、神と十字架の力がすべてをみそなわすだろう¹⁴²⁾」。

アンドレイ [D173] は、かれらに回答しなかった。

ロスチスラフ一族は協議して決めた。そして、神と尊い十字架の力、聖母の祈りに望みをかけて、聖母讚美〔の祝日〕前の夜半¹⁴³⁾ にキエフに入城した。そして、フセヴォロド・ユーリエヴィチ [D177:K]、ユーリイ [D17] の孫のヤロポルク¹⁴⁴⁾ [D1712]、ポーランド人のヴワディスワフ¹⁴⁵⁾ (Володислав)、ミフン¹⁴⁶⁾ (Михн)、すべての貴族たちを捕らえた。

〔ロスチスラフ一族の〕兄弟たちは、キエフ〔の公座〕を【571】リューリク [J2] に与えた。ロスチスラフ [D116:J] の息子のリューリク公 [J2] は、大いなる栄光と名誉をもって、キエフ

140) フセヴォロド [D177:K] の支配期間はすべての写本で「5週間」となっており、1173年3月24日にキエフ城への夜襲によって廃位されていること（下注143）から逆算すると、フセヴォロドは1173年2月中旬にキエフに派遣されて公座に就いたことになる。[Брежков 1963: C. 189]

なお、この段落の記述は、上注136の『ノヴゴロド第一年代記』6680(1172)年の記事の「ミハルコ・ユーリエヴィチ [D175] がキエフの公座に就いた」の文言と矛盾している。① ロマン [J1] のキエフ退去後、アンドレイ [D173] の命令によってミハルコ [D175] は暫くの間キエフの公座に就いていたが、1173年2月に弟のフセヴォロド [D177:K] に引き渡した。『ノヴゴロド第一年代記』はミハルコの命令による短期のフセヴォロドの公座就位を無視した、② ミハルコ [D175] は、アンドレイ [D173] の命令を実行に移さず、キエフは暫くの間公が不在になっていたが、1173年2月になってようやくフセヴォロド [D177:K] が公座に派遣された、の可能性が考えられる。

141) 上注109を参照。

142) 紛争を戦争で解決することを表す定型句。兄ロマン [J1] がキエフからスモレンスクへと去った後も、キエフ公領内の各自の城市にとどまっていた「ロスチスラフ一族」の三人は、年少のフセヴォロド [D177:K] がキエフの公座にあり、守備が弱い期間を狙って戦いを起こしたのだろう。

143) このロスチスラフ一族がキエフ奪還の戦争を起こしたのは、1173年のことと推定できる。「聖母讚美の前の夜半」(в ночь...на похвалу святой Богородици)とは、聖母讚美の祝日(день Похвалы пресвятой Богородицы)は大齋第5週の土曜日で、1173年は3月24日に相当する。

144) ヤロポルク [D1712] は、叔父ミハルコ [D175] の命令で、フセヴォロド [D177:K] とともにキエフに派遣されていた。(上注139参照)

145) ヴワディスワフは1169年のミハルコ [D175] のポロヴェツ討伐遠征のときに軍司令官として活躍しており、このときもミハルコの指示によって、弟のフセヴォロド [D177:K] を補佐するために派遣され、キエフに滞在していたのだろう。

146) 上注133を参照。

に入城し、自らの父と自らの祖父の公座に就いた。

この年、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] はチェルニゴフの公の館に聖ミハイルの石造りの教会を定礎した¹⁴⁷⁾。

この年¹⁴⁸⁾、ヤロスラフ [A1211] の息子でガーリチ公のウラジミルコ [A12111] が〔ガーリチを〕逃げ出して、ルチェスク¹⁴⁹⁾ (Луческ) のヤロスラフ [I2] のもとへと行った¹⁵⁰⁾。かれは〔父親に〕領地を要求したために、捕まりそうになったのである。ガーリチのヤロスラフ [A1211] は、〔ポーランドへ〕使者を派遣して、ポーランド人を援軍として呼び寄せ、かれらに 3000 銀グリヴナ¹⁵¹⁾ を与えた。こうして、二つの城市を焼くと、ヤロスラフ [I2] のもとに使者を遣って〔言った〕。「わしの息子〔ウラジミルコ [A12111]〕をわしに引き渡せ。さもなくば、わしはそなたを討つために進軍するだろう」。

かれ〔ヤロスラフ [I2]〕は、自分の領地〔ルチェスク〕が焼かれることを恐れて、ウラジミルコ [A12111] をその母親と一緒にトルチェスク (Торыцкыи) のミハルコ [D175] のところに行かせた。なぜなら、ミハルコ [D175] は、公妃オリガ¹⁵²⁾ の兄弟だからであった。

かれ〔ウラジミルコ [A12111]〕の岳父であるスヴァトスラフ [C411:G] は¹⁵³⁾、チェルニゴフへ来るようにとかれ〔ウラジミルコ〕を招き寄せた。かれ〔ウラジミルコ〕をスーズグリのアンドレイ [D173] のもとへと行かせようとしたのである。しかし〔ミハルコ [D175] は、ウラジミルコ [A12111] をチェルニゴフへ〕行かせなかった。

147) スヴァトスラフ [C411:G] に帰属すると推定される封印に大天使ミハイルが刻印されたものがあり、それを根拠にかれの洗礼名を「ミハイル」と推定する研究がある。その場合、スヴァトスラフは守護聖人に奉獻した聖堂の建設に着手したことになる。〔Литвина, Успенский 2006: С. 606〕

148) 1173 年のこと。

149) 「ルチェスク」(ルツク) は、ドニエプル右岸支流ブリピャチ川のさらに右岸支流にあたるストイリ川左岸に位置する城市。1155 年からヤロスラフ [I2] が公支配をしている。〔イパーチイ年代記 (6) : 254 頁, 注 383〕 参照)。

150) ヤロスラフ [A1211] と息子のウラジミルコ [A12111] との間の政争は 1171 年に一旦終息を見せたが (上注 68 参照), この年 (おそらく 1173 年) に再燃したことになる。

151) 貨幣単位としての 1 グリヴナを銀塊およそ 200g 相当と換算すると (〔Древняя Русь 2015: С. 212〕), 3000 銀グリヴナは、銀塊約 600kg に相当する莫大な額である。

152) 公妃オリガ (Ольга) とは、ヤロスラフ [A1211] に嫁いだユーレイ [D17] の娘で、ウラジミルコ [A12111] の母親のこと (上注 69 参照)。

153) ウラジミルコ [A12111] は、1167 年にスヴァトスラフ [C411:G] の娘ボレスラヴァと結婚しており、ウラジミルコにとってスヴァトスラフは岳父 (義理の父) にあたる。〔イパーチイ年代記 (6): 242 頁, 注 315〕 参照)。

この年¹⁵⁴⁾、ロスチスラフ一族は、トルチェスク (Торчский) のミハルコ [D175] を討伐するために軍を進めた。〔トルチェスク〕を6日間包囲し、7日目に〔ミハルコは〕、かれら〔ロスチスラフ一族〕に軍使を遣って、次のような約定を結んだ。

〈ミハルコ [D175] は、ペレヤスラヴリをトルチェスクに加えて領有する¹⁵⁵⁾。〔ミハルコは〕自分の兄弟であるアンドレイ [D173] およびチェルニゴフのスヴァトスラフ **[572]**・フセヴォロドヴィチ [C411:G] と関係を断って、ロスチスラフ一族の仲間になること〉。なぜなら、その時リユーリク [J2] がキエフ〔の公座〕にあったからである¹⁵⁶⁾。

〔さらにミハルコは〕次のような約定を結んだ。〈〔ミハルコは〕、ミハルコ [D175] の姉妹の息子であるガーリチのウラジミール・ヤロスラヴィチ [A12111] をロスチスラフ一族に引き渡し、かれ〔ウラジミルコ [A12111]〕を父〔ヤロスラフ [A1211]〕のもとに戻らせること¹⁵⁷⁾。他方、ロスチスラフ一族は、フセヴォロド [D177:K]、ヤロポルク [D1712] 及びすべての従士たち¹⁵⁸⁾を解放すること〉。

〔ところが〕フセヴォロド [D177:K] は解放されたが、ヤロポルク [D1712] は解放されなかった。「そなた〔ミハルコ〕は、あの者〔ヤロポルク [D1712]〕の〔解放を〕要求しなかったではないか」〔というのがロスチスラフ一族の言い分だった〕。¹⁵⁹⁾

ロスチスラフ一族は、同じ遠征路を進軍して¹⁶⁰⁾、かれ〔ミハルコ [D175]〕の甥ムスチスラフ [D1711] をトレポリ¹⁶¹⁾から追放した。ムスチスラフ [D1711] は、そこからチェルニゴフへ

154) 1173年のこと。

155) これは、当時のペレヤスラヴリ公ウラジミール・グレーボヴィチ [D1782] を廃して、ミハルコ [D175] がペレヤスラヴリの公支配をすることを意味している。

156) ミハルコ [D175] の拠点都市トルチェスクはキエフ公領にあることから、ミハルコにとって、キエフ公の陣営に身を置くことが、領地を守るためにはよい条件であるということ。

157) 「ロスチスラフ一族」の陣営にとって、ウラジミルコ [A12111] を、父のガーリチ公ヤロスラフ [A1211] に引き渡すことによって、キエフ（「ルーシの地」）領有を巡るアンドレイ [D173] 陣営との戦いにおいて、ガーリチから支援を受けようという思惑があったことは疑いない。

なおこの身柄引き渡しは実行されず、ウラジミルコ [A12111] はおそらく身の危険を感じたのだろう、ブチーヴリのイーゴリ [C432] のもとに逃れている。

158) 「ロスチスラフ一族」が1173年3月24日にキエフ城に夜襲を行い、捕虜とした捕らえた者たちをさしている。（上注144参照）

159) 以下の記事から、ヤロポルク [D1712] もまもなく解放されて、アンドレイ陣営についたことがわかる。

160) キエフからトルチェスクへ遠征を行った帰路に、トレポリを攻撃したということ。

161) ムスチスラフ [D1711] は1161年にアンドレイ [D173] の意向によってノヴゴロドの公座から斥けられ（『イパーチ年代記(6): 234頁, 注266』）、その後1162年頃には兄弟のヤロポルク [D1712] とともにアンドレイの手で追放され（『イパーチ年代記(6): 237頁, 注286』参照）、それ以降は叔父のミハルコ [D175] と行動をともにしており、トルチェスク近隣の城市トレポリを領地として与えられていたことがわかる。

と向かった。ミハルコ [D175] は、かれ〔ムスチスラフ〕を受け入れなかった¹⁶²⁾。

この年、スーズダリの公アンドレイ [D173] は、グリゴリイ・ホトヴィチ¹⁶³⁾ を自分の意向の通りに処置しなかったことで、ロスチスラフ一族に怒りを発した¹⁶⁴⁾。オレーグ一族の諸公、すなわちスヴァトスラフ・フセヴォロド [C411:G] とその兄弟たちはこれを聞いて喜んだ。かれらは自分の家臣をアンドレイ [D173] のもとに派遣して、かれ〔アンドレイ〕をロスチスラフ一族に対抗させようとして、かれにこう言った。「あなたの敵はわれらにとっても敵です。見よ、われらはあなたとともに〔戦う〕用意があります」。

アンドレイ [D173] は、かれらの提案を受け入れ、高慢の心に満たされ、ひどく傲慢になって、堅固な軍事力と多数の兵を恃んで驕り高ぶり、怒りに燃えて、執行官ミフンを派遣して¹⁶⁵⁾、(〔ミフンに〕こう言った。)¹⁶⁶⁾ 「ロスチスラフ一族のもとに **[573]** 行け。かれらにこう言え。『そなたたちは、わしの意に従わない。リューリク [J2] よ、スモレンスクの兄弟¹⁶⁷⁾ のもと、父の地へ行け』。また、ダヴィド [J3] にはこう言え。『そなたは、ベルラド¹⁶⁸⁾ (Берлад) に行け。ルーシの地にとどまることを禁ずる』。ムスチスラフ [J5] にはこう言え。『すべてはそなたのせいである。ルーシの地にとどまることを禁ずる¹⁶⁹⁾』」。

ムスチスラフ・ロスチスラヴィチ [J5] は、若いときから誰も恐れることはなく、ただ神のみを畏れていた。かれは、アンドレイ [D173] の使者〔ミフン〕を捕まえて、自分の眼の前でその頭髪と髭を剃り落とすよう命じた。そして、かれ〔使者〕に言った。「自分の公のところに戻るがよい。そして、こう伝えるのだ。『これまでわれらは、そなたを親愛によって父と見

162) 先の、トレポリ包囲後のミハルコ [D175] と「ロスチスラフ一族」との約定において、ミハルコは、甥のムスチスラフ [D1711] を見捨てて、トレポリを「ロスチスラフ一族」に引き渡すことを合意したのだろう。

上のヤロポルク [D1712] の解放を拒んだことと考え合わせると、「ロスチスラフ一族」は、ミハルコ [D175] とフセヴォロド [D177:K] は同盟者として信頼しても、その二人の甥 (ヤロポルク [D1712] とムスチスラフ [D1711]) は信頼していなかったことが分かる。

163) グリゴリイ・ホトヴィチについては、上注 134 を参照。

164) 以下の記事は、上注 131 以下で述べられている 1172 年後半の事件と同じことを指しているが、視点は叙述の詳しさが異なっている。これは、同じ事件についての異なった資料を用いたことによると思われる。

165) このミフンの派遣は、上注 133 と同じものを指している。「執行官」(мечник) は公の配下の下級役人のこと。

166) 丸括弧内はイパーチイ写本にはなく、フレーブニコフ写本から補った。

167) ロマン [J1] を指している。

168) 「ベルラド」(Берлад) は、ドナウ川支流プルート川の下流域に位置する城市 (現在のルーマニア東部のブルラド (Bârlad) 市に当たる) または地方を指し、ガーリチ公領からも外れた辺境地帯と見なされていた。ここ行くことは、実質的には追放を意味していた。

169) 先の記述では「ムスチスラフはベルゴロドから去れ」(上注 135) となっている。ダヴィド [J3] の場合と同じく、ムスチスラフ [J5] にも追放を命じたのである。

なしてきた。しかし、そなたは様々な使者を派遣してきたが、それは公に対してではなく、配下や平民に対するような言葉だった。もしそなたが企みをなすならば、それをなすがよい。すべては神が見そなわす¹⁷⁰⁾であろう』。

アンドレイ [D173] は、これをミフンから聞いた¹⁷¹⁾。かれの顔の表情は暗くなり、すぐに戦争を決意し、準備ができた¹⁷²⁾。

かれ〔アンドレイ [D173]〕は、使者を〔各地に〕派遣して、自分の配下のロストフ人、スーズダリ人、〔クリャジマ河畔の〕ウラジーミル人、ペレヤスラヴリ人¹⁷³⁾、ペロゼロ人¹⁷⁴⁾、ムーロム人、ノヴゴロド人¹⁷⁵⁾、リャザン人を集めた。これらを集合させると、その数は5万に及んでいた。

かれ〔アンドレイ〕は、自分の息子ユーリイ¹⁷⁶⁾ [D1733] と軍司令官ボリス・ジディスラヴィチ¹⁷⁷⁾ (Борис Жидиславич) にこれらの兵を率いさせて派遣し、リューリク [J2] とダヴィド [J3] [574] を自分〔アンドレイ〕の父の地から追放するよう、指示を与えた。「ムスチスラフ [J5]

170) 「神はすべてを見そなわす」(Богъ за всѣмъ)の宣戦布告の表現は、上注 142 と同じであり、ここでは同じ事態について、別の形で繰り返し述べられている。

171) 先の記述によれば、ミフンは、1173年3月24日の「ロスチスラフ一族」によるキエフ城夜襲によって捕らえられている(上注 146)が、ここではムスチスラフ [J5] によって捕らえられ、髪と髭を剃られるという屈辱を受けたことになっている。いずれにせよ、かれはその後解放されてスーズダリに帰り、アンドレイ [D173] にキエフの様子を伝えたのだらう。

172) 以下に述べられるアンドレイ [D173] の命命による「ロスチスラフ一族」討伐のための諸公連合軍のキエフ方面遠征の原因が、使者に対する侮辱のように書かれているが、これは二次的な編集によるもので正確ではない。『ラヴレンチイ年代記』6682(1174)年の並行記事では、「その年、アンドレイ公 [D173] は自分の二人の兄弟たち〔フセヴォロド [D177:K] とヤロボルク [D1712]〕が、ダヴィド・ロスチスラヴィチ [J3] によって捕らえられたことを聞くと、息子のユーリイ [D1733] を〔キエフ遠征へと〕派遣した」とある。「ロスチスラフ一族」によって弟たちが捕らえられ、キエフ公位が乗っ取られたことへの報復と考えるのが自然だらう。

なお、キエフのフセヴォロド公 [D177:K] が捕らえられたのが1173年3月24日であり、この遠征が大規模であることを考えると、これは1173年春～夏に行われたと考えられる。

173) この「ペレヤスラヴリ人」(переславльцы)が、ドニエプル河畔のペレヤスラヴリか、ロストフ地方のザレスキイの「ペレヤスラヴリ」(Переславль Залесский) ([イパーチイ年代記(5):302頁,注410]参照)のどちらであるかは定めがたい。ただし、この前後はすべて北東の諸城市の民が挙げられていることや、前者のペレヤスラヴリ人については後の記事で言及される(下注 190)ことから見て後者の可能性が高い。

174) 「ペロゼロ人」(бѣлозѣрць)のペロゼロに誰が座していたかはわからないが、ロストフ公国の領内にあり、アンドレイ [D173] の縁者が公位にあったか、代官が派遣されていたと想定される。

175) 当時のノヴゴロド公は1172年から公位に着いているユーリイ・アンドレエヴィチ [D1733] で、民会にもアンドレイ派が多数だったと考えられる。

176) アンドレイ [D173] の息子イジャスラフ [D1731]、ムスチスラフ [D1732] はすでにこのとき死去しているため、このユーリイ [D1733] がこの時点で最年長の息子だった。

177) 「軍司令官ボリス」については、上注 37, 87 と下注 325 を参照。

については、かれを捕まえたら危害を加えずに、自分のもとに連行して来ること」¹⁷⁸⁾。このように、ボリス・ジディスラヴィチに指示すると、かれに、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] のもとに行くよう命じた。これは、〔アンドレイが〕がかれ〔スヴァトスラフ [C411:G]〕とそのすべての兄弟たちとあらかじめ取り決めた通りだった。そしてこれは、キリスト教徒と戦っている狡猾な悪魔の罠によるものだった。

アンドレイ公 [D173] はすべての事柄について非常な智恵者で雄壮だったが、自分を抑えられなくなると、理性を失い、怒りを燃え上がらせ、驕った言葉を口にした。それは、神に対して恥ずべき汚らしい、驕りと傲慢〔の言葉〕だった。このことはすべて、われらに敵対する悪魔によってなされたことだった。悪魔はわれらの心に驕りと傲慢の種を播くのである。これについてはパウロがこう言っている。「神は高慢な者を敵とし、謙遜な者には恵みを与える¹⁷⁹⁾」。この使徒パウロが言った言葉が実現したことについては、あとで語ることにしよう¹⁸⁰⁾。われらは以前の話に戻ろう。

かれら〔ユーリイ [D1733] の遠征軍〕は、スモレンスクには立ち寄らずに行軍した。それは、〔アンドレイ公が〕 ロマン [J1] に対して、その息子〔ヤロボルク [J11]〕をスモレンスク人とともに出陣させるようにとの指示を与えていたからである。それで、ロマン [J1] は仕方なく、自分の息子をスモレンスク人とともに、兄弟たちを討伐するために出陣させ、本心を表明しようとはしなかった。なぜなら、〔ロマン [J1] は〕すでにかれ〔アンドレイ [D173]〕の配下にあつたからである。

〔アンドレイ [D173] は〕すべてのポロツクの公たち¹⁸¹⁾に進軍するよう命じた。トゥーロ

178) このアンドレイ [D173] の指示の言葉は、翻訳文学『アレクサンドロス大王物語』(Александрія)で、ペルシア王ダレイオスが若いアレクサンドロスについて指示した言葉と同様であり、文学的借用である。ムスチスラフ [J5] を大王アレクサンドロスに比して称揚する目的で挿入された文言で、事実資料によるものではない [Вилкул 2010: С. 384]。

179) 新約『ペトロの手紙1』(5:5)からの引用。ただし、これは「使徒パウロが言った言葉」ではない。

180) 下注 209 を参照。

181) 当時のポロツク公はフセスラフ・ヴァシリコヴィチ [L221] だった。かれは 1167 年のミンスク公ヴォロダリ [L53] との争いの際にロスチスラフの子らの援助を受けており、のちにはロマン [J1] の娘と結婚するが、このときはロスチスラフの子らに対して反旗を翻したということか。

フ¹⁸²⁾、ピンスク¹⁸³⁾、グロドノ¹⁸⁴⁾の〔諸公にも命じた〕。

かれら〔ユーリイ [D1733] の遠征軍〕が、オレーグ一族〔諸公〕のもとに到着する¹⁸⁵⁾と【575】、両者は合流してキエフへ向けて進軍した。かれらのもとに、ユーリイ [D17] の二人の息子、ミハルコ [D175] とフセヴォロド [D177:K]¹⁸⁶⁾ がやって来た。ロスチスラフ [D171] の二人の息子であるムスチスラフ¹⁸⁷⁾ [D1711] とヤロボルク¹⁸⁸⁾ [D1712]、グレーブ [D178] の息子¹⁸⁹⁾、すべてのペレヤスラヴリ人¹⁹⁰⁾〔もやって来た〕。一同はドニエプル川を渡り、キエフに襲撃を仕掛けた。

ロスチスラフ一族は、キエフの城内に閉じ籠もることはせず、自分たちの城市へとそれぞれが向かって行った。リュウリク [J2] はペロゴロドで籠城し¹⁹¹⁾、ムスチスラフ [J5] は、ダヴィド [J3] の部隊とともにヴィシエゴロドで籠城した。ダヴィド [J3] 自身は、援軍を要請するために、ガーリチのヤロスラフ [A1211] のもとに向かった¹⁹²⁾。

スヴァトスラフ [C411:G] は兄弟たちと、また、ミハルコ [D175] は兄弟のフセヴォロド [D177:K] 及びその甥たち¹⁹³⁾とともにあり、かれらは、キエフ人と合流した。ベレンディ人、ロシ川流域の住民、全ルーシの地〔の兵〕〔とも合流した〕。その部隊は、キエフを出発してヴィ

182) 当時のトゥーロフ公は、スヴァトボルク・ユーリエヴィチ [B3213] だった ([イパーチイ年代記 (6): 239 頁, 注 300] 参照)。この公は 1160 年代に数回年代記記事に登場するが、ロスチスラフの子らに敵対したのは本記事が初めてである。

183) 当時、ピンスク公にはスヴァトボルク [D3213] の兄弟のうち誰かが着いていたと想定されるが、誰であったかは不祥。

184) 当時のグロドノ公は、ムスチスラフ・フセヴォロドコヴィチ [F113] だった。([イパーチイ年代記 (6): 286 頁, 注 609] 参照)。

185) デスナ川を下って、チェルニゴフに到達したのだろう。

186) 先の記事では、ミハルコ [D175] とフセヴォロド [D177:K] については、トルチェスク包囲後の和議の結果、「ロスチスラフ一族」の陣営に入ることが合意されたはずだが、この約定はすぐに破られて、結局、二人はアンドレイ陣営に身を投じたと考えられる。

187) 先の記事によれば、ムスチスラフ [D1711] は「ロスチスラフ一族」によってトレポリから追い出され、チェルニゴフのスヴァトスラフ [C411:G] のもとに行った (上注 161)。

188) 先の記事では、ヤロボルク [D1712] はキエフの「ロスチスラフ一族」の手で捕らえられたまま、和議によっても解放されなかったが (上注 159)、この記事によれば、まもなく解放されたことが分かる。

189) 原文はイパーチイ写本は Глѣбовича で双数形だが、フレーブニコフ写本は Глѣбович と単数形になっている。グレーブ [D178] の息子ウラジーミル [D1782] は父の死後ペレヤスラヴリの公座に就いているので、ペレヤスラヴリ人を率いて来たことは確かである。もし、二人 (双数) ということになれば、グレーブのもう一人の息子イジャスラフ [D1781] も参戦したことになる。

190) これは、ドニエプル川沿岸のペレヤスラヴリである。

191) この時点から、ベルゴロドはリュウリク [J2] の拠点城市となった。

192) ここに見る、「ロスチスラフ一族」諸公とガーリチ公ヤロスラフ (八智公) [A1211] との同盟関係は、ヤロスラフに反抗する息子ウラジーミル [A1211] を庇護しているチェルニゴフ公スヴァトスラフ [C411:G] への対抗関係という、双方の利害が一致したところから成立したものか (上注 153)。

193) ムスチスラフ [D1711] とヤロボルク [D1712] を指している。

シェゴロドへと向かった。それは、われらが女宰たる聖母、永遠の処女マリアの生誕の日¹⁹⁴⁾ だった。諸公はあわせて 20 人以上おり¹⁹⁵⁾、その中の最年長者はスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] だった¹⁹⁶⁾。かれ〔スヴァトスラフ [C411:G]〕は、フセヴォロド・ユーリエヴィチ [D177:K]、イーゴリ [C432] とその配下の若い諸公を武装させて、ヴィシェゴロドへと向かわせた。

かれらがヴィシェゴロドの城下に到着したとき、ムスチスラフ・ロスチスラヴィチ [J5] は、軍隊が迫って来るのを見て、自分たちの部隊を整列させると、かれらに対抗するために城を出て沼地¹⁹⁷⁾ へと向かった。両軍はまだ戦いの時機を待っていた、そしてかれらの射手が互いを牽制し、矢の射合いが始まり、互いに一進一退だった。**【576】**。ムスチスラフ [J5] は、自分たちの射手が〔敵の〕兵士たちの間で混乱しているのを見て、たちまち、敵を討つべく突進した。そして、自分の従士たちに向かって「兄弟たちよ」と言った。かれ〔ムスチスラフ〕は、神の慈悲と聖殉教者ボリスとグレーブの助け¹⁹⁸⁾ に期待をかけていた。そして、たちまちかれら〔敵〕のほうへ向かって行った。

そこでは、3 個の〔敵の〕部隊が陣を張っていた。それは、ノヴゴロド人、ロストフ人だった。その中にはまた、フセヴォロド・ユーリエヴィチ [D177:K] が、自分の部隊とともに陣を構えていた。

ムスチスラフ [J5] は、たちまちかれらの部隊と衝突し、中央の部隊を踏みしだいた。他の兵士たちはこれを見て、かれらを取り囲んだ。ムスチスラフ [J5] は小勢で自分たちの軍勢の中に飛び込んだからである。

こうして、両軍は乱戦となった。大きな混乱が起こり、うめき声が聞こえ、大きな喚声上がり、誰の声か分からなくなった。そこには折れた槍が見え、武器の音が聞こえた。埃がもうもと立っているために、騎兵も歩兵も見分けが付かなかった¹⁹⁹⁾。こうして激しく戦った末に、

194) 1173 年の 9 月 8 日に相当する。

195) 『ラヴレンチイ年代記』 6682(1174) 年の並行記事で、「他に 20 人の諸公とともに」と遠征に参加したと公の数が記されている。

196) スヴァトスラフ [C411:G] の生年は 1120 年代前半と考えられるので、この当時は 50 歳程度であった。

197) 「沼地」(болонь) とは、ヴィシェゴロドとキエフの間に広がる沼沢地で、ヴィシェゴロドから見ると南側にあっている。現在のキエフのオボロニ (Оболонь) 区に相当する。キエフ城方面から進軍してきたスヴァトスラフ [C411:G] 指揮下の部隊を迎え撃とうとしたのである。

198) ヴィシェゴロドには、聖ボリスとグレーブに奉獻した 1115 年建立の石造りの教会があり ([イパーチイ年代記 (1) : 257 ~ 259 頁])、この都市の守護聖人の役割を果たしていた。

199) 「大きな混乱が起こり…」からここまでの戦闘場面の描写は、翻訳文学の「アレクサンドロス大王物語」と「ユダヤ戦記」からの部分的借用によっている。[Вилкул 2010: C. 384, 393]

分かれて行った。傷を負った者²⁰⁰⁾は多かったが、死んだ者は多くなかった。これは、最初の日の、沼地における、ムスチスラフ [J5] が、フセヴォロド [D177:K]、イーゴリ [C432] 及び他の配下の者たちと戦った、一つの戦闘だった。

それから、全軍が到来して、すべての〔ヴィシエゴロドの〕城市を包囲した。毎日のように突撃が試みられた。城内からも出撃が行われ、激しく戦った。ムスチスラフ [J5] の従士たちの上級者たちの多くも負傷したり、戦死したりした。こうして、9 週間のあいだ²⁰¹⁾ 城市の包囲が続いた。

その後、【577】ルチェスク (Лучьскыи) のヤロスラフ [I2] が、全てのヴォルィニの地の〔軍兵を〕率いて、ロスチスラフ一族を討伐すべく軍を進めた²⁰²⁾。かれは、オレーグ一族の諸公に対して年長者の権利を要求した²⁰³⁾。しかし、かれら〔ロスチスラフ一族〕がかれ〔ヤロスラフ [I2]〕にキエフを譲渡することはなかった。かれ〔ヤロスラフ [I2]〕はロスチスラフ一族と使者を交換をして、かれらとキエフについて約定を結んだ。そして、オレーグ一族から手を引き、陣を払って、かれらのもとから出発した。そして、部隊の軍装を整え、リューリク [J2] のいるベロゴロドへと部隊を向けた。

〔オレーグ一族諸公は〕これを見て、恐れて、言った。「かれらは全員が合流して、ガーリチ人²⁰⁴⁾ や黒頭巾族²⁰⁵⁾ とともに、われらを討とうとしている」。かれら〔オレーグ一族諸公〕の部隊は混乱して、夜明けを待たずに大混乱を起こし、抑えることができず、ドニエプル川を渡って逃げ出した²⁰⁶⁾。かれらの多くの兵が溺れて死んだ。

ムスチスラフ [J5] はこれを見て、いとも慈悲深き神と聖ボリスとグレーブが目に見えぬ支

200) 「傷を負った者」(раненых) は、イパーチイ写本では ратных (兵士たち) となっているが、文脈から判断して、こちらのフレーブニコフ写本の読みを採用した。

201) ヴィシエゴロドの包囲が始まったのが、「聖母生誕祭」(1173 年 9 月 8 日) (上注 194) とすれば、その 9 週間後は 11 月 10 日頃になる。

202) ヤロスラフ [I2] の出陣は、オレーグ一族の要請によるものである。

203) 「オレーグ一族の諸公に対して年長者の権利を要求」(искати собѣ старѣшинства в Олговичѣх) とは、下注 210 にもあるように、ヤロスラフ賢公の末裔の諸公の中で「年長者」がキエフの公座に就くという、公族の間で伝統的に保持されてきた制度 (いわゆる年長制序列 (старшинство)) にのっとって、ヤロスラフ [I2] はオレーグ一族諸公に対して、みずからキエフの公座に就くことを要求したのである。

204) ムスチスラフ [J5] がヴィシエゴロド籠城にした際に、ダヴィド [J3] は援軍を求めて、ガーリチのヤロスラフ [A1211] のもとに出向いている。その援軍がやって来るとのこと。

205) ロシ川河岸地域に居住する黒頭巾族は、代々、ムスチスラフ [D11] = イジャスラフ [D112:I] = ムスチスラフ [I1] 一族の代々の諸公に仕えてきた。ヤロスラフ [I2] は、ムスチスラフ [I1] が没した (1170 年) 後に、かれらに対する指揮権を継承したのだろう。

206) 上注 201) によれば、11 月 10 日前後の夜にヴィシエゴロド城の包囲を解いて、ドニエプル川をわたって、対岸のおそらくチェルニゴフ方面へ向かって逃げ出したことになる。

援を送ってくれたことを誉め讃え、自らの従士たちを率いて城市〔ヴィシエゴロド〕を出た。かれ〔ムスチスラフ [J5]〕の従士たちは殺到して、かれら〔オレーグ一族〕の備蓄品の天幕に襲いかかり、多数を捕まえて足枷をかけた。こうして、ムスチスラフ [J5] は自分の従士たちとともに、大いなる汗を拭った²⁰⁷⁾。かれは、少なからぬ武勇を自らの家臣とともに発揮したのである。このことは、使徒パウロが語った「おのれを高める者は低められ、おのれを低める者は高められる」²⁰⁸⁾ という先述の言葉が実現したのである²⁰⁹⁾。このようにして、スーズダリ公アンドレイ [D173] の全軍は帰還した。かれ〔アンドレイ〕は全土〔の兵〕を一つに集め、〔遠征軍の〕兵は数え切れないほどだった。**【578】**かれらは、やって来たときには高慢な考えを持つ者たちだったが、自分の家へと立ち去る時には低められた者たちになっていた。

ロスチスラフ一族は、ヤロスラフ [I2] を年長者²¹⁰⁾ として定め、かれにキエフを引き渡した。

ヤロスラフ・イジャスラヴィチ [I2] のキエフにおける公支配の始まり。

ヤロスラフ [I2] はキエフに入城し、自分の祖父、自分の父の公座に座した²¹¹⁾。

スヴァトスラフ [C411:G] は、ヤロスラフ [I2] に使者を派遣して、苦情を表明してかれに言った。「そなたは、十字架に接吻して〔誓った〕ことを忘れたのか。最初の約定を思い出すがよい。そなたは、『自分がキエフ〔の公座〕に座したときには、あなたに〔領地を〕配分する。もしあなたがキエフに座したときには、自分に〔領地を〕配分せよ』と言ったではないか²¹²⁾。今、そなたは、信義によるか、不義によるかは別にして、キエフ〔の公座〕に座している。わしに〔領地を〕分け与えよ」。

207) この「自分の従士たちとともに大いなる汗を拭った」(много пота утеръ с дружиною своєю) の表現については、『原初年代記』6527(1019)年の項の、ヤロスラフ賢公のキエフ凱旋の描写に「ヤロスラフは(...)自分の従士たちとともに汗を拭った」と共通であり、この個所を借用したのかもしれない。「汗を拭う」は軍事的な労苦を克服することを意味する荘重な定型表現。6648(1140)年の項も参照 ([イパーチイ年代記 (2) ; 316 頁])。

208) 『マタイによる福音書』(23: 12) (並行『ルカによる福音書』(14:11)) からの引用。

209) 上注 180 を参照。文言の内容は類似しているが、引用箇所は同じではなく、また、両方ともパウロの言葉ではない。

210) ヤロスラフ [I2] は、「ロスチスラフ一族」諸公 (リユーリク [J2], ダヴィド [J3], ムスチスラフ [J5]) の父方の従兄弟にあたっている。

211) この約定は、諸公遠征軍がヴィシエゴロド包囲を解いて撤退するときに行った、「ロスチスラフ一族」との和議のときに決めたものと考えられる。その時期は、聖母生誕祭 (1173 年 9 月 8 日) から始まった 9 週間のヴィシエゴロド攻城戦が終わった後だから、1173 年 11 月後半になるだろう。

212) これに該当する、ヤロスラフ [I2] とスヴァトスラフ [C411:G] の間の約定については、これまで年代記の記述に触れられていない。

かれ〔ヤロスラフ [I2]〕はかれ〔スヴァトスラフ [C411:G]〕にこう言い始めた。「そなたは、われらの父の地²¹³⁾に、いかなる関わりがあると言うのだ。こちら側は²¹⁴⁾そなたには必要ないではないか」。

スヴァトスラフ [C411:G] はかれ〔ヤロスラフ [I2]〕にこう言い始めた。「わしはハンガリー人でもポーランド人でもない²¹⁵⁾。われらはともに同じ先祖の子孫²¹⁶⁾ではないか。そなたがそれ〔キエフ〕に関与すると同じだけ、わしも関与しているのである。もし、そなたが最初の約定²¹⁷⁾を守らないのなら、そなたの自由にするがよい²¹⁸⁾」。〔スヴァトスラフ [C411:G]〕はこう言うと、兄弟たちを糾合して、キエフへ急襲を仕掛けるべく出陣した。

ヤロスラフ [I2] は、兄弟たち²¹⁹⁾と合流していなかった。かれは、敢えてキエフ城内に一人で籠城することをせず、ルチェスクへと逃げ出した²²⁰⁾。

213) ヤロスラフ [I2] がキエフとその公領を「われらの父の地」(наша отчина)と言うときには、ヤロスラフ [I2] と「ロスチスラフ一族」の共通の先祖である、ウラジーミル・モノマフ [D1] 及びその子のムスチスラフ [D11] が代々支配してきた土地という考え方に基づいている ([イパーチイ年代記 (2) : 307 頁, 注 123 参照])。

214) 「こちら側」(си сторона) は、キエフを含むドニエプル右岸の地方を指している。

215) 父の地(отчина)の権利を主張するときに、異族としてのハンガリー人・ポーランド人を持ち出す言い方は、1150年の記事では、イジャスラフ [D112:I] がアンドレイ [D173] にゴルイニ川流域の領地を請願したときの言葉「わしにとって父の地は、ハンガリーにも、ポーランドにもない。ルーシの地にあるだけだ」と共通している [イパーチイ年代記 (4) : 345 頁]。この言い回しは、領地交渉のときの定型句だったのであろう。

216) 「同じ先祖の子孫たち」(одного дѣда есмы внуци)の単数形の дѣд は、本来は「祖父」という意味で「われらは一人〔共通の〕祖父の孫」とも解釈できる。しかし、ここでは、二人の共通の先祖であるヤロスラフ賢公 [I3] を指しているだろう。中世ロシア語では、дѣд は「先祖」、внук は「子孫」という意味で使われることがある。

なお、スヴァトスラフ [C411:G] の母親は、ムスチスラフ [D11] の娘エフロシニヤであり、ムスチスラフ [D11] はスヴァトスラフ [C411:G] にとって母方の祖父にあたる。他方で、ヤロスラフ [I2] の父イジャスラフ [D112:I] の父親はムスチスラフ [D11] であり、ムスチスラフ [D11] はヤロスラフ [I2] の父方の祖父にあたる。すなわち、ムスチスラフ [D11] は、スヴァトスラフ [C411:G] とヤロスラフ [I2] の「共通の祖父」ということになり、このことを指している可能性もあるが、キエフ継承権の主張で母系の血統を持ち出すのは、他に例がない。

217) 上注 212 を参照。

218) 「そなたの自由にするがよい」(а волень еси)とは、互いに十字架接吻の誓約から〈自由〉になって、争議を戦争で決着を付けることを意味する。

219) ここの「兄弟たち」とは、約定によってヤロスラフ [I2] のキエフ公としての地位を支えていた「ロスチスラフ一族」(リューリク [J2], ダヴィド [J3], ムスチスラフ [J5]) の諸公を指している。

220) 『ラヴレンチイ年代記』6675(1175)年の並行記事では「チェルニゴフ公スヴァトスラフ [C411:G] はかれ〔ヤロスラフ [I2]〕に襲撃を仕掛け、キエフ〔城内〕に進入すると、かれ〔ヤロスラフ〕の従士たちを捕らえた。ヤロスラフは逃げ出した」となっている。

こうして、スヴャトスラフ [C411:G] がキエフへ入城し、自分の祖父、自分の父の公座に座した²²¹⁾。

かれ〔スヴャトスラフ [C411:G]〕は公座に就くと、ヤロスラフ [I2] が持っていた無数の財産を接収した²²²⁾。そこでまた、ヤロスラフ [I2] の妃²²³⁾ と年少の息子²²⁴⁾ を襲撃して捕らえ、かれ〔ヤロスラフ〕の従士団もすべて捕らえた。そして、〔全員を〕チェルニゴフへと送った。この襲撃は誰にも知らせることなく行われた。かれ〔スヴャトスラフ [C411:G]〕の兄弟たち²²⁵⁾ に知らせずに、オレーグ一族の一人²²⁶⁾〔スヴャトスラフ〕だけがキエフに入城した。

ヤロスラフ [I2] は、キエフに公がいなくなったこと²²⁷⁾、オレーグ一族によって掠奪されたことを聞いた。そして、〔キエフ人に対して〕怒りを発して、再びキエフへ入った²²⁸⁾。かれは、キエフ人に重い責任を負わせようと考えて、こう言った。「おまえたち〔キエフ人〕は、わしに敵対して、スヴャトスラフ [C411:G] を〔キエフに〕引き入れた。考えるがよい、どのよう値をもって、わが妃と子供を買い戻したらよいのか」。かれら〔キエフ人〕は、かれ〔ヤロスラフ [I2]〕に答えることができなかった。〔ヤロスラフ [I2]〕はすべてのキエフ人に税を課した。典院と司祭、修道士と修道女、ラテン人²²⁹⁾ と商人の区別もなく〔課税した〕。また、すべての

221) キエフをスヴャトスラフ [C411:G] の「自分の祖父、自分の父の公座」とする文言は、キエフをスヴャトスラフの「父の地」と認めないヤロスラフ [I2] や「ロスチスラフ一族」の側に立つこの記事の視点からは一見すると矛盾している。しかし、この文言は、キエフ年代記集成の最終段階で、公座就位の記事に対して機械的に添えられたもので、編集上の補足と見るべきである。

222) このスヴャトスラフ [C411:G] のヤロスラフ [I2] に対するキエフ公位の要求と奪取は、ヤロスラフが公位に就いてすぐに、すなわち 1173 年末に行われたと考えられる。『ラヴレンチイ年代記』 6675(1175) 年の並行記事によれば、「〔スヴャトスラフ [C411:G]〕はキエフに 12 日間座して、再びチェルニゴフに戻った」となっていることから、はじめからキエフの公座就位を狙ったものではなく、掠奪目的の要求だったのだろう。

223) ヤロスラフ [I2] は 1149 年より前に、チェコ (ボヘミア) 王ヴラチスラフ二世の姉妹 (ヴラチスラフ一世の娘) と結婚した。かれの妃とはこの女性にあたる。[Rusian genealogy]

224) ヤロスラフ [I2] の息子について言及されるのはここが初めて。「年少の息子」が誰であるかは特定できないが、かれにイジャスラフ [I21]、イングヴァリ [I22]、フセヴォロド [I23]、ムスチスラフ [I24] の 4 人の息子がいた。ウクライナ語訳では、「イジャスラフ」[I21] と特定しているが理由は不明。

225) この「かれの兄弟たち」(братья его) は、オレーグ一族 (Ольговичи)、すなわち、ヤロスラフ [C412]、オレーグ [C431]、イーゴリ [C432] 等を指している。

226) 原文では「オレーグの息子」(Ольговичъ) で、ここでは「オレーグ一族」(Ольговичи) の単数形であることから、「スヴャトスラフ [C411:G] が一人で」と解釈することができる。

227) 上からのつながりからは、キエフ公がいなのは奇妙だが、『ラヴレンチイ年代記』に記されている「スヴャトスラフは 12 日しかキエフの公座に座さなかった」(上注 222) の事実が踏まえられている。

228) 年代記記事の時系列から判断すると、1173 年の年末頃と考えられる。

229) 「ラテン人」(латина) とは、西欧からやって来てキエフに住んでいるカトリック教徒の商人たちを指している。

キエフ人を城内に閉じ込めた²³⁰⁾。

その頃、チェルニゴフ公〔スヴァトスラフ [C411:G]〕とオレーグ・スヴァトスラヴィチ²³¹⁾ [C431] が不和の状態にあった。オレーグ [C431] は、スヴァトスラフ [C411:G] の領地であるチェルニゴフの地に掠奪を仕掛けていた。そこで、スヴァトスラフ [C411:G] は、キエフ〔公〕のヤロスラフ・イジャスラヴィチ [I2] と和を結んで、オレーグ [C431] を討つべく進軍した。そして、かれの領地を焼き打ちし、多くの悪行をなし、チェルニゴフへ帰還した。

この年、篤信の公スヴァトスラフ・ユーリエヴィチ²³²⁾ [D179] が逝去した。1月11日²³³⁾ のことだった。この公は神に選ばれた者であり、生まれた時から成年に達するまで重い病気を患っていた。聖使徒と聖師父たちはかれの病気の快癒を神に懇願していた。書物に書かれているように、この病気で苦しんでいる者は、肉体は苦しみを受けても、魂は【580】救われるのである。このように、(聖なる²³⁴⁾) スヴァトスラフ [D179] は、真に神に適う者であり、諸公の中でも選ばれた者であった。神はかれを地上の公はしなかったが、かれには天の王国を与えたのである。かれが永眠²³⁵⁾ したのちに、兄のアンドレイ [D173] は、スーズダリの聖母首座教会²³⁶⁾ にその遺体を埋葬した。

この年、ムーロムの公、ユーレイ [C5111] が逝去した。1月19日²³⁷⁾ のことだった。遺体は、自らが創建した〈キリスト教会²³⁸⁾〉に安置された。

230) ヤロスラフ [I2] は、妃と息子をを買い戻す莫大な身代金をキエフ人たちから集めるまでは、かれら(特に商人たち)が城外を出ることを禁止したということ。

231) 当時は、ノヴゴロド・セヴェルスキイ公だった。

232) ユーレイ手長公 [D17] の息子の一人であるスヴァトスラフ [D179] についてはここが初出。病弱のために、兄弟であるアンドレイ [D173] に引き取られて暮らしていたと考えられる。

233) 1174年1月11日のこと。

234) 「聖なる」(святыи)の語はフレーブニコフ写本及び、『ラヴレンチイ年代記』並行記事にある読み。

235) 「永眠」(успение)は、聖人の死をあらわす雅語。

236) このスーズダリの教会は本年代記では初出。1101-1102年頃に建設され「聖母就寝」(Успение)に奉献されたと聖堂と推定されており、「キエフ洞窟修道院聖僧伝」(Киево-Печерский патерик)に言及されている。ただし、「首座の」(епискупи) (この語は『イパーチイ年代記』での補筆による)とあることから、1158年4月にアンドレイ [D173] が定礎した、ヴラジミルの首座教会「聖母就寝教会」(Успенская церковь)を指している可能性もある ([イパーチイ年代記(6): 224頁, 注201; 246頁, 注337] 参照)。

237) 1174年1月19日のこと。

238) 「キリスト教会」(Христова церковь)という呼び名は通常は教会の名称にはなく、キリストに関する祭日(主の降誕祭, 洗礼祭, 神現祭など)のいずれかに奉献された教会と考えられる。

その頃、ロスチスラフ一族²³⁹⁾は、アンドレイ公 [D173] と〈その兄弟たち〉²⁴⁰⁾に使者を派遣して、ロマン・ロスチスラヴィチ [I1] をキエフ公とするように請願した²⁴¹⁾。アンドレイ公 [D173] は言った。「すこし待たれよ。わしはすでにルーシへ、自分の兄弟たちのもと²⁴²⁾に使者を遣った。わしがかれらから知らせを受け取ったら、そなたに回答をしよう」。

6683 [1175] 年²⁴³⁾

スーズダリの大公、ユーリイ [D17] の息子でウラジーミル・モノマフ [D1] の孫、アンドレイ [D173] が殺害された。6月28日のことだった。それは聖使徒たちの祭日の前夜のもので、その日〔祭日〕は土曜日だった²⁴⁴⁾。

239) この「ロスチスラフ一族」(ростиславичи)の語は、『ラヴレンチイ年代記』6675(1175)年の並行記事にはなく、並行記事では「ロマン [J1] とその兄弟たち」が主語になっている。「ロスチスラフ一族」の語は、キエフで共通資料を編集したときの追加部分と考えられる。つまりここでは、ロマン [J1]、リユーリク [J2]、ダヴィド [J3] が使者を派遣して、アンドレイ [D173] に請願をしたということ。

240) この〈その兄弟たち〉(с братьею своею)は、前注の編集のときに誤って残されたもの。

241) キエフの公座にあったヤロスラフ [I2] は、「ロスチスラフ一族」の支持によって、キエフの公座に就いたのだが、この時点では、なんらかの理由で、その支持を失い、不和になったと思われる。そのため、「ロスチスラフ一族」諸公はそれまでの方針を変えて、兄のスモレンスク公ロマン [J1] をキエフ公に就けるよう、アンドレイ公 [D173] に懇願をしたのである。

242) ルーシの兄弟たちとは、アンドレイ [D173] と同盟している、スヴャトスラフ [C411:G] を初めとするチェルニゴフ地方の諸公を指している。

243) この年代の始まり部分から「アーメン」の句で結ばれる(下注313)までの部分では、アンドレイ公 [D173] の殺害とその後の事件が叙述され、文学史では『アンドレイ敬神公殺害の物語』(Повесть о убиении Андрея Боголюбского)として、独立した作品として扱われており(『БЛДР Т. 4: С. 206-217』)、文献学・文学史的な研究も多くなされている(『СККДР Вып.1: С. 365-367』)。この部分の引用・借用・編集にかかわる問題については、以下の注で適宜触れることとする。また、本年代記を底本とした作品の邦訳もある(『三浦 2012: 77-109 頁』)。

244) 「聖使徒たちの祭日」とは「聖ペトロと聖パウロ」の祝祭日のことで、6月29日に相当している。その日は、1174年では確かに土曜日に当たっていた。『ノヴゴロド第一年代記』6682(1174)年の記事では「聖ペトロとパウロの日の前夜」(на канун святых апостол Петра и Павла, в ночи)となっている。

かれ〔アンドレイ〕は自分のために、石造の城市ボゴリュービー²⁴⁵⁾ (Боголюбьи) を建設した。ボゴリュービーとヴラジミルの間の距離は、 ヴィシェゴロドとキエフほど離れていた²⁴⁶⁾。

この²⁴⁷⁾ 篤信でキリストを愛するアンドレイ [D173] 公は、若年の頃からキリストといとも淨きその母を愛し、理知と智恵を淨めていた²⁴⁸⁾。あたかも〔聖母を〕美しい宮殿であるかのよように〔愛し〕、自分の魂をあらゆる善き品性で飾っていた。【581】かれは、ソロモン王に倣っていたので²⁴⁹⁾、主なる神に献じた家〔聖堂〕といとも栄えある聖母生誕の石造の教会堂²⁵⁰⁾ を、ボゴリュービーの城内に建設した。そして、それ〔教会堂〕を他のいかなる教会よりも美しく

245) 「ボゴリュービー」(Боголюбый) は、ヴラジミル〔クリャジマ河畔〕の中心地から北東へ11km ほどはなれた付属城市で、現在のボゴリューボヴォ(Боголюбово)に相当する。この城市の創建については、15世紀に編集された『ソフィア第一年代記』『ノヴゴロド第四年代記』の6666(1158)年の項に、「〔アンドレイ〕がボゴリューボエの城市を定礎した」(град заложил Боголюбое)という記事がある。

アンドレイにつけられた「敬神公(神を愛する)」(боголюбский)のあだ名は、以下にあるように(下注265)年代記記事でかれに対する形容語としても用いられており、すでに同時代に用いられていたことがわかる。カラムジンは、このあだ名は城市名に由来すると推定しているが[Карамзин. Т.3, прим. 26]、アンドレイ自身が、意図的にこの形容語を城市にも、自分にも付した可能性もある。

246) この表現は、ネストルの作とされる『ボリスのグレープについての講話』(Чтение о Борисе и Глебе)の「ヴィシェゴロドは公座のある城市キエフから15スタディオン離れている」[Абрамович 1916: С. 11]の表現を踏まえたもの[Ковалев 2010: С. 6]。総じて、この『殺害の物語』の『イパーチイ年代記』における補筆部分には、上記『講話』からの引用や影響が強く認められる。

247) なお、現在のキエフ中心地とヴィシホロドの間の距離は約15kmだから、ほぼヴラジミルとボゴリューボヴォとの距離に対応している。

248) ここから、以下の「祈り給え」(下注268)までは、構成上は「アンドレイ公への讃詞」(похвала)に相当する、聖人伝のジャンルに属する文体で書かれている。

「淨める」は原文では全ての写本で оставивъ (斥ける)だが、『ラヴレンチイ年代記』の並行箇所は очистивъ になっており、こちらが本来の読みである。

この「理知と智恵を淨めていた。あたかも美しい宮殿のように」(смысл бо очистив и ум, яко полату красну)の表現は、聖母庇護祭(Покров пресвятыя Богородицы)のリティアの讃頌(ステイヒラ)(На литии стихиры)の一節 Смысл очистивше и ум, со Ангелы и мы торжествуем, светло начинающе Давидскую песнь Отроковице, (理知と知恵を淨めて、天使たちともわれらは祝う。聖なる女子に献げるダビデの歌を輝かしく歌い始める)からとられている。この聖母への讃頌にはまた、яко бо палату красну, Сию украсив, и причте Ю граду Твоему, Владыко, (美しき宮殿のごとく、その御方〔聖母〕を彩り、主宰よ、あなたはその御方をあなたの城市に加え入れた。)の文言もあり、この部分が聖母庇護祭の讃頌にもとづいて創作されていることがわかる。

249) 都市とその建物の建設者としてソロモン王を取り上げることは、キエフ・ルーシの文学伝統ですすでに定着していた[Филипповский 1991: С. 53]。例えば、11世紀の府主教イラリオンの『律法と恩寵についての説教』(Слово о законе и благодати)にも同様のモチーフを見ることができる。[Ковалев 2010: С. 8]

250) この「聖母生誕教会」(церковь святыя Богородица Рожества)については、上注245のボゴリューボヴォの城市が建設されたと同時に、城市内に建設されたと推定されているが、考古学的に確認されてはいない。

飾った。それはあたかも、叡智のソロモン王が建設した聖の聖なる〔神殿〕に倣ったごときであった。

このようにして、この篤信の公アンドレイは、自分を記念するためにこのような教会堂を建設し、高価な聖像画、黄金、宝石、価値ある大粒の真珠でこれを飾り、様々な装飾を施し、碧玉の板と装飾的鑄造で飾った。聖堂が輝くことは、あたかも見ていて目が痛くなるほどだった。なぜなら、聖堂は黄金に包まれていたからである。かれ〔アンドレイ〕は聖堂を飾り、黄金の高価な備品を供え、堂内に入る者を皆驚かせた。それゆえ、これを見た者は皆、その信じがたい美しさを言葉によって表現することはできなかった。黄金、エナメル、あらゆる宝石、教会の財産で飾られ、あらゆる教会の聖具で〔飾られていた〕。黄金の聖体保管器²⁵¹⁾は高価な宝石が付されていた。高価な扇、様々な香炉があり、外側は天上から床まで、壁も柱も黄金で覆われており、教会の扉も円蓋もやはり黄金で覆われていた。丸屋根は【582】頂上から〈とりなしの段〉〔のアイコン〕まで黄金で飾られ、様々な教会の富で満たされていた。あらゆる巧みな業で飾られていたのである。

アンドレイ公はヴラジミルを難攻不落の城市として建て、そこに黄金の城門を設けた²⁵²⁾。他の〔城門〕は銀で仕上げた²⁵³⁾。聖母に奉献した石造の首座教会を建設した²⁵⁴⁾。非常に美しく、金銀の様々な飾りを施し、5つの丸屋根も金で葺いた。教会の3つの扉は黄金で飾った。高価な宝石と真珠で様々な色彩に〔聖堂を〕装飾した。あらゆる装飾模様で〔聖堂を〕飾った。多くの金銀の燭台で教会堂を照らし出した。升壇も金銀で飾り立て、典礼用の聖器、そしてあらゆる教会の器物を黄金、宝石、大粒の真珠をふんだんに使って〔飾った〕。3番目の聖体保管器は非常に大きく、純金と様々な色彩の宝石が施されていた。その外見と装飾は、ソロモン王の聖の聖なる〔神殿〕と驚くほど似ていた。

〔アンドレイ公は〕ボゴリュービイでもヴラジミルの城市でも、丸屋根を黄金で葺いて飾り、円蓋を黄金で飾り、内部の石壁、柱を黄金で覆い、〔聖堂の〕外側には、黄金【583】の鳥、杯、帆の装飾がほどこされ、中堂のあらゆる場所、円蓋も〔飾られた〕。

それ以外にも、かれ〔アンドレイ〕は多くの教会を、様々な石造で建て、また、修道院も建設した。なぜなら、神はすべての教会の位階〔の聖職者〕、すべての教会人にその視線を注い

251) 「聖体保管器」(ерусалим)は、聖堂の至聖所の中に置かれ、聖体礼儀に用いる聖体(聖パン)を一時的に保管しておく金属製聖器物のこと。次の記述にあるように、外見がエルサレムのソロモンの聖堂(神殿)をかたどっていることから、シオン(сион; зион)、あるいはエルサレム(ерусалим)と呼ばれていた。

252) 城市の西にあり、現存している金門(золотые ворота)を指している。(下注305参照)。

253) 城市の東に建てた「銀門」(серебряные ворота)を指している(下注302参照)。

254) 1158年4月にアンドレイ[D173]が定礎した、ヴラジミルの首座教会「聖母就寝教会」(Успенская церковь)のこと(『イパーチイ年代記』(6):224頁、注201;246頁、注337)参照)。

でいたからである。〔アンドレイは〕醜陋によってその智慧を曇らせることなく、修道士、修道尼、貧しい者たち、あらゆる位階の者たちの養い手だった。それは、愛される父のようであった。

また、かれ〔アンドレイ〕は、よく施しをなした。それは、次の主の言葉に耳を傾けていたからである。「わたしの兄弟である最も小さい者になしたことは、わたしにしてくれたことなのだ²⁵⁵⁾」また、ダビデはこう言っている。「憐れみ深く、貸し与える人は幸いである。主に従う者は揺らぐことはない²⁵⁶⁾」。

かれ〔アンドレイ〕の中には雄壮さ²⁵⁷⁾と理知が宿り、信義と真理が、二つながらかれとともに歩んでいた。かれには他の徳性も多くあり、あらゆる道徳的な習慣を身につけていた。かれは夜にも聖堂に入り、自ら蠟燭を灯し、イコンに描かれた神の聖像に目をやり、創造主ご自身であるかのように見つめていた。また、イコンに描かれた聖人たちを見ては、自らの姿を低くし、心を悲しませ、深いため息をつき、目からは涙を溢れさせ、悔い改めにおいてダビデ王に倣い、多くの自らの罪を思って泣き、**【584】**はかなく過ぎるものよりも、滅びることない不死なるもの、天上なるものを愛し、地上の王国の生よりも、全能の神のもとで聖人たちと分かち合う生を愛した。かれは、すべての徳で飾られていた。それは、賢王ソロモンの再来のごとくであった。

かれは、そのような徳を備えており、毎日、城市内で荷車に積んで、様々な食べ物や飲み物を、病人や乞食たちのために施すよう命じていた。かれに施しを求めてくる乞食を見ると、求められたものを与え²⁵⁸⁾、「この者は、わしを試みるためにやってきたキリストではないだろうか」と言っていた。このようにして、かれは、自分のもとにやって来る者は誰でも受け入れた。それは、キリストがこう言い遺したごとくであった。「私の兄弟である最も小さき者になしたことは、わたしにしてくれたことなのである²⁵⁹⁾」。そして、その言葉を常に心の中に守っていた。

そのことによって、アンドレイ公よ、あなたは神の手から然るべく勝利の冠を授けられた。

255) 新約『マタイ福音書』(25:40)からの引用。

256) 『詩篇』(111:5,6) (邦訳 112:5,6) からの引用。なお、「憐れみ深く (...) 幸いである」の文言は、『原初年代記』6504(996)年のウラジーミル聖公についての讃詞にも使われている。[ПСРЛ Т. 1, 1997: С. 125][ロシア原初年代記: 139頁]

257) 「雄壮さ」(мужество)については、下注 260 参照。

258) この城内の病人や乞食たちへの施しのモチーフは、上注 256 と同じく 996 年のウラジーミル聖公の徳を讃えるなかで「〔ウラジーミルは〕すべてのすべての乞食と貧しい者に、(...) あらゆる必要な物、飲み物と食べ物を与えるよう命じた。かれは荷車を仕立て、パン、肉、魚、蜜を積むように命じた」[ロシア原初年代記: 139頁]と類似の文言がある。

259) 上注 255 と同じ文言で、新約『マタイ福音書』(25:40)からの引用。

名前が持つ雄壮さ²⁶⁰⁾を、智恵ある二人の兄弟の聖受難者²⁶¹⁾〔の事蹟〕を引き継いだのだった。かれらの受苦の血に自らまみれながら。なぜなら、「もし、試練がなければ、冠はないだろうし、苦痛がなければ、賜物もないだろうから²⁶²⁾」。徳を備えた者は誰であれ、多くの敵を相手にせざるを得ないのである。

アンドレイ公は、敵が自分を殺害しようとしているという、自分にかかわることを予め感じ取って、神の霊に燃えながら、何ごともないかのように考えて、次のように言った。「神に愛されていた人々は、わが主なる神、全能者、かれらの創造主である御方を十字架に釘付けにして、『その血の責任はわれわれと **【585】** われらの子孫にある²⁶³⁾』とやったのだ」。また、〔アンドレイは〕、聖使徒たちの口から発せられた次の言葉を語った。「友のために自分の命を捨てられる者は、わたしの弟子になれる²⁶⁴⁾」。ところが、この神を愛する公²⁶⁵⁾は、友のためではなく、非在から存在へと万物を創り出した創造主御自身のために自分の命を捨てたのだった。

このようにして、受難者²⁶⁶⁾ アンドレイ公よ、天軍は、そなたの殺害を見て、キリストのために流された血を見て大いに驚いたのだった。多くの正教の民は、孤児たちの父にして蒙昧な者たちの養い手が、輝ける星が闇に包まれたのを見て号泣した。呪われた殺人者どもは、永遠の業火に包まれ、いかなる罪の茨を、すなわち、いかなる悪事をも焼き尽くすのである。受難者よ、万能の神に祈り給え。あなた一族のため、一門のため、ルーシの地のために²⁶⁷⁾。〔神

260) アンドレイ (Андрей) の名はギリシア語の Ανδρέας から来ており、ギリシア語では「雄壮さ、勇敢さ」を意味していることを指している。

261) 聖ボリスと聖グレーブ公を指している。

262) 原文は、 аще бо не напасть, то не вънѣць, аще ли не мука, то ни дарове で、これは新約『ヤコブの手紙』1:12の「試練を耐え忍ぶ者は幸いである。その人は (...) 神を愛する人々に約束された命の冠を得る」(блажен муж, иже претерпит искушение: зане искусен был, примет венец жизни, егоже обеща бог любящим его.)の文言を格言的にパラフレーズしたもの。

263) 新約『マタイ福音書』(27:25)からの引用。

264) 新約『ヨハネ福音書』(15:13)「友のために命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」の句や『ルカ福音書』(14:26)「自分の命であれ、これを憎まないなら、わたしの弟子ではない」などをつなぎ合わせた引用句。これは人間への愛情についての聖句で、次にくる、神への愛情ゆえのアンドレイ公の死と比較するために引用されている。

265) この「神を愛する公」(боголюбивый князь)の形容は、上注245にあるように、アンドレイ公の通称と対応している。

266) この「受難者よ」(страстотерпче)の呼びかけはすぐあとにも繰り返されているが、この語は、もっぱらボリスとグレーブの両公に対する形容語として用いられており、この呼びかけによって、アンドレイ公がこの二人の受難者と類比されていることが分かる。

267) 「あなた一族のため、一門のため、ルーシの地のために」(о племени своем и о сроднищех, и о земле руськои)の文言は、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事ではなく、本年代記の編集者による加筆部分。「ルーシの地」はキエフを指しており、これによって、キエフの年代記記者の補筆が入っていることがわかる。

が] 世に平和を与え給うように²⁶⁸⁾。

われらは、最初に戻ろう²⁶⁹⁾。

こうして、金曜日の聖体礼儀²⁷⁰⁾の時に、法を犯す悪党どもの狡猾な謀議がなされた。公のもとには、ヤキム²⁷¹⁾という従者がおり、公はかれを信頼していた。この男は、公が自分の兄弟を処刑するよう命じたということを誰かから聞いて、悪魔の惑わしに心を捉えられ、自分の友人たち、悪しき共謀者たちのところに、叫びながら駆けつけた。それは、かつてユダがユダヤ人のもとに駆けつけ、自らの父サタンの意を迎えようとしたことと同じだった。かれは、こう言った。「今日、かれ〔自分の兄弟〕が処刑された。明日はわれわれの番だ。この公についてはかりごとをなそうではないか」。【586】 こうして、ユダが主になしたように、夜半に殺害の計画を立てた。

夜が来ると、かれらは急ぎやって来て、武器を取り、野獣のごとく、公を討つために出発した。かれらが、公の寝室へと向かって行った時、かれらを恐怖と震えが貫いた。かれらは、階上の間から蜜酒の蔵へ降りて、〔蜜〕酒を飲んだ。こうして悪魔は蔵でかれらに力を与え、見えずしてかれらに仕え、かれらが自分の約束したことを実行することを助けたのである。酒をたらふく飲むと、かれらは階上の間へと向かった。

殺人者の筆頭はクチコ²⁷²⁾の娘婿ピョートルであり、またヤース人で鍵番のアンバル²⁷³⁾、クチコの息子ヤキムがいた。神に逆らう殺人者の数は総勢 20 人であり、クチコの娘婿ピョートルのもとで呪われた謀議をなしたのだった。

土曜日、聖使徒ペテロとパウロの祝日の夜が来たとき、かれらは武器を手にとり、猛獣の

268) 上注 247 からこの部分までは、アンドレイ公への「讃詞」(похвала) に相当する。

269) アンドレイ公への讃詞を終えて、殺害事件の叙述の個所(上注 244)に戻るということ。

270) 1174 年 6 月 28 日の金曜日を指している。

271) この「ヤキム」(Яким)は、「従者」(слуга)となっているが、以下では「クチコの息子」(Кучкович)とあるように、有力在地貴族出身(次注)の側近としてアンドレイに仕えていたのだろう。

272) 「クチコ」(Кучко)は、本年代記 6684(1176)年の記事に、モスクワの旧名として「クチコヴォ」(Кучково)という地名が記されており(下注 373)、これはクチコ一族の所領と解釈できることから、モスクワからヴラジミルにわたる広大な所領を有していた在地貴族の家名と考えるのが定説となっている。後代の年代記には、アンドレイ公の最初の妻がクチコ一族(кучковичи)出身者だったという記述も見られ、少なくとも、一族はアンドレイ公の側近として大きな勢力を築いていたと考えられている。

273) 「ヤース人で執事のアンバル」(Анбал ясин ключник)の「ヤース人」は黒海からカスピ海にかけて広い地域に定着したアラン系の民で、12 世紀当時は、黒海北岸の「ポロヴェツの地」に居住していた。現在の北カフカスのオセット人はその末裔とされている。[イパーチイ年代記(1):262 頁, 注 105]。「鍵番」(ключник)は、公の屋敷を管理している奉公人(主に従属民出身)を指している。

ように寝室に近づいて行った。そこでは、福者²⁷⁴⁾ アンドレイ公が寝ていた。〔殺人者の〕一人が扉のところで「ご主人様、ご主人様」と呼んだ。公は「そこにいるのは誰か」と答えた。その者は言った。「プロコピイです²⁷⁵⁾」。しかし、公は疑わしげに言った。「おお、召使いよ、だがプロコピイではない」。一同は扉の所に押し寄せると、そこに公がいることを知って、扉を打ち始め、力づくで扉を打ち破った。福者〔アンドレイ公〕は飛び上がると、剣を手にとろうとしたが、そこには剣はなかった²⁷⁶⁾。なぜなら、その日のうちにかれの鍵番のアンバルが剣を持ち去ってしまったからである。【587】その剣は聖ボリスの剣²⁷⁷⁾ だった。

二人の殺人者が突入し、かれ〔アンドレイ〕に飛びかかった。公は一人を投げ倒した。他の者たちは、公が倒されたと思って、暗闇で味方の一人を刺した。しかし、しばらくして、公に気がつき、かれと組み合った。なぜなら、かれは力が強かったからである。かれを剣と刀剣で斬り、かれに槍傷を与えた²⁷⁸⁾。かれ〔アンドレイ〕は叫んだ。「おお、お前たち神に逆らう者どもよ、呪われよ。なぜ、お前たちはゴリヤセル²⁷⁹⁾ (Горясьр) のようなことをするのだ。わしが、いかなる悪をおまえたちになしたのか。もし、おまえたちが地上にわしの血を流すようなこと

274) 聖人への讃詞 (похвала) のジャンルに倣って書かれているために、称賛される対象のアンドレイを、聖人の尊称のひとつ「福者」(блаженный)と呼んでいる。

275) この「プロコピイ」(Прокопий)は、すぐ後に呼ばれる「召使い」(паробок; порабок)、すなわち公の身の回りの世話をする年少の従者を指している。『ノヴゴロド第一年代記』6682(1174)年の並行記事には、「〔公〕とともにいたのは年少の小姓だけだった」(бъше с ним кощен един мал)と、「小姓」(кощен) (隷属民出身の召使い)と呼ばれており、これに対応しているだろう。

276) アンドレイ公の「剣」(меч)について、『ノヴゴロド第一年代記』の並行記事では、「公は気がつくと、剣を手にとり、扉のところに立った」として、本年代記とは反対のことが書かれている。失われた剣のエピソードは『ラヴレンチイ年代記』の並行記事にもあるが、「聖ボリスの剣」(мечь святаго Бориса)が敵の手で盗まれたことで、聖ボリスの加護を失ったことが、アンドレイの死の一因であるような書き方は文学的な創作がうかがえ、『ノヴゴロド第一年代記』の記述が事実に近いのではないか。([Ковалев 2010: С. 4]も参照)

277) 「ボリスの剣」(мечь святаго Бориса)については、以下の記述(下注279)にもあるように、アンドレイ公殺害の場面全体が、聖ボリス公殺害の場面を文学的な手本として、それに倣うように創作されていることから、「聖ボリスの剣」も象徴性を担わせるための創作である可能性が強い。

278) 「かれに槍傷を与えた」(копинныя язвы даша ему)は、『ノヴゴロド第一年代記』6682(1174)年の記事では、「幅広の槍で突いた」(насунуша рогатинам)となっている。「二人の殺人者」からここまでの個所には、翻訳文献「アレクサンドロス大王物語」(Александрия Хронографическая)のダリウス王殺害の場面のテキストが全面的に利用されていることから見て[Вилкул 2005: С. 56]、『ノヴゴロド第一年代記』の記述のほうが史実に近いと考えるべきだろう。

279) 「ゴリヤセル」は、『原初年代記』6523(1015)年の記事や『ボリスとグレーブの物語』(Сказание о Борисе и Глебе)の聖ボリス殺害の場面で、スヴァトボルク公の手で派遣された暗殺者の名前[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 136]。

があれば、神は、わしのパンに対して²⁸⁰⁾、そなたたちに報復を与えるだろう」。

神に逆らう者どもは、かれを絶命させたと考えて、〔投げ倒された〕仲間を引き起こすと、かれを運び出し、震えながら去って行った。かれ〔アンドレイ公〕は、苦しみながらも、かれらのあとから〔寝室を〕飛び出して、血を吐き吹き始めた。そして、心を痛めながら、階上の間の下のところまで行った。かれらはその声を耳にして、再びかれ〔アンドレイ公〕を〔討つために〕引き返した。

かれらが立っていたとき、立っていた一人の男が、公は階上の間から降りて来るのを見た。そして、「かれを見よ」と言った。かれらは、殺して立ち去った場所に、公はいないかどうかを確かめに行った。その男は言った。「われらは滅んでしまう、すぐにかれを捜すのだ」。こうして、蠟燭を灯し、血の跡をたどって捜索が始まった。

〔アンドレイ〕公は、一同が自分のところに近づいてくるのを見て、両手を天に挙げ、神に向かって言った。

「神よ、もし今わたしの最期が定められているのなら、これを受け入れます。**[588]** 主よ、わたしは大きな罪を犯してきました、あなたの戒律を守ってきませんでした。しかし、あなたは、泣き叫ぶ者に対して慈しみ深く、迷える者を導き迎え入れてくれることを、わたしは知っています」。

そして、心底より息をつき、涙を流して、ヨブの身に起きたすべてのことを想いながら、自らの心の中で次のように思慮して、こう言った。²⁸¹⁾「このような受難と様々な死が義人たちを見舞ってきたのだ。それは、あたかも聖なる預言者、使徒、殉教者たちが受難の冠を受け、主に倣っておのれの血を流したのと同じである。また、聖なる殉教司祭、修道聖人の師父たちが、多くの悲惨、激しい苦痛、様々な死を受けたこと、坩堝の中の金のごとく 悪魔の試練を受けたことと同じである。主よ、これらの方々の祈りによって、右手の羊たちとともに、あなたの選ばれた群れの中にわたしをお加え下さい。また、義しき信仰の聖なる諸帝が自らの血を流し、自らの民のために苦しみを受けたと同じように。さらに、われらが主なるイエス・キリストよ、尊き血によって悪魔の欺瞞からこの世を贖い給え」。

このように唱えて〔アンドレイは〕自らを慰め、再び次のように言った。「主よ、どうかわれの無力なることを見給え、わが恭順なること、今われを捕らえているひどい悲しみと嘆きを

280) 自分が相手（配下の者）にパン(хлеб)を与えて養ったにもかかわらず、相手に殺されるという忘恩行為に対する神の報復ということだろう。旧約『ヨブ記』(31:17-18)の「わたしのパンをひとり食べて、孤児に与えなかったというのか。わたしは、若い頃からかれらを養った」の文言を踏まえていると思われる。

281) この個所では、1147年に惨殺されたイーゴリ・オリゴヴィチ[C42]の記事にも、同様の表現が用いられている。[イバーチイ年代記(3):352頁、注12]を参照。

見給え。【589】わたしは〔あなたを〕恃んで堪え忍びます。主よ、あなたがわが魂を慎ませることに、すべて感謝をいたします。あなたの王国にあっては、われを、〔至福に〕与る者となし給え、主よ、見よ、もし今、わが血が流されるならば、われを聖なる殉教者の列に加わえ給え、主よ」²⁸²⁾。

かれ〔アンドレイ公〕が、階段の柱の陰に坐って、こう語りながら、自らの罪について神に祈っているとき、叛徒どもは長い間かれを捜していた。そして、無垢の子羊のように坐っている公を見つけた。呪われた者どもは、飛びかかると、かれにとどめを刺した。ピョートルはかれの右手を斬り落とした。

公は、天を仰ぎながら言った。「主よ、あなたの手にはわが靈魂を引き渡します²⁸³⁾」。そして永眠した。殺されたのは、土曜日の夜だった。翌朝の日曜日、十二使徒の祭日²⁸⁴⁾の夜明け時に〔死体となって〕あった。

呪われた者どもは、そこから戻ってくると、かれ〔アンドレイ公〕の最愛の従僕プロコピイを殺し²⁸⁵⁾、そこから階上の間へと向かい、黄金、宝石、真珠、あらゆる装飾品を奪い取った。それらは、すべて公が大切にしていたものだった。

かれらは、分捕り品を、下賜された馬に積み込むと、夜明け前にそこから運び出させた。そして、かれら自身は、下賜された武器を手にとると、従士たちを自分たちのもとに集めて、こう言った。「お前たちは、ヴラジミルから〔アンドレイ公の〕従士たちが来るのを、いたずらに待とうというのか」。こうして、部隊を結成した。それから、かれらはヴラジミルの〔城市〕へ使者を遣って、〔ヴラジミルの住民に対して〕こう言った。「おまえたちは、われらへの反抗を企てているのか。われらは、そなたたちと話し合いたい。この話し合いはわれらだけのものではなく、【590】そなたたちとも話合うことである」。すると、ヴラジミル人たちは答えた。「もし、お前たちと話し合いたい者がいるなら、お前たちの仲間にすればよい。だが、われらには〔話し合いは〕必要ない」。〔叛徒どもの部隊は〕あちこちへ行って、掠奪を始めた。見るも恐ろし

282) 「そして心底から息をつき」からここまでのかなり長い祈禱の文言は、本年代記 6655(1147)年の項に収録されている『イーゴリ公殺害の物語』のイーゴリ公自身の祈りの文言と完全に一致しており〔イパーチイ年代記(3): 352 頁〕、この先行記事からの引用(再使用)である。

283) この文言は、本年代記 6655(1147)年のイーゴリ公[C42]殺害の物語のイーゴリの言葉「わが靈魂をあなたの手には引き渡します」〔イパーチイ年代記(3): 354 頁〕と類似であり、この部分からの借用が想定される。同時に、類似の文言は、翻訳文学『アレクサンドロス大王物語』にもあり、そこからの借用の可能性もある〔Вилкул 2010: С.〕。

284) 「十二使徒の祭日」(на память 12 апостолу)は、毎年6月30日に祝われる「十二使徒の集い」(Собор 12 апостолов)の祝祭日のこと。1174年のこの日は確かに日曜日に相当していた。

285) 従僕プロコピイの殺害も、『ボリスとグレーブの物語』(Сказание о Борисе и Глебе)における、聖ボリス公の最愛の部下のハンガリー人ゲオルギイの殺害に倣って設定されたものだろう。〔БЛДР Т. 1: С. 336〕〔Ковалев 2010: С.7〕

い光景だった。

さて、キエフ人のクジミシチェ²⁸⁶⁾ (Кузмище) は〔殺害の〕場所に駆けつけた。しかし、殺害された場所には、公〔の遺体は〕なかった。そこで、クジミシチェは訊き始めた。「殺されたご主人様は、どこにいるのか」。〔叛徒どもは〕言った。「そこに横たわっている。〔屋敷から〕菜園へと引きずり出したのだ。〔遺体〕を引き取ってはならない。皆がこう言っている。〔遺体を〕捨て置いて犬に食わせることを、われらは望むと。もし、遺体を引き取ろうとする者があれば、その者はわれらの敵であり、われらはその者を殺すだろう」。

クジミシチェはかれ〔死んだ公〕について、こう言って嘆き始めた。「わが主人よ、あなたは、ご自身を殺そうとしてやって来た者、穢れた神に逆らう敵どもに、どうして気がつかなかったのですか。どうして、かれらに打ち勝つことを考え出さなかったのですか。あなたは、邪教徒のブルガール人に打ち勝ったではないですか²⁸⁷⁾」。こうして、かれは、〔死んだ公のことを〕嘆いた。

すると、ヤース人の執事アンバルが近づいて来た。かれは、公のすべての館の鍵を預かる鍵番で、公はかれに全権を与えていた。クジミシチェはかれ〔アンバル〕を見つめると、こう言った。「アンバルよ、敵手〔悪魔〕よ。われらの主人の遺体の下に敷き、あるいは覆うための、敷物なりとも、脱いでよこせ」。アンバルは言った。「ここから立ち去れ。われらは〔遺体を〕犬に食わせるために捨て置いたのだ」。クジミシチェは言った。「ああ、異端者よ。犬に食わせるために〔遺体を〕捨て置くとは。ユダヤ人め、お前がここに来たとき、どのようなボロ服を着ていたか覚えていないのか。今では、**[591]** お前はビロードを着て立っており、公は裸で横たわっている。だが、わしはお前に頼む、わしに何んでもよいから、脱いでよこせ」。かれ〔アンバル〕は敷物と上着を脱いでよこした。クジミシチェはそれで〔公の遺体〕をくろみ、それを〔聖母生誕〕教会のところまで運んだ²⁸⁸⁾。そして〔クジミシチェは〕言った。「わしのために、聖堂の扉の鍵を開けてくれ」。〔叛徒どもは〕言った。「かれ〔の遺体〕を啓蒙所²⁸⁹⁾に放り出しておけ」。

286) 「クジミシチェ」(Кузмище) は人名クジマ(Кузьма; Козьма)の卑称形。キエフ人(киянин)とあることから、キエフの府主教座あるいは教会から派遣されて、聖母生誕教会に勤めていた聖職者(司祭または輔祭)だったか。リュバコフは、この人物をこの『物語』の作者であり、本年代記のこの時代の記事の記者と推定している。[Рыбаков 1972: С. 79-87]。

287) アンドレイ公が、息子ムスチスラフ[D1732]に命じて、1170/1171年冬に行かせたブルガール人討伐遠征を指している。上注84を参照。

288) この公の遺体を運び敷物で覆うクジミシチェの行為は、11世紀に成立した、やはり公殺害物語である『チェコ聖公ヴァーツラフ伝』(Житие Вячеслав Чешского)に登場する司祭クラステイ(Крастей)の行いと共通のモチーフであり、この作品からの影響が想定される。[Филипповский 1991: С. 117-118]

289) 「啓蒙所」(притвор)は教会堂の玄関の間にあたり、神聖な聖堂とは区別された外の空間と見なされていた。

かれら〔叛徒ども〕も可愛そうと思ったのだろう。すでに、かれらは酒に酔っていたのである。クジミシチェは言った。「主人よ、あなたの召使いたち²⁹⁰⁾も、もはや、あなたのことを気に掛けようとはしません。かつては、帝都〔コンスタンティノポリス〕や他の国々から、ルーシの地から商人たちがやって来ました。ラテン人も、あらゆるキリスト教徒も、あらゆる異教徒も〔やって来ました〕。そのとき、〔アンドレイ公は〕こう言いました『かれら〔来訪者たちを〕教会の聖堂へ、聖歌隊席へと案内せよ。そして、真のキリスト教とはなにかを見せよ。ブルガール人も、ユダヤ人も、あらゆる邪教徒たちも、神の栄光と教会の装飾を見て、改宗せしめよ』。ところが、かれら〔召使いだった叛徒ども〕は、あなたの〔死を〕いっそう嘆いていながらも、〔あなたの遺体を〕聖堂内に置かせてもくれないのです」。

こうして、〔クジミシチェは遺体を〕教会堂の啓蒙所に置いて、上衣で覆った。〔遺体は〕そこで2昼夜置かれていた。3日目²⁹¹⁾に、聖コジマと聖デミアン修道院の典院アルセーニイ(Арьсьнии)がやって来て、こう言った。「われらは長い間、長老の典院たち〔が来るのを〕を待っていた。しかし、公〔の遺体〕をここで長い間、安置することはよいことではない。わしのために聖堂の扉の鍵を開けてくれ、わしは、公の葬儀をとり行い、遺体を棺に納めよう。【592】そして、この騒ぎが収まったときには、ヴラジミルから人がやって来て、かれ〔遺体〕をそこ〔ヴラジミル〕へ運んでいこう。そして、ボゴリュービイの聖歌隊員たちがやって来て、遺体を持ち上げると、聖堂の中に運び入れ、石造の棺に納め、かれの葬儀の聖歌を典院アルセーニイとともに唱った。

ボゴリュービイの住民たちは、公の館を掠奪した。〔建設の〕仕事のために来ていた大工たちも〔掠奪を行った〕。金、銀、衣服、生地など無数の財産が〔掠奪された〕。かれ〔アンドレイ公〕の領地での悪事が行われた。〔各領地に派遣されていた〕代官や家来たちの屋敷も掠奪された。かれら自身やその下僚、執行官²⁹²⁾が打ち殺され、その家屋が掠奪に遭った²⁹³⁾。〔略

290) 「召使いたち」(поробъщи)とは、家来でありながらアンドレイ公を殺害した、アンバルをはじめとする叛徒たちのことを指している。

291) アンドレイ公が死亡した6月29日の土曜日から数えて「3日目」だから、7月2日の火曜日になる。

292) 「下僚、執行官」(дѣтские, мечники)はともに、公や代官(посадник)のもとで裁判や徴税の執行を行っていた役人たちのこと。

293) 支配公が没すると、城市の民が、たちまち公やその代官や家来の家屋・財産の掠奪を始めることについては、1146年のフセヴォロド・オリゴヴィチ公[C41]の死に続くキエフの騒乱の場面にもあらわれている。〔イパーチイ年代記(2)：340頁、注326]参照。

奪者たちは)「〔神の〕法があるところには、また多くの屈辱がある²⁹⁴⁾」という言葉を知らないのである。村々からもまた、掠奪のために人々が駆けつけて来た。

ヴラジミルの城内でも掠奪が始まった。ミクーリツァ²⁹⁵⁾ (Микулица) が、飾り額をつけた聖母のイコン²⁹⁶⁾ を掲げて城内を行進し始めると、ようやく掠奪は止んだ。

使徒パウロは書いている。「すべての者は権力に服しなさい²⁹⁷⁾」。なぜなら、権力は神によって定められたものなのだから。自然の地上の姿において、王はただの人と変わりはない、しかし権力の位階において王は神の如く高い。偉大なる金口ヨハネは言った。「権力に反抗する者は、神の法に反抗する者である。【593】公が剣を持っているのは理由がある。なぜなら、公は神の僕なのだから」²⁹⁸⁾。

われらは最初に戻ろう。

6日目の金曜日²⁹⁹⁾、ヴラジミルの住民たちは、聖母〔就寝〕教会の典院フェオドゥル³⁰⁰⁾ (Феоdul) と聖歌隊長ルカに言った。「輿を準備して下さい。〔ボゴリュービィへ〕行って、主人たるアンドレイ公〔の遺体〕を引き取りましょう」。また、ミクーリツァ (Микулица) に対して〔住民は〕言った。「司祭たちを集めて下さい、そして、全員が祭服を身につけ、聖母のイコン³⁰¹⁾ を

294) 原文は идеже закон, ту и обид много で、これは新約『ローマ人への手紙』4:15の「律法のないところに違犯はない」(идеже бо несть закона, ту ни преступления.)の文言を逆説的にパラフレーズしたものだろう。「屈辱」(обида)は、ここでは、クチコー族の者がアンドレイに処刑されるような、権力者が配下の者に加える懲罰を指している。

295) 「ミクーリツァ」(Микулица; Микула)は人名ミハイル(Михаил)の卑称もしくは愛称形。ミクーラ(Микула)の名は『ウラジーミルの聖母イコンの奇蹟物語』(Сказание о чудеснах Владимирской иконы Богородицы)の「第2の奇蹟」で司祭(поп)として言及されており[БЛДР Т. 4: С. 220]、文脈から見て、ヴラジミルの聖母就寝教会の筆頭の司祭だったと考えられる。

296) ヴラジミルの聖母就寝教会に安置されていた「ウラジーミルの聖母」のイコンのこと。

297) 新約『ローマ人への手紙』13:1の句からの引用。

298) 文献的な典拠は不明だが、前注の『ローマ人への手紙』4:15の句に関する、「金口ヨハネの談話第23話」(Св. Иоанн Златоуст Беседа 23 на послание к Римлянам)に、同様の権力論があり、この部分を指していると考えられる。[Иоанн Златоуст 1994: С. 342-345]

299) これは、アンドレイ公が死亡した6月29日の土曜日から数えて「6日目」ということで、7月5日の金曜日に相当する。

300) 「フェオドゥル」(Феоdul)は、おそらく城市ヴラジミル〔クリャジマ河畔〕の「聖母就寝教会」(上注254参照)の筆頭管理者で、教会と修道院の区別が整然としていなかった当時は、「典院」(игумен)と呼ばれていたと推定される[Православная энциклопедия Т. 9: С. 69: Владимирский в честь Рождества Пресвятой Богородицы мужской монастырь]。なお、テキストにはФеоdulとФеоdурの綴りが混在しているが、Феоdulは、教会的なФеодорの現地訛りの発音が書き留められたものと考えられる。

301) 先に、ミクリツァが掲げて城内を巡回した「ウラジーミルの聖母」のイコンのこと(上注296参照)。

掲げて銀門³⁰²⁾を出て、公の到着を待ち構えて下さい」。それで、〔ミクーリツァは〕そのようにした。

ヴラジミルの聖母教会の典院フェオドゥルは、聖歌隊員、ヴラジミルの住民とともに、公〔の遺体〕を引き取るためにボゴリュービイへ言った。そして、遺体を引き取ると³⁰³⁾、名誉と大いなる嘆きをもって、〔遺体を〕ヴラジミルへと運んだ。

ほどなくして、行列がボゴリュービイから出発し始めた。人々は少しでも我慢することはできずに、皆は叫び声をあげ、涙で何も見えず、その号泣は遠くでも聞こえた。すべての人は泣き叫びながらこう言った。「われらが主人よ、あなたが〔ボゴリュービイから〕出発してこれから向かうのはキエフではありません³⁰⁴⁾、〔クリヤジマ河畔のヴラジミルの〕金門³⁰⁵⁾の上の教会へ向かって行くのです。それ〔教会〕は、ヤロスラフの大いなる館にある〔教会〕³⁰⁶⁾に倣って建設するよう、あなたが命じたものです。〔そのとき〕あなたは言いました『わしは、このような教会を建設したい。この黄金の城門も〔建設したい〕。これがわがすべての父の国の記念になるように』と」。

こうして、〔ヴラジミル〕城市の全体がかれを悼んで泣き、その遺体は恭しく、神を讃美する聖歌とともに布で包み、かれが建設した、**[594]** 奇しき称賛すべき円蓋の屋根の聖母〔就寝〕教会の中に安置された。

このように、アンドレイ公は、生前は自らの肉体を休めることはなく、その目が眠りに閉じられることもなかった³⁰⁷⁾。それは、かれが真の家、全てのキリスト教徒の憩う場所に至るまで続いた。その場所へは、天の先人たちの女帝であり、万物の女主人である御方が、あらゆる人々を、様々な道程で導かれるのである。使徒〔パウロ〕はこう教えている。「主は愛する者を鍛え、子として受け入れる者をみな、鞭打たれるからである。あなた方は、これを鍛錬として忍耐し

302) 「銀門」(Серебряная ворота) は、ヴラジミルの城市に東側の端にあった白石造りの城門。ボゴリューボヴォから来るときには、城内に入る街道の城門にあたる。

303) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事には、遺体を引き取ったのは「5 日目の木曜日」(в 5 день, в четверг)とあり、これは1174年7月4日に相当している。ただし、上の「6 日目の金曜日」(上注299)と時系列に矛盾が生じることから、『イパーチイ年代記』での編集の段階で削除したのだろう。

304) このような修辭的な言い回しは、フォークロアのジャンルの「泣き歌」(плач-причеть)に広く見られるもので、このジャンルからの影響があると考えられる [Воронин 1963: С. 90]。

305) 「金門」(Золотья ворота) は、銀門の反対側、城市の西の端にある城門で、建物は現存している。

306) ヤロスラフ賢公が建てた、キエフの黄金の門に併設した聖母告知教会のことを指している。『原初年代記』の1037年の記事にこの教会をヤロスラフが定礎したという言及がある。[ロシア原初年代記: 172 頁] [ПСРЛ т. 1: Стб. 561] 参照。

307) 旧約『箴言』6:4の「あなたの目に眠りを与えず、まぶたにまどろむことを許すな」(не даждь сна своим очам, ни въздрѣмли въкомья своим)を踏まえている。

なさい。神はあなたがたを子として取り扱っているのだから³⁰⁸⁾。神はいとも美しき太陽を一個所だけに定めて、そこから全世界を照らそうとはなさらなかった³⁰⁹⁾。太陽が〔東から〕上昇し、〔南に〕天頂を極め、〔西へと〕下降するようにと定められたのである。

同様に、神の僕たるアンドレイ公を召されたのは故なきことではなかった。神はかれ〔アンドレイ公〕に魂を救うという褒美を与え、その罪を殉教の血によって洗い流した。そして、二人の兄弟ロマンとダヴィド³¹⁰⁾とともに神キリストの御許へとやって来た。かれ〔アンドレイ公〕は、二人の兄弟とともに、言葉に尽くせぬ樂園の至福に身を移した。そのような至福については、「目が見もせず、耳が聞きもせず、人間の心に浮かびもしなかったことを、神は自身を愛する者たちに準備した」³¹¹⁾のであり、その者たちだけが至福を永遠に見ることができるのである。

偉大なる公アンドレイよ。万能の御方、あなたは、富裕にしてもっとも富裕な御方〔神〕、高きところの座す御方である神への信念を持った方です。どうか、喜んで下さい。どうか、自らの兄弟たちに³¹²⁾〔神が〕憐れみをかけられるよう、〔兄弟たちに〕敵に対する勝利、平和な国家【595】を与えるよう〔神に〕祈って下さい。その王国が名誉あり、長久にして、永遠ならんことを。アーメン³¹³⁾。

さて、ロストフ人、スーズダリ人、ペレヤスラヴリ人³¹⁴⁾、下級から上級までのすべての従

308) 新約『ヘブライ人への手紙』(12:6-7)からの引用。

309) この文の「いとも美しき太陽」(прѣкрасное солнце)は、アンドレイ公がヴラジミルへ勧請した「ウラジーミルの聖母」のイコンを指している。なお、聖母イコンを太陽と類比する表現は、1163-1164年頃の成立と推定されている『ウラジーミルの聖母イコンの奇蹟物語』(Сказание о чудесах Владимирской иконы Богородицы)の冒頭の文言と類似しており[БЛДР Т. 4: С. 218]、この作品から借用した表現と考えることができる。[Ковалев 2010: С. 3]。さらに、この表現の共通の典拠として、スラブ語版『聖クリメント(クレメンズ一世)伝』の中の奇蹟物語(Чудо о отрочати)を指摘する研究もある[Карпов 2014: С. 86-87]。

310) 「ロマン」は聖ボリス公、「ダヴィド」は聖グレーブ公の洗礼名である。

311) 新約『コリント人への手紙1』2:9からの引用。

312) 「自らの兄弟たちに」(братью свою)は集合名詞形で、広く支配一族諸公を指している。これに対して『ラヴレンチイ年代記』の対応部分では、「われらが公にして主人、自らの永遠の弟であるフセヴォロド[D177:K]に」(князя нашего и господина Всеволода, своего же приснаго брата)と、憐れみを求める相手が特定されている。

313) 「アーメン」(амин)の語は、祈禱の結びの定型句で、中世ロシアの文学文献では、教会的な色彩の作品の結びの句として広く用いられている。

通常、6683(1175)年の記事の始まり(上注243)からこの個所までを『アンドレイ敬神公殺害の物語』の独立した編集として扱われ、研究されている。

314) 「ペレヤスラヴリ」(Переяславль)は、現在の「ペレスラヴリ」(Переяславль Залесский)のことで、ロストフから60kmほど南西に下った、スーズダリとの中間地点に位置している、ヴラジミルの付属城市だった。

士たちは、〔アンドレイ〕公の死を知って、ヴラジミルに集まってきた³¹⁵⁾。そして、こう言った。「見よ、このようなことが起こってしまった。われらの公が殺されたのだ。かれの子供はもう〔ここには〕いない。年少の一人息子はノヴゴロドにおり³¹⁶⁾、かれの兄弟たちはルーシにいる³¹⁷⁾。自分たちの公たちのうち、誰のところに使者を遣って〔ロスチスラフ=ヴラジミルの地の公として〕招聘したらよいだろうか。われらはムーロムやリャザンの公たちとは隣接している。われらは、かれらの復讐³¹⁸⁾を恐れている。われらに公がいないときに、突然われらに戦争を仕掛けてくるのではないか。グレーブ³¹⁹⁾ [C542:H]のもとに使者を遣って、こう言おう。「神がわれらの公を召されました。われらは、あなたの義理の兄弟³²⁰⁾にあたる、ムスチスラフ³²¹⁾ [D1711]とヤロポルク [D1712]の二人のロスチスラフ [D171]の子を〔公として〕求めます」。

〔民会の参加者たちは〕以前の十字架接吻の〔誓い〕のことを忘れていた。かれら〔ロストフ人、ヴラジミル人など〕は十字架接吻で、ユーリイ公 [D17]に対して、その年少の子供である公たち、〔すなわち〕ミハイル [D175]とその兄弟³²²⁾について〔誓っていた〕³²³⁾。ところが、かれらは、その十字架接吻〔の誓い〕に違反して、アンドレイ [D173]を公座に就け、年少の

315) 支配公を失ったロストフ=ヴラジミルの地の従士と住民たち集まった、いわゆる「民会」(вече)のことを言っている。これまでアンドレイ公 [D173]はヴラジミルに公座を置いて、ロストフ、スーズダリ、ベレヤスラヴリを、従属的に支配していたことから、その住民たちもアンドレイを継いで自分たちの支配公となる公を決めるために集まったのである。

316) アンドレイ [D173]の上の3人の息子たちは次々と亡くなっており、このとき存命だった末弟のユーリイ・アンドレイエヴィチ [D1733]を指している。ユーリイは父アンドレイの命命によって、リュウリク [J2]と交替するかたちで、1172年春に名目的にノヴゴロド公座に就いている(上注99参照)。

317) 「兄弟たち」とは、ミハルコ [D175]とフセヴォロド [D177:K]の二人を指している。1174年6月の時点で、二人はキエフ公領内、すなわち「ルーシ」にあるトルチェスクの都市に拠点を置いていた。アンドレイ [D173]は兄弟の影響力を恐れて、ウラジーミル=スーズダリ公領にはこの二人を近づけなかったのである。

318) 「復讐」(мьсть)は『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では「奸計」(льсти)になっている。確定は難しいが、文脈から見ると、『ラヴレンチイ年代記』の方が本来の読みで、『イパーチイ年代記』の方は二次的な修正または誤記の可能性が高い。

319) グレーブ・ロスチスラヴィチ [C542:H]は、当時のリャザン公。

320) 「義理の兄弟」(шюрин)とは妻の兄弟を指し、リャザン公グレーブ [C542:H]の妻エフロシニヤは、ロスチスラフ公 [D171] (1151年没)の娘であり、その兄弟がムスチスラフ [D1711]とヤロスラフ公 [D1712]になる。下注383を参照。

321) 1173年に、ムスチスラフ [D1711]は兄弟のヤロポルク [D1712]とともに、叔父のミハルコ [D175]に追放されるかたちでチェルニゴフへ行き、当地の支配公スヴァトスラフ [C411:G]の庇護を受けていたと考えられる。(上注162を参照)

322) 「その兄弟」(брат его)は単数形で、ここではフセヴォロド [D177:K]を指している。

323) かつてヴラジミルの住民は、ユーリイ [D17]に対して、ユーリイの後継者の公としては、ミハルコ [D175]とフセヴォロド [D177:K]を受け入れることを誓っていたということ。

者たちを追放した³²⁴⁾。そして、アンドレイ [D173] の死後、この場においても、〔ユーリイ [D17] への誓いのことを〕思い出すことはなく、リャザンからの使者であるデディレツ (Дѣдилецъ) とボリス (Борис)³²⁵⁾ の言うことに耳を傾けたのだった³²⁶⁾。

そして、〔ロストフ人、ヴラジミル人などは〕聖母〔のイコンに接吻して〕確認の誓いを立て、グレーブ [C542:H] のもとに使者を遣ってこう言った。「かれら二人〔ムスチスラフ [D1711] とヤロボルク [D1712]〕は、あなたにとって義理の兄弟であり、われらにとっては公です。どうか、次のことをお互いに確認しましょう。すなわち、われらはあなたに、自分たちの使者を派遣しましたので、あなたも、かれら〔二人〕に自分の使者を同行して派遣し、かれらがわれらの公として来るように〔招聘〕して下さい」。

グレーブ [C542:H] はこれを聞くと喜んだ。なぜなら、自分に対して名誉が示され、**[596]** 自分の二人の義理の兄弟が〔ヴラジミルの公として〕望まれたからである。かれ〔グレーブ〕は十字架と聖母〔の聖像〕に接吻して確認すると、二人〔ムスチスラフ [D1711] とヤロボルク [D1712]〕のところへ使者を遣ってこう言った。「そなたたち二人の父親〔ロスチスラフ [D171]〕は、われらのもとにいたとき³²⁷⁾、善きお方だった³²⁸⁾。どうかわれらのもとに来たりて、公として支配せよ。われらは他の者は望まない」。

324) 「年少の者たち」(меньшая)とは、ミハルコ [D175] とフセヴォロド [D177:K] の二人の公のこと。本年代記の1162年の項に、アンドレイ [D173] が、ムスチスラフ [D17A]、ヴァシリコ [D174] 等の弟たちををコンスタンティノポリスへ追放したとあり、末の二人の兄弟ミハルコとフセヴォロドも同じく追放されていた。この事件をさしている ([イパーチイ年代記(6):237頁,注284,286]を参照)。

325) 「デディレツとボリス」(Дѣдилецъ и Борис)はリャザン公グレーブ [C542:H] に仕える側近貴族。「ボリス」はこれまでアンドレイ敬神公 [D173] に仕える上級貴族(軍司令官)として登場していたが(上注37,87,177)、アンドレイの死後にリャザンに勤務変えをしたと考えられる。

なお、『ラヴレンチイ年代記』6685(1177)年の記事の中で、コロクシャ川の合戦(1177年3月14日にリャザン軍がフセヴォロド [D177:K] 率いるヴラジミル軍に大敗を喫した)の描写で、捕虜となって「グレーブ公の側近(думцы)たち」として「ボリス・ジチスラヴィチ」(Борис Жидиславич)と「デディレツ」(Дѣдилецъ)の名が挙げられている。[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб.384]

326) この段落の叙述には、ユーリイ [D17] の死(1157年)後には、年少の息子ミハルコ [D175] とフセヴォロド [D177:K] がロストフを中心とした北東の地方の公になるべきだと考え、その後のアンドレイ [D173] のヴラジミルにおける支配と配下の従士たちに反発してきた、ヴラジミルの住民の立場が反映されている。かれらの考えでは、ユーリイ [D17] の長男ロスチスラフ [D171] の息子たち(ムスチスラフ [D1711] とヤロボルク [D1712])は、自分たちの地の公位を継ぐ権利を持っていなかった。

327) ロスチスラフ [D171] は、1142年にノヴゴロドから追放されてスーズダリへ移り([イパーチイ年代記(2):325頁,注226]、1148年秋には、父ユーリイ [D17] と諍いを起こしてスーズダリを去っている[イパーチイ年代記(3):367頁,注195]。「われらのもと」とは、北東ルーシ全般を指しており、そこにいたときとは、1142年~1148年の期間を指している。

328) ロスチスラフ [D171] は、1146年にはアンドレイ [D173] とともに、グレーブの父ロスチスラフ・ヤロスラヴィチ [C54] に対してリャザン討伐遠征を行っており([イパーチイ年代記(3):337頁,注48]、かれが「善き御方だった」(добрь былъ)というのは事実というより、政治的な言説だろう。

〔他方、ロストフ=ヴラジミルの〕使者たちも〔ムスチスラフ [D1711] とヤロボルク [D1712] のところへ〕 やって来て、〔ロストフ=ヴラジミルの〕 従士たちの言葉を伝えた。

かれら二人〔ムスチスラフ [D1711] とヤロボルク [D1712]〕 は、チェルニゴフのスヴャトスラフ [C411:G] のもとにいたが³²⁹⁾、そこには、かれらとともに、ミハルコ・ユーリエヴィチ³³⁰⁾ [D175] とフセヴォロド・ユーリエヴィチ³³¹⁾ [D177:K] がいた。そして、ムスチスラフ [D1711] とヤロボルク [D1712] は、〔ロストフ=ヴラジミルの使者に対して〕 こう言った。「どうか、神が〔あなたがたの〕 従士たちを助け給まうように。かれらが、わが父の親愛のことを忘れないように」。

それから、かれら二人は、自ら〔ミハルコ [D175] 及びフセヴォロド [D177:K] と〕 評議してこう言った。「悪しきことになるか、善きことになるか、われらはみな一蓮托生³³²⁾ である。われらは四人、すなわち二人のユーリイ [D17] の息子たち〔ミハルコ [D175] とフセヴォロド [D177:K]〕 と二人のロスチスラフ [D171] の息子たち〔ムスチスラフ [D1711] とヤロボルク [D1712]〕 は、〔ともにロストフ=ヴラジミルの地へ〕 行こうではないか」。

そして、ミハルコ・ユーリエヴィチ [D175] とヤロボルク・ロスチスラヴィチ [D1712] の二人がまず先に出発した。ミハルコが年長者であることが互いに合意された³³³⁾。〔そのことについて〕 チェルニゴフの主教の立ち会いのもと、十字架接吻〔によって誓いがなされた〕。

329) ムスチスラフ [D1711] がチェルニゴフ公スヴャトスラフ [C411:G] のもとに身を寄せていた経緯については、上注 161 を参照。

330) ミハルコ [D175] は、それまで拠点城市にしていたトルチェスクから、〈ムスチスラフの息子たち〉の手で追い出され、弟のフセヴォロド [D177:K] とともに、チェルニゴフ公スヴャトスラフ [C411:G] のもとに庇護を求めて身を寄せていたことがわかる。

331) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事には、ミハルコ [D175] の名だけが記されており、フセヴォロド [D177:K] の名はない。ただし、以下の文脈から見ると、フセヴォロドがチェルニゴフにいたことは確実である。

332) 「われらはみな一蓮托生」(всімъ намъ) は、всім нам за один быти を省略したもので、行動を共にするときの誓約の文言から取られたものだろう。

333) ミハルコ [D175] は 1150 年前後の生まれで、フセヴォロド [D177:K] は 1154 年の生まれであり、この 2 人はロスチスラフの子たちにとっては叔父である。しかし、ロスチスラフ [D171] は 1151 年に死去しているので、ムスチスラフ [D1711] とヤロボルク [D1712] は、それ以前の生まれということになる。したがって、この四人は親族関係から言えばユーリイ [D17] の子たちの方が上になるが、年齢からするとロスチスラフ [D171] の子たちの方が上という関係になっている。そのため、権力関係における「年長者」(старшинство) を定めておく必要があったのだろう。

二人〔ミハルコ [D175] とヤロボルク [D1712]〕はモスクワ³³⁴⁾に到着した。ロストフ人はこのことを聞くと、大いに憤慨して³³⁵⁾、ヤロボルク [D1712] に対して〔使者を遣って〕こう言った。「あなたは、ここ〔ロストフ〕に来られよ」。また、ミハルコ [D175] に対しては「しばらくの間モスクワで待たれよ」と〔使者を遣って〕言った。

ヤロボルク [D1712] は、兄弟〔ミハルコ [D175]〕には内緒で、ペレヤスラヴリ³³⁶⁾ (Переяславль) の従士たちのもとへと出発した。

ミハルコ [D175] は、兄弟〔ヤロボルク [D1712]〕が〔モスクワから〕出発したのを見て、自らは〔クリヤジマ河畔の〕ヴラジミルへ行き、この城市に立て籠もった。従士たちは城内にはいなかった。ヤロボルク [D1712] を迎えるために出ていたのである。そして、〔従士たちは、ペレヤスラヴリで〕ヤロボルク公 [D1712] に会うと、かれに〔十字架に〕接吻をして、その十字架接吻によって〔忠誠を〕確認した。そして、〔従士たちは〕かれと一緒に、ミハルコ [D175] を討つべくヴラジミルへ向かって進軍した。

ミハルコ [D175] は、城市〔ヴラジミル〕に立て籠もった。**【597】**〔ヴラジミルの〕城内には〔従士の〕ヴラジミル人はいなかった。1500人ほどの〔従士のヴラジミル人〕が、ロストフ人の命令に従って、二人の公〔ムスチスラフ [D1711] とヤロボルク [D1712]〕を出迎えに行っていたのである。そして、その者たちは〔二人の公に〕十字架接吻して〔忠誠を誓っていた〕³³⁷⁾。

こうして、かれら〔従士たち〕はロストフの地³³⁸⁾の全軍とともに、ミハルコ [D175] を討伐すべくヴラジミルへと進軍し、多くの悪行をなした。かれらはムーロム人とリヤザン人も引き連れていた³³⁹⁾。こうして、〔ヴラジミルの〕城市の周辺の地を焼き払った。このとき、ヴラジ

334) モスクワはヴォルガ水系のオカ川の左岸支流に位置している。チェルニゴフからデスナ川の中流域で連水陸路を伝ってオカ川水系に入り、コロムナ経由でモスクワ川に入ってモスクワに到達したと思われる。直線距離にして600kmと、かなり長い距離を移動したことになる。

335) ヴラジミルにおける従士たちの評議で(上注315)、ロスチスラフ [D171] の息子たちを公として招聘することを決めたにもかかわらず、その意向に反して、叔父のミハルコ [D175] が年長権を主張して公位を狙っていることに対して、ロストフ人は憤慨したのである。

336) ペレヤスラヴリ(現在のペレスラヴリ=ザレスキイ)(上注314)では、ヤロボルク [D1712] を招聘したロストフ=ヴラジミルの従士たちが待機して、かれの到来を待っていたのである。

337) この段落の記述は、前の段落と内容がほぼダブっている。明らかに、編集過程で複数資料を用いたことによっている。ここの「ヴラジミル人」(воладимѣрцы)は、前の段落の「従士たち」(дружина)に相当し、ヤロボルク [D1712] 側について、かれを迎えるためにペレヤスラヴリ(ペレスラヴリ)に向いた、従士のヴラジミル人を指している。

338) 「ロストフの地」(Ростовская земля)の言い回しは、この後も数回用いられているが、ヴラジミルとロストフ=スズダリとの間の反目の文脈の中で、ヴラジミル人から見て自分たちとは別の、敵対する勢力が支配する土地という意味合いを持っている。

339) リヤザン公グレーブ [C542:H] が、義理の兄弟ヤロボルク [D1712] を支援するために派遣したのである。

ミル人³⁴⁰⁾は城の中から戦った。聖なる聖母³⁴¹⁾がかれらを助けた。かれら〔ロストフの地の遠征軍〕は7週間のあいだ³⁴²⁾〔ヴラジミルの〕城を包囲した。

聖なる聖母はみずからの城市を救ったのだった³⁴³⁾。なぜなら、〔城内の〕ヴラジミル人は飢えに耐えられず、ミハルコ [D175] に言った。「和を結んで下さい。どうかご自身のことを考えて下さい」。すると、かれ〔ミハルコ〕はかれら〔ヴラジミル人〕に答えて言った。「そなたたちの言い分が正しい。そなたたちは、わしのせいで身を滅ぼすべきではない」。そして、〔ミハルコは〕ルーシへと出発した³⁴⁴⁾。ヴラジミル人は大いに嘆きながら、かれ〔ミハルコ〕を送り出した³⁴⁵⁾。

その後、ヴラジミル人は、二人のロスチスラヴィチ〔ムスチスラフ [D1711] とヤロポルク [D1712]〕に十字架接吻をして約定を結び、城市〔ヴラジミル〕にいかなる悪行も行わないことを約束させた。そして、〔ヴラジミル人は〕十字架を携えて城外へと出ると、ムスチスラフ [D1711] とヤロポルク [D1712] を迎えた。〔二人は〕城内に入り、ヴラジミル人を安心させた。そして、二人はロストフの地を分け合って、〔それぞれの地で〕公座に就いた³⁴⁶⁾。ヴラジミル人は喜んで、ヤロポルク公 [D1712] をヴラジミルの聖なる聖母の公座に就け、あらゆる **[598]** 秩序を回復した。

ヴラジミル人が二人のロスチスラフヴィチ〔ムスチスラフ [D1711] とヤロポルク [D1712]〕と戦ったのは、かれら〔二人〕に敵対していたわけではなく、ロストフ人、スーズダリ人、ムーロム人たちに服従するのを望まなかったからであった。なぜなら、かれら〔ロストフ人、スーズダリ人、ムーロム人〕はこう言っていたからである。「ヴラジミルを焼き払ってしまおう。あるいは、別の代官をここに据えよう。かれら〔ヴラジミル人〕は、われらの石伐りの従

340) このヴラジミル人は、ミハルコ [D175] の側について、城市防衛戦を戦ったヴラジミルの住民たちを指している。

341) ヴラジミルの聖母就寝首座教会に安置されている「ウラジーミルの聖母」のイコンを指している。

342) 1174 年のおよそ 8 月～9 月の期間に相当している。

343) この「城市を救った」とは、ヴラジミル城市が焼き払われたり、住民が捕虜（奴隷）として捕らえられることはなかったことを指している。

344) チェルニゴフへ戻ったということ。

345) このヴラジミル人の「大いなる嘆き」（плач великий）は、ミハルコ [D175] を、ユーリイ [D17] への誓いにもとづくヴラジミルの正統な公位継承者と見なす、住民、在地貴族の立場を反映している（上注 326 参照）。

346) この事実について『ノヴゴロド第一年代記』6682(1174)年の記事では、「この地に大きな騒乱（мятежь）と災厄（беда）があった。多くの者が斃れ、その数は知れないほどだった。その後、ムスチスラフ・ロスチスラヴィチ [D1711] が、その兄弟ヤロポルク [D1712] とともに〔ロストフ地方の〕公座に据えられた」[НПЛ: С. 34, 223] となっている。

僕³⁴⁷⁾なのだ」。

その後、ロストフ人はムスチスラフ [D1711] を迎え入れ、かれを、自分たちの〔城市〕ロストフの、祖父と父の公座に大いなる喜びをもって据えた。

この年の冬、ヴラジミルの公ヤロポルク・ロスチスラヴィチ [D1712] は妻を娶った。かれは、スモレンスクに使者を派遣して、ヴィテブスクの公フセスラフ³⁴⁸⁾ [L221] の娘の公女を妻として迎えた。かの女との結婚式はヴラジミルの聖母〔就寝教会〕で行われた。1月3日、肉断ちの週の火曜日のことだった³⁴⁹⁾。

この年³⁵⁰⁾、スモレンスク人はヤロポルク・ロマノヴィチ [J11] を自分たちの〔城市〕から追放した。そして、ムスチスラフ・ロスチスラヴィチ [J5] を公としてスモレンスクへ迎え入れた³⁵¹⁾。

この年、二人のロスチスラヴィチ〔ムスチスラフ [D1711] とヤロポルク [D1712]〕は、ロス

347) 「われらの石伐りの従僕」(наши холопъ каменьци)の「従僕」(холоп)とは、領主に仕え、屋敷などで労働する隷属民のことで、石材を伐り出してロストフ地方の各地の聖堂などを建設する際にヴラジミル人が動員されていたことを指している。

348) フセスラフ・ヴァシリコヴィチ [L221] は、元ポロツクの支配公。本年代記 6675(1167)年の項に、ポロツク公だったフセスラフは、ヴォロダリ [L53] の襲撃を受けてヴィテブスクへ逃れたと記されており〔イパーチイ年代記(6):251頁,注369〕、この当時、ダヴィド [J3] がヴィテブスク公であったことから、ダヴィドを初めとするスモレンスク公一族に庇護下にあったと考えられる。「スモレンスクに使者を派遣し」たのも、そのような関係ゆえだった。この結婚によって、ヤロポルク [D1712] は、スモレンスク公一族との連携を求めたのではないか。

349) この結婚の日付については、すべての写本及び『ラヴレンチイ年代記』並行記事が「1月3日」としているが、この日は金曜日であり、さらに肉断ちの週(мясопустная неделя)にも当たっていない。補正の可能性としては、「1月」(генваря)を「2月」(февраля)の誤りとするもので、その場合、1176年2月3日が「肉断ちの週の火曜日」に相当する。しかし、ヤロポルク [D1712] が「ヴラジミルの公」(князь Володимѣрьскій)であったのは1175年6月までなので(下注386)矛盾が生じる。ウクライナ語訳は、記事の時系列からみて1175年が妥当として、この年の「肉断ちの週の火曜日」である1175年2月11日が結婚の日付であるとの説をとっている。

350) 1175年のことと推定される。

351) ヤロポルク [J11] は、スモレンスク公だった父ロマン [J1] のキエフ公就位にともなって、1171年7月にキエフ公を継いでいた(上注114参照)。父のロマン [J1] も1172年秋～冬にキエフの公座を去ってスモレンスクに移ったが、1175年に再度キエフ公になっている(下注368)。このスモレンスク市民によるヤロポルク [J11] の追放と、その叔父ムスチスラフ [J5] の公座就位は、ヤロポルクが父親の後ろ盾を失ったことと関連しているだろう。そのため、時系列的には、この記事はロマンのキエフ公就位の記事のあとに来るべきだろう。

トフの地の公としての支配を行い、ルーシの下級従士³⁵²⁾たちを代官として赴任させた。かれらは、その土地の人々に過酷な罰金や人命金³⁵³⁾を課していた。二人の公自身は、まだ若く、貴族たちの言うことに聴き従っていた。貴族たちは、二人の公に、多くの財産を獲得するよう唆したのである。そのため、二人は〔公座に就いた〕最初の日に、ヴラジミルの聖母〔就寝〕教会の【599】金銀を掠奪し、教会の府庫の鍵を取り上げた³⁵⁴⁾。〔聖母就寝〕教会が所有する城市や〔聖母就寝教会に納められていた〕貢税も〔取り上げた〕。それらは、福者アンドレイ公が、かつて〔聖母〕教会に与えたものだった。

ヴラジミル人はこう言い始めた。「われらは、自由〔に公を選ぶ民〕であり、〔二人の〕公を受け入れて、すべてについて十字架接吻し〔て取り決めた〕。ところが、あの二人は、ここが自分の領地ではないかのように振る舞っている。われらの公座に就いていないように振る舞っている。二人は領地ばかりでなく、教会をも掠奪している。兄弟たちよ、〔対策を〕考えようではないか」。こうして、〔ヴラジミル人は〕ロストフ人、スーズダリ人のもとに使者を派遣して、自分たちが受けたすべての損害について、かれらに伝えた。かれら〔ロストフ人とスーズダリ人〕は、言葉においては同意したが、行いにおいては動こうとしなかった。他方、貴族たちは二人の公を強く支持していた。

この年、オレーグ・スヴァトスラヴィチ [C431] は戦争を始めた³⁵⁵⁾。かれは、自分の義理の兄弟たち³⁵⁶⁾のもとに使者を派遣すると、かれらを、自分の兄弟スヴァトスラフ [C411:G] を討

352) 「ルーシの下級従士」(русские дѣцьки) とは、ムスチスラフ [D1711] とヤロボルク [D1712] が、「ルーシの地」であるチェルニゴフ地方から引き連れてきた配下の従士たちを指している。ロストフ地方にとってかれらは外来者であり、地方の様々な城市に、二人の公の代官として赴任したものの、在地の貴族や住民たちと軋轢を起こしたのである。

353) 「罰金や人命金」(продажи и вири) は、裁判の判決を下した公に対して支払われる手数料(罰金)で、「ルーシ法典」によれば「罰金」(продажа)は盗難や傷害などの罪の場合、「人命金」(вир)は殺人などの罪の場合に徴収され、高額なものだった。これを徴収する者を「人命金徴収者」(вирник)と呼び、公が派遣した代官(посадник)などの役人が担当した。

354) このとき、ヴラジミルの聖母就寝教会から「ウラジミルの聖母」のイコンが掠奪されて、リャザン公グレーブ [C542:H] の手でリャザンに運ばれている。

355) オレーグ [C431] は当時ノヴゴロド・セヴェルスキイ公で、6682(1174)年の記事には、オレーグとチェルニゴフ公スヴァトスラフ [C411:G] の不和について述べられている(上注 231)。この戦争は、オレーグにとっては、父スヴァトスラフ [C43] の領地だったチェルニゴフ地方を奪還するための戦いだった。

356) オレーグ [C431] の「義理の兄弟たちへ」(к шюриномъ) とは、次注の「ロスチスラフ一族」(Ростиславичи)を指している。オレーグは 1165 年にロスチスラフ [D116:J] の娘アガーフィアと結婚している(『イパーチイ年代記』(6): 247 頁, 注 344)。そのため、「ロスチスラフ一族」はオレーグにとって義理の兄弟に当たる。このチェルニゴフ攻撃のための同盟は、姻戚関係によるところが大きいだろう。

伐するためのチェルニゴフへの遠征に引き入れた。ロスチスラフ一族³⁵⁷⁾とヤロスラフ³⁵⁸⁾ [I2] は「遠征に」やって来て、ルタヴァ³⁵⁹⁾ (Лугава)とモロヴェイスク³⁶⁰⁾ (Моровиеск)を焼き払い、[スヴァトスラフ [C411:G]と] 十字架接吻〔の和議を結ぶと〕、帰郷して行った。

オレーグ[C431]は、二人の兄弟³⁶¹⁾とともにスタロドゥーブ³⁶²⁾ (Стародуб)に向けて進軍した。しかし、この城市を攻略することはできず、スタロドゥーブの周辺のすべての村落の家畜を奪い取り、ノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕まで追い立てて行った。

スヴァトスラフ [C411:G]は兄弟のヤロスラフ³⁶³⁾ [C412]とともに、オレーグ [C431]を討つべくノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕へと進軍した³⁶⁴⁾。そして、[ノヴゴロド・セヴェルスキイの]城市に突撃を仕掛けた。オレーグ [C431]はこれに対抗すべく城外に出ると、自分の部隊を武装させて出撃した。しかし、矢を射ただけで、逃げてしまった。公〔オレーグ〕自身は城内に逃げ込んだが、かれの従士たちは捕らえられた。他の者たちは斬り殺され、外廊の防柵は焼き払われた。**【600】**その翌日、和議のための軍使が交わされ、和が結ばれ、〔遠征軍は〕帰郷した。

357) この「ロスチスラフ一族」(Ростиславичи)の語は、これまでの用法と同じく、リューリク [J2]、ダヴィド [J3]、ムスチスラフ [J5]を指している。ただし、この三人がともに遠征に参加したかどうかは不明。

358) キエフ公ヤロスラフ [I2]にとって、チェルニゴフのスヴァトスラフ [C411:G]はこれまでも対立してきた敵であった。そのため、「敵の敵」であるオレーグ [C431]のスヴァトスラフ討伐の呼びかけに応えたのだらう。

359) 「ルタヴァ」(Лугава)は、オステル川河口のゴロデツの対岸にあったチェルニゴフ領内の城市。チェルニゴフからは約70km離れている。

360) 「モロヴェイスク」(Моровиеск, Моровийск, Моривейск)は、デスナ川右岸に位置するチェルニゴフ領内の城市。

361) 「二人の兄弟とともに」(с братома)は、おそらく、イーゴリ [C432]とフセヴォロド [C433]を指すのだらう。

362) スタロドゥーブの領地争いについては、1167年の項で、オレーグ [C431]がこの城市の公ヤロスラフ [C412]に対して攻撃を仕掛けたことが記されている [イパーチイ年代記 (6) : 250頁, 注359]。このときもヤロスラフ [C412]がスタロドゥーブの公座に就いていたのだらう。この遠征も、直前のルタヴァ=モロヴェイスク襲撃と同様に、スヴァトスラフ [C411:G]の領地奪還を狙った掠奪遠征であり、同じ時期に行われたものである。

363) 前注のように、ヤロスラフ [C412]はスタロドゥーブ公であった可能性が高い。

364) 「スタロドゥーブ」(Стародуб)はノヴゴロド・セヴェルスキイからほど近く、北北西約75kmの地点にあるが、1156年の時点でスヴァトスラフ [C411:G]が滞在しており、1167年の記事でもオレーグ [C431]とスヴァトスラフ [C411:G]の間で係争地となっていたのが確認できる。[イパーチイ年代記 (6) : 250頁, 注359]

この年、イーゴリ [C432] に息子が生まれた。オレーグ [C4322] と名付け、洗礼名はパーヴェルだった³⁶⁵⁾。

その時、スモレンスクからロマン [J1] が、自分の兄弟たち³⁶⁶⁾ のところへ支援するためにやって来ていた。〔キエフ公〕ヤロスラフ [I2] は〔キエフ人たちに〕言った。「そなたたちは、わが兄弟のロマン [J1] を連れてきた、だから、かれにキエフを与えよ」。そして、かれ自身〔ヤロスラフ [I2]〕はキエフを去ってルチェスク³⁶⁷⁾ へと向かった。かれら〔キエフ人〕はかれ〔ヤロスラフ [I2]〕を追って使者を派遣し、再びキエフに呼び戻そうとした。かれ〔ヤロスラフ [I2]〕はかれらの〔要請を〕聞き入れず、ルチェスクへ向かった。こうして、ロマン [J1] が、キエフの自分の祖父、自分の父の公座に座することになった³⁶⁸⁾。

365) オレーグ [C4322] は、プチャーヴリ公イーゴリ [C432] の二番目の息子にあたる。洗礼名のパーヴェルは、兄にあたる第一子のウラジーミル [C4321] の洗礼名がピョートルであることから（上注 54 参照）、聖使徒の対として命名された可能性もある。〔Литвина, Успенский 2006: С. 589〕

366) この「兄弟たち」(братья своя) は、これまで頻用されていた、「ロスチスラフ一族」(Ростиславичи)、すなわちリューリク [J2]、ダヴィド [J3]、ムスチスラフ [J5] を指すと考えられる。かれらは、これまでの支えてきたキエフ公ヤロスラフ [I2] を見限って、自らなんらかのキエフ公位奪取の行動を起こしたのだろう。

367) 「ルチェスク」(Луческ) (ルツク Луцк) は、ドニエプル右岸支流プリピャチ川のさらに右岸支流にあたるストイリ川左岸に位置する城市。1155 年からヤロスラフ [I2] が公支配をしていた、かれの拠点城市であった。〔イパーチイ年代記 (6) : 254 頁, 注 383〕

368) ロマン [J1] のキエフ公座就位については、『ノヴゴロド第一年代記』 6682(1174) 年の最後の記事として、「キエフでは、ムスチスラフ [D11] の孫であるロマン・ロスチスラヴィチ [J1] が公座に就いた」という短い記事がある。記事の位置から見て、1175 年の 1 月～3 月頃の出来事であろう。

6684 [1176] 年

ミハルコ [D175] とその弟フセヴォロド [D177:K] がチェルニゴフを出陣した³⁶⁹⁾。スヴァトスラフ [C411:G] は、自分の息子ウラジーミル³⁷⁰⁾ [G2] に部隊を率いさせて、〔かれらの遠征に〕参加させた。これは、5月21日のコンスタンティノス帝と皇后ヘレナの祭日³⁷¹⁾ のことだった。

ミハルコ [D175] は出陣するとすぐに、スヴィナ川³⁷²⁾ (Свина) で大病に罹り、輿に乗せられて、息絶え絶えの状態で運ばれて行く有り様だった。一行はかれとともに、なんとかクチコヴォ³⁷³⁾ (Кучково)、すなわちモスクワ (Москва) まで行軍した。そして、この場所でヴラジミル人がユーリイ・アンドレエヴィチ³⁷⁴⁾ [D1733] ととともに、かれ〔ミハルコ [D175]〕を出迎えた。ヴラジミル人だけがかれに対して好意的だったのである³⁷⁵⁾。

かれ〔ミハルコ [D175]〕が〔ユーリイとの〕宴席に着いていたとき、かれに報告がもたらされた。かれの甥ヤロボルク [D1712] が、かれを討伐すべく進軍していると言うのである。そこで、かれ〔ミハルコ〕はモスクワを出て、ヴラジミルへ向けて出発した。ヤロボルク [D1712]

369) この遠征は、ヴラジミル人による招聘が切っ掛けとなって、ヴラジミル＝スーズダリ地方を支配していたムスチスラフ [D1711] とヤロボルク [D1712] の追放を狙って行われたものである。その経緯について、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では次のように記されている。「ヴラジミル人は団結して、チェルニゴフのミハルコ [D175] とその弟フセヴォロド [D177:K] へ使者を遣って、こう言った『あなたこそが兄弟たちの中で年長です。ヴラジミルへ来たれ。あなたのことで、ロストフ人、スーズダリ人がわれらに敵対することがあれば、われらとかれらの間のことは神と聖母のみが知る〔戦争を行う〕でしょう』。見よ、聖なる聖母の新しい奇蹟が起こったのである」[ПСРЛ 1997: Стб. 375]。

なお、ミハルコ [D175] とフセヴォロド [D177:K] がチェルニゴフにいたことについては、上注 330 を参照。

370) ウラジーミル・スヴァトスラヴィチ [G2] についてはここが初出。1178/1179 年にかれの結婚の記事（下注 466）があることから、当時は 10 代の半ばだったと推定される。

371) ウクライナ語訳の注によれば、1175 年 5 月 21 日に相当する。

372) 「スヴィナ川」(Свина) は、チェルニゴフとスノフ (Снов) 川の間を流れ、チェルニゴフからは 12km ほどしか離れていない[イバーチイ年代記(5): 250 頁, 注 141]。つまり、ミハルコ [D175] は、チェルニゴフを出陣してすぐに病気になったということ。

373) 当時のモスクワは、ヴラジミルの大貴族クチコ一族の所領だったことからこう呼ばれていた（上注 272 参照）。

374) 本年代記には記述がないが、『ノヴゴロド第一年代記』6683(1175)年の最初の記事には「〔ノヴゴロド人は〕ユーリイ・アンドレエヴィチ [D1733] をノヴゴロドから追放した。他方、ムスチスラフ [D1711] は自分の息子をノヴゴロド〔の公座に〕据えた」とあり、この時点でユーリイ [D1733] は放浪の身にあったことがわかる。ユーリイにとっては、ミハルコ [D175] の陣営につくことは、自分を追ったロストフ公ムスチスラフ [D1711] を打ち、ノヴゴロドの公座を回復するための戦いだった。

375) この言い回しは、ロスト人、スーズダリ人がミハルコ [D175] を敵視していたことを含意している。上注 369 を参照。また、ヴラジミル人が抱いていた、ミハルコ [D175] に対する好意的な態度については上注 345, 369 を参照。

はこのことを聞くと、進路を迂回して〔モスクワに向かって〕進んだ³⁷⁶⁾。モスクワ人は、ヤロポルク [D1712] が自分たちを討ちに来て来るとの報を聞くと、自分たちの家を守るために帰郷した。

〔ミハルコ [D175] は〕ラクシャ川³⁷⁷⁾ (Лакша) を渡り、ベレホヴォの平原³⁷⁸⁾ (Белехово поле) に至った。ウラジーミル・スヴァトスラヴィチ [G2] が先行して行軍していた。〔ミハルコ〕は部隊を丘の陰から派遣した。全員が甲冑を身につけていた。それは全身に氷をまもっているように〔固かった〕。こうして、かれら〔敵軍〕に不意討ちを仕掛けるために、軍旗を掲げて突撃の合図をした。ミハルコ [D175] は、兄弟のフセヴォロド [D177:K] とともに武装し、自分の部隊をととのえ、かれら〔敵軍〕に向かって行った。

ムスチスラフ [D1711] はスーズダリ人を率いていた³⁷⁹⁾。フセヴォロド [D177:K] は、ヴラジミル人とウラジーミル [G2] とともに、部隊をととのえて、かれらに対抗して軍を進めてきた。ムスチスラフ [D1711] の兵たちは、敵を壊滅せんとばかりの喊声を上げて進撃し、双方の部隊の間で矢が射交わされた。

その時、ミハルコ [D175] の病状はいっそう悪化しており、かれは輿で運ばれていた。敵方

376) この事態について、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事は次のような別様の記述をしている。「神意によって両者〔ミハルコ [D175] 軍とヤロポルク [D1712] 軍〕が森の中ですれ違ってしまった。ミハルコは弟のフセヴォロドとともにヴラジミルへ向かって進み、他方ヤロポルクは他の道を通ってモスクワへと進軍した」。

377) 「ラクシャ川」(Лакша) はフレープニコフ写本では「クラシカ川」(Кулашка) と表記されており、現在のコロクシャ川(Колокша)のことで、クリヤジマ川の左岸支流。その河口はヴラジミルの城市から南西に約 20km の位置にある。ここは、1177 年 3 月にフセヴォロド [D177:K] がリャザン公グレーブ [C542:H] に対して大勝利を取めた(コロクシャ川の合戦)場所でもある。下注 415 参照。

378) 「ベレホヴォの平原」(Белехово поле) はヴラジミルの西側に広がる平地のことで、ミハルコ [D175] の軍は、城市ヴラジミルまで 5km ほどのところまで接近し、城市への攻撃を準備している。『ラヴレンチイ年代記』6684(1176)年の並行記事には「ミハルコ [D175] は兄弟のフセヴォロド [D177:K] とともにヴラジミルから 5 露里のところまで達したところで、ムスチスラフ [D1711] が自分の従士とともに不意にかれ〔ミハルコ〕を迎え撃った」[ПСРЛ 1997: Стб. 376] と記されている。

379) このロストフ=スーズダリ公だったムスチスラフ [D1711] がスーズダリ人を率いて行ったヴラジミルへの進軍については、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事が次のように詳しく語っている。「ヤロポルク [D1712] からムスチスラフ [D1711] へ次の報告がもたらされた。『ミハルコ [D175] は病気で、輿で運ばれています。一緒にいる従士も少ないです。兄弟よ、出陣して、速やかにかれ〔ミハルコ〕を向かい撃って下さい。かれ〔ミハルコ〕をヴラジミルへ入城させないために」。この報告は土曜日にかれ〔ムスチスラフ〕のもとにもたらされ、かれは従士たちにこれを示した。翌日、かれ〔ムスチスラフ〕は兎のごとく素早くスーズダリから出陣し、従士たちはかれのあとを追った」[ПСРЛ 1997: Стб. 376]。なお、この「土曜日」は 1175 年 6 月 14 日に当たる。

の数は多かったが、正義は聖なる救世主³⁸⁰⁾とミハルコ [D175] の側にあった。ムスチスラフ [D1711] の兵たちは〔敵のところ〕に達しないうちに、軍旗を棄てて逃げ始めた。神と聖なる聖母の怒りに追い払われたのである。このようにして、神はミハルコ [D175] とその弟のフセヴォロド [D177:K] を助け給うた。かれらは、神の助けを得て、また万民の前で自らを正しさを示して自分の甥〔ムスチスラフ [D1711]〕に勝利したのだった。これは、6月15日、預言者聖アモスの記念日で日曜日のことだった³⁸¹⁾。

かれら〔ミハルコたち〕は敵を追いかけた。〔ムスチスラフ [D1711]〕は【602】ノヴゴロドまで逃げて行った³⁸²⁾。ヤロポルク [D1712] は自分のリャザンの義理の兄弟³⁸³⁾のもとへと逃げて行った³⁸⁴⁾。

ミハルコ [D175] とフセヴォロド [D177:K] は、ウラジーミル・スヴァトスラヴィチ [G2] に〔報償の〕贈物を与えて、かれを帰郷させた³⁸⁵⁾。その後、ミハルコ [D175] とフセヴォロド [D177:K] の二人は、大いなる栄光と栄誉をもってヴラジミルへ向けて出発した。かれらの前には、足枷を掛けた捕虜を引き連れていた。

神は諸公に対して、十字架〔接吻の誓い〕に違反しないこと、年長の兄弟を尊ぶこと、兄弟の間に善をもたらさない悪しき人間たちに聴き従わないよう、教え諭している。

それから、ヴラジミル人たちは、自分たちの二人の公〔ミハルコ [D175] とフセヴォロド [D177:K]〕を見ると、十字架を手に城外へ出て、大いなる喜びと栄誉をもって出迎えた。ミハルコ [D175] は入城すると、聖なる聖母〔教会〕へと向かった。そして、自分の祖父と自分の

380) 「聖なる救世主」(святыи Спась)はチェルニゴフの主教座教会の名称であり、総じて、チェルニゴフの公の「守護聖人」の役割を果たしていた。記事のこの部分は、チェルニゴフ資料が用いられていることがわかる。

381) 1175年6月15日のこと。この日は確かに日曜日に相当している。

382) 本年代記には「ノヴゴロドまで逃げた」のが誰であるか示されていないが、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では「ムスチスラフ [D1711] がノヴゴロドへ逃げた」[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 382]と明示されている。

383) 「義理の兄弟」の原語は зять で、男性から見て親族の女性(姉妹・娘)の夫をあらわす言葉。ここでは、ヤロポルク [D1712] の姉妹エフロシニヤの夫でリャザン公のグレーブ [C542:H] を指している。(上注320を参照)

384) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、二人の逃亡についての記述の後に、「ロスチスラフ [D171] の妻で二人の母親は、かの女の嫁たち〔二人の公妃たち〕とともに、ヴラジミル人が引き取った」[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 382]と書かれている。これは、二人の公の再襲来にそなえた人質にするためだろう。

385) チェルニゴフへ帰郷させたと考えられる。

父の公座に就いた。その日の日曜日³⁸⁶⁾、ヴラジミルの城内は大いなる喜びに満ちていた³⁸⁷⁾。

その後、〔チェルニゴフ公〕スヴァトスラフ [C411:G] は、ミハルコ [D175] とフセヴォロド [D177:K] の妻たちを〔ヴラジミルへ向けて〕送り出した。かの女たちには、自分の息子オレーグ³⁸⁸⁾ [G5] を付き添いとして付け、モスクワまでかの女たちを送らせた。オレーグ [G5] は送り届けると、自分の領地であるロパスナ³⁸⁹⁾ (Лопасна) へと帰還した。そして、そこからオレーグ [G5] は兵を派遣して、スヴェリレスク³⁹⁰⁾ (Свѣрилеск) を占領した。そこは、チェルニゴフの地に属する領地だったからである。

グレーブ [C542:H] はこれを見て、自分の甥である〈ユーリ [C541] の息子〉³⁹¹⁾ を派遣して、オレーグ [G5] に対抗しようとした。オレーグ [G5] は、自分の従士たちと合流すると、スヴェリレスクで戦いはじめた。そして、オレーグ・スヴァトスラヴィチ [G5] が、自分の義理の兄弟³⁹²⁾ に勝利し、【603】〔敵の〕多くの従士たちを捕虜とした。かれ〔ユーリイ [C541] の息子〕自身はかろうじて逃げのびた。

386) 上注 381 の 1175 年 6 月 15 日のこと。『ラヴレンチイ年代記』並行記事では「6 月 15 日の日曜日に」と日付が記されている。

387) 『ノヴゴロド第一年代記』6683(1175)年の記事 ([НПЛ: С. 34, 223]), および『ラヴレンチイ年代記』並行記事 ([ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 379]) では、ミハルコ [D175] がヴラジミルの公座に就き、フセヴォロド [D177:K] がペレヤスラヴリの公座に据えられたことが記されている。

388) スヴァトスラフ [C411:G] の息子オレーグ [G5] についてはここが初出。年少の公だったと考えられる。

389) 「ロパスナ」(Лопасна) はロパスニャ川 (Лопасня) (オカ川の右岸支流) の河口付近に位置していたと推定されている城市。チェルニゴフ公領の最北東の辺境に位置し、チェルニゴフの城市からは 570km も離れている。モスクワからだ、モスクワ川からオカ川経由で 150km ほど下れば容易に到達することができる。チェルニゴフ公領からみれば辺地であることから、スヴァトスラフ [C411:G] の年少の息子オレーグ [G5] に領地として分領されていたのだろう。

390) 「スヴェリレスク」(Свѣрилеск) は、モスクワ川左岸に位置する城砦で、チェルニゴフ公領、リャザン公領、ロストフ＝スーズダリ地方の 3 つの領地のちょうど境界に位置していた。現在のモスクワ州ミャチコヴォ村 (Мячково) に相当すると推定され、モスクワからだ、モスクワ川を下って、東南方向に 90km ほどしか離れていない。

391) ユーリイ・ロスチスラヴィチ [C541] は、リャザン公グレーブ [C542:H] の兄で、この時にはすでに没していた。『ニコン年代記』6655(1147)年の項に、「その年リャザンのエレット (Елец) からアンドレイ・ロスチスラヴィチが、チェルニゴフのダヴィドの息子たちのもとへやって来た。全員が一体となって力を合わせた」[ПСРЛ Т. 9, 2000: С. 173] とあり、この「アンドレイ」がリャザン公グレーブ [C542:H] の兄弟であることは確かだが、その後の記事での言及がない。ヴォイトヴィチは、このアンドレイを「ユーリイ」の洗礼名として、同一人物と考えている [Войтович 2006: С. 380]。いずれにせよ、このユーリイ＝アンドレイはこの時点では存命ではなく、その息子をグレーブが庇護していたのだろう。

392) ユーリイ＝アンドレイ [C541] (前注) の息子が、オレーグ・スヴァトスラヴィチ [G5] の「義理の兄弟」(шюрин) というのは、オレーグの妻が、ユーリイ＝アンドレイの娘であることによっている。

6685〔1177〕年

春祭週間³⁹³⁾に、ポロヴェツ人がルーシの地に来襲した。キエフの公座に座していたロマン [J1] は、自分の弟リユーリク [J2] と自分の息子〔ヤロポルク [J11]〕を〔討伐のために〕派遣した。ポロヴェツ人はベレンディ人の6つの城市³⁹⁴⁾を占領すると、ラストヴェツ川³⁹⁵⁾ (Растовець) へと進軍を始めた。〔討伐隊には〕ダヴィド³⁹⁶⁾ [J3] を招請しなかった。かれ〔ダヴィド〕は、他の兄弟たちと仲違いをしていたのである。〔キエフ公ロマン [J1] が〕味方にしたのは、自分の兄弟たち、〔すなわち〕リユーリク [J2] と自分の甥〔ロスチスラフ [J21]〕、ヤロポルク [J11] とボリス³⁹⁷⁾ [J13] だった。こうして、ラストヴェツ川でポロヴェツ人に追いついた。

ポロヴェツ人は方向転換して、ルーシの部隊に打ち勝った。多くの貴族たちが捕らえられ、公たちはラストヴェツ川へと逃げ帰った。

これは、神がかれら〔諸公に〕懲罰を与えたのである。かれらを慈しむのではなく、われらを罰して、われらを悔い改めさせようとしたのだ。この邪教徒の来襲によって、われらが悪事から手を引くようさせたのである。これは、神の筈である。われらが正気を取り戻して、悪の道から離れるようにとのことである。

オレーグ [C4] 一族の諸公、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] はこれを聞いて喜んだ。かれらは、これが神の懲罰であることを知らなかったのである。

この年、スヴァトスラフ [C411:G] はキエフへ向けて進軍を始めた。スヴァトスラフ [C411:G] は、〔キエフ公の〕ロマン [J1] に対して次のように言った。「兄弟よ、わしはそなたからは何

393) ここで「春祭週間」と訳したのは、原文では *русалная неделя* で、復活祭から数えて7番目の日曜日から始まる一週間を指す民間的な呼び名。1176年の復活祭は4月4日で、「春祭週間」は1176年5月16日から22日までの期間に相当している。草が萌え出る時期であり、遊牧民であるポロヴェツ人にとっては馬を養うために移動するのに最適な季節だった。

394) ベレンディ人はロシ川 (Рось) 流域に居住地を置いており、この「6つの城市」を正しく特定はできないが、ミハイロフ (Михайлов)、ユーリエフ (Юрьев)、ヴォロダレフ (Володарев) などが含まれると考えられる。ポロヴェツ人はロシ川を遡って、流域の城市を次々と占領・掠奪して、上流域のラストヴェツ河畔 (次注) に達したのである。

395) 「ラストヴェツ川」 (Растовец; Ростовиц) はロシ川上流域の左岸支流で、ベレンディ人の居住地域だった。河口はペレヤスラヴリから西南西へ170kmほど離れており、現在の、ウクライナのジトミル州ピリピフカ (Білілівка) 村周辺に相当する。

396) 当時、ダヴィド [J3] は、ヴィシェゴロドの公座を保持していたと考えられる。

397) ロマンの息子ボリス [J13] についてはこの部分が初出。まだ年少の公だったのだろう。叔父のムスチスラフ [J5] がノヴゴロドの公座に就いていた1179年～1180年にプスコフの公になっている。下注438参照。

かを要求するものではない。われらは次のような約定があるのだから。**[604]** すなわち『もし公が過ちを犯したときは、領地で償い、家臣〔が過ちを犯したときに〕は命〔で償うこと〕。〔この度は〕ダヴィド [J3] に過ちがある³⁹⁸⁾』』。

しかし、かれ〔ロマン [J1]〕はこれを行わなかった³⁹⁹⁾。そこで、スヴァトスラフ [C411:G] は自分の兄弟のヤロスラフ [C412] と〔息子の〕オレーグ [G5] を兵とともに〔キエフ地方へと〕派遣した。かれらはドニエプル川を渡り⁴⁰⁰⁾、そこから自分の娘婿であるムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ⁴⁰¹⁾ [D1151] に使者を派遣して、かれに、ロスチスラフ一族〔の陣営〕から離反するようにと命じた⁴⁰²⁾。ムスチスラフ [D1151] は、そのようにすることを約束した。そして、かれ〔ムスチスラフ [D1151]〕はトレポリ⁴⁰³⁾ (Трьполь) の城市へ向けて進軍を始めた。

ムスチスラフ [D1151] は〔トレポリ城市の〕水門⁴⁰⁴⁾ に向かって進むと、戦う振りをした⁴⁰⁵⁾。〔そして実際は〕密かに城内〔の者〕と手を結んで、ヤロポルク [J11] に隠れて〔行動した〕。そして、

398) この、スヴァトスラフ [C411:G] のキエフ公ロマン [J1] に対する言葉は次のように解釈できる。ポロヴェツ人のルーシの地 (キエフ公領) への襲撃 (上注 394) で 6 つの城市を占領され、ラストヴェツ川でルーシの討伐軍も敗れたのは、ロマン [J1] の弟ダヴィド [J3] が、兄弟たちと不和だったことで、ダヴィドが討伐軍に参加しなかったことが原因である。このような過ちを犯したダヴィド [J3] は、約定に従って、自らの領地 (おそらくはベルゴロドとヴィシェゴロド) を兄弟たち (つまりは、スヴァトスラフ [C411:G]) に引き渡すべきである。

399) ロマン [J1] は、スヴァトスラフ [C411:G] の要求を、キエフ地方の領地を支配するための口実であると見なして、弟ダヴィド [J3] の領地 (前注) を、スヴァトスラフに引き渡すことはしなかった、ということ。

400) 下注 406 で説明されているように、ヴィテチェフ (Витечев) の渡渉で、左岸から右岸へドニエプル川を渡って、トレポリの近郊で布陣していたのである。

401) ムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ [D1151] については、1171 年 2 月に父親のウラジーミル [D115] がドロゴブージからキエフへと公座を移したときに、代々の所領であるドロゴブージの公座を継承したことが記されている (上注 93 参照)。この記事で зять (娘婿) と呼ばれていることから、ドロゴブージ公ムスチスラフは、チェルニゴフ公スヴァトスラフ [C411:G] の娘を娶ったことがわかる。

402) ドロゴブージ公ムスチスラフ [D1151] は、ドロゴブージの公座をキエフ公ロマン [J1] の手で安堵されていたことから (上注 91)、「ロスチスラフ一族」の味方であった。スヴァトスラフ [C411:G] は、姻戚関係を利用して、ムスチスラフ [D1151] を自分たちの味方に付けようとしたのだろう。

403) 1173 年にミハルコ [D175] がトレポリを甥のムスチスラフ [D1711] から取り上げて (上注 161 参照)、ロスチスラフ一族の支配に委ねた (上注 162 参照)。その後、トレポリは、ロマン [J1] の息子ヤロポルク [J11] に引き渡されて、ヤロポルクが公支配を行っていたと考えられる。

ここでは、ムスチスラフ [D1151] は、岳父であるスヴァトスラフ [C411:G] がドニエプルを渡河して、トレポリの近郊で布陣していることから (下注 406 参照)、これに合流するために、トレポリへと向かったのである。

404) 「水門」(ворота водные) は、トレポリの城市の、おそらくドニエプル川の側に向かっていた城門の名称。[Барсов 2012: C. 15]

405) ムスチスラフ [D1151] は、ヤロポルク [J11] が守る城市トレポリ (キエフ攻略のための要所) を占拠するために、計略を用いたのである。

トレポリ人をうまく欺いて、城門を開けさせた。ヤロボルク [J11] は父親〔ロマン [J1]〕のもとへと〔逃げて〕行った。

スヴァトスラフ [C411:G] は、自分の部隊を率いて〔キエフへ地方と〕やって来ると、ヴィテチェフ⁴⁰⁶⁾ (Витичев) 付近で陣を張った。この場所で、かれのもとに黒頭巾族がやって来た。かれのもとにはまた、キエフ人がやって来て、こう言った。「すでに、ロマン [J1] がベルゴロドへと向かっています⁴⁰⁷⁾」。スヴァトスラフ [C411:G] はキエフに入城した。預言者聖エリアの祝日⁴⁰⁸⁾ だった。そして、かれ〔スヴァトスラフ〕はそこから、自分の兄弟たち⁴⁰⁹⁾ をベルゴロドに向けて派兵した。だが、かれら〔兄弟たち〕は戦果を得られず、戻って来た。

この年、イーゴリ [C432] に息子が生まれた。洗礼名はアンドレヤン (Андрѣян) と名付け、公としての名はスヴァトスラフ [C4323] だった⁴¹⁰⁾。

その時、ムスチスラフ [J5] が、自分の部隊を引き連れてやって来た⁴¹¹⁾。ロスチスラフ一族はこう言った。「明日、われらはスヴァトスラフ [C411:G] に遠征軍を差し向けよう、神が望んでおられるように⁴¹²⁾」。

406) 「ヴィテチェフ」(Витичев) はキエフの丘から南東方向に 28km ほど離れたドニエプル川の浅瀬のドニエプル川右岸に位置する城砦。現在のヴィタチウ (Вита́чів) 村に相当する。トレポリの城市からは数 km しか離れていない。

407) トレポリを占領されたこと、黒頭巾族の援軍を得たスヴァトスラフ [C411:G] もキエフに迫っていること、さらにキエフ人 (在地貴族層) も離反していることを見てとったキエフ公ロマン [J1] は、抵抗しても無駄と判断して、キエフ城市から自ら退去し、おそらく弟のダヴィド [J3] が支配していたベルゴロドの城市に身を寄せたのである。

408) 預言者エリアの祝祭日 (「聖エリアの炎の昇天」) は 7 月 20 日であり、スヴァトスラフ [C411:G] は、1176 年 7 月 20 日にキエフに入城したことになる。

409) スヴァトスラフ [C411:G] のキエフ遠征に参加していた、兄弟のヤロスラフ [C412] や娘婿のムスチスラフ [D1151] のことを指すのだろう。

410) スヴァトスラフ [C4323] は、イーゴリ [C432] の三番目の息子にあたる。その洗礼名を受けた守護聖人がニコメディアの殉教者アドリアノス (Адриан) とすると、その祝祭日は 8 月 26 日であり、その前後の誕生だとすると、前の記事からの時系列には適合している。[Литвина, Успенский 2006: С. 608]

411) この部分は前後関係が分かりにくいですが、内容から見て「ロスチスラフ一族」の一人であるムスチスラフ [J5] (勇猛公) が、一族 (「ロスチスラフ一族」) の拠点都市であるスモレンスクから (下注 434 参照)、ダヴィド [J3] とロマン [J1] が身を置いていたベルゴロドへ、援軍を引き連れてやって来たと解釈するのが妥当であろう。

412) キエフの公座を獲得したスヴァトスラフ [C411:G] が、逃亡したロマン [J1] のいるベルゴロドへ派兵をした (上注 409) ことへの報復と、ロマン [J1] の公位回復の援軍としてのキエフへの遠征を指している。時期は、1176 年 7 月のスヴァトスラフのキエフ公位復帰からほど近い、その年の秋頃 (ドニエプル川が氷結する前) だろう。

スヴァトスラフ [C411:G] は、ロスチスラフ一族が自分と戦おうとしていることを知った。スヴァトスラフ [C411:G] は、リュベジ (Лыбедь) 川河口のところでドニエプル川を渡って逃げ出した。その時、大勢が溺れ死んだ⁴¹³⁾。

[スヴァトスラフ [C411:G] は] これ以前にポロヴェツ人のもとに〔援軍を求める〕使者を発していた。ポロヴェツ人は、スヴァトスラフ [C411:G] がキエフから逃げ出したことを聞くと、トルチェスク (Торцький) に到来して、多くの者を捕虜に獲った。

ロスチスラフ一族は、ルーシの地を滅ぼすこともキリスト教徒の血を流すことを望まなかったため、評議をした上で、キエフをスヴァトスラフ [C411:G] に与えた。ロマン [J1] はスモレンスクへと向かった⁴¹⁴⁾。

413) スヴァトスラフ [C411:G] は、ムスチスラフ [J5] の遠征軍が多勢であること、要請したポロヴェツ人の援軍がやって来ないことから、キエフ城で戦っても持ちこたえられないと見て、逃亡を選んだのである。リュベジ川の河口地点はキエフの丘から南南東に 9km ほど離れており、ドニエプル川を渡河するためには船でしか渡れない場所である。大勢が溺死したということで、いかに慌てて逃げたかがわかる。

414) それまで、ロマン [J1] はベルゴロドでキエフ公位回復の機会を狙っており、ムスチスラフ [J5] の加勢を得て、スヴァトスラフ [C411:G] をキエフから追い出すところまで成功したが、南から来襲するポロヴェツ人からのキエフを守るためには、スヴァトスラフの力を借りるのが良策と考えて、自分は先祖代々の所領地であるスモレンスクに一旦退去したのである。

(…) ⁴¹⁵⁾ ヴラジミルの民衆は十字架を手に、勝利をおさめて凱旋して戻って来た自分たちの公 ⁴¹⁶⁾ を出迎えた。かれら〔民衆〕は、邪教徒の捕虜の身から解放されたキリスト教徒たち、捕らえられた敵兵たちを目撃した ⁴¹⁷⁾。

かれ〔フセヴォロド [D177:K]〕は、ヴラジミルの城市に、捕虜としたグレーブ公 [C542:H] とその息子ロマン ⁴¹⁸⁾ [H2]、その義兄弟のムスチスラフ [D1711] を連行して来た。その従士たちも捕らえ、かれらの高官 ⁴¹⁹⁾ たちも〔連行して来た〕。ヴラジミルの城市は大いなる喜びに湧いた。

415) この、ヴラジミルの地における事件を記した部分は、編集・写本制作の過程で生じた脱落があり、中途半端な記述から始まっている。『ラヴレンチイ年代記』の内容的に対応する記事 ([ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб.379-385]) によって、脱落したと考えられる事件の推移を補足すれば、次のようになる。

本年代記 1176 年の記事のように、ムスチスラフ [D1711] = ヤロボルク [D1712] 陣営とミハルコ [D175] = フセヴォロド [D177:K] 陣営の間の抗争は、1175 年 6 月 15 日に後者の勝利に終わり (上注 381)、ミハルコ [D175] は〔クリャジマ川河畔の〕ヴラジミルの公座に就いた。その後、ミハルコ [D175] とフセヴォロド [D177:K] は、リャザン公グレーブ [C542:H] を攻めると、グレーブ [C542:H] は降伏して、先に掠奪したものを返還して事態を収拾した。しかし、ミハルコ [D175] は、一年後の 1176 年 6 月 20 日に没してしまう。

これを知ったロストフ人と貴族たちは、ノヴゴロドに亡命していたムスチスラフ [D1711] を呼び戻して、部隊を結成すると、ヴラジミルの公座を奪還するために進軍を始めた。これに対して、ミハルコの弟フセヴォロド [D177:K] は、ヴラジミル人等を率いて迎撃の部隊を進め、いったんは和議を結んで、ロストフはムスチスラフの所領、ヴラジミルはフセヴォロドの所領、スーズダリは共有の所領とすることで約定した。

しかし、ムスチスラフはこれに満足せず、再び部隊を進めた。フセヴォロドも迎撃して、ユーリエフ平原の戦い (1176 年 6 月 27 日) で、フセヴォロドは完全に勝利した。ムスチスラフは再びノヴゴロドに逃げ戻ったが、ノヴゴロド人に受け入れられず、義理の兄弟のリャザン公グレーブ [C542:H] のもとに身を寄せ、再起を期する。グレーブは、この年の秋にヴラジミル地方の所領であるモスクワを焼いた。これに対して、冬 (1176/1177 年) にフセヴォロドは反撃を行った。最終的に、フセヴォロドはテオドロスの週の月曜日 [1177 年 3 月 14 日] にコロクシャ川 (Колахша) の合戦で大勝利をおさめ、グレーブ [C542:H]、ムスチスラフ [D1711] など主だった敵将を捕虜に獲った。こうして、フセヴォロドは意気揚々とヴラジミルに凱旋した。

この個所は、凱旋したフセヴォロド公を出迎えるヴラジミル人の描写から始まっている。

416) フセヴォロド・ユーリエヴィチ [D177:K] を指している。

417) フセヴォロド [D177:K] は、遊牧民 (「邪教徒」) と戦ったわけではないから、この段落の文言は、事実にもとづくというより、文学的な修辭もしくは借用と見るべきだろう。

418) ロマン・グレーボヴィチ [H2] についてはこの部分が初出。『ラヴレンチイ年代記』にも、このロマン [H2] が、おそらく兄弟のイーゴリ [H3] とともにコロクシャ川の合戦 (1177 年 3 月 14 日) (上注 415) に従軍して、捕虜となったことが述べられている。[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб.383-384]

419) 「高官」(вельможа) は、「大いなる・人士」を意味する合成語 (ギリシア語からのカルクの可能性もある) で、年代記にはまれにしか使われない語である。ここでは、諸城市の豪族を意味する「貴族」(бояре) を高尚に言い換えた表現と見てよいだろう。

その三日目にヴラジミルの城市では騒動が発生した。貴族と商人たちが決起して、こう言った。「公よ⁴²⁰⁾、われらはあなたに善きことを望んでいます。あなたのために戦いで死んでも構わない。ところが、今、あなたは自分の敵たちを手元に置いて自由に振る舞わせている。見よ、あのスーズダリ人とロストフ人たち⁴²¹⁾は、あなたにとっても、われらにとって敵なのです。かれらを罰せよ。かれらの目を潰すか、あるいはわれらに引き渡されよ」。篤信の神を畏れるフセヴォロド公 [D177:K] は、そのようにすることを望まず、かれら〔貴族と商人たち〕を土牢に投ずるよう命じた。これは、民のためであり、騒動を鎮めようとしたのである。

そして、〔フセヴォロド [D177:K] は〕【606】ヤロポルク⁴²²⁾ [D1712] の引き渡しを求める使者を〔リャザンに〕派遣して、こう言った。「そなたたちは、われらが敵〔ヤロポルク [D1712]〕を引き渡せ、さもなければ、そなたたちのところに〔遠征に〕行く」。リャザン人は評議をして、〔答えて〕言った。「われらの公とわれらの同胞たちは、他国の公⁴²³⁾のせいで命を落とした」。そして、かれら〔リャザン人〕はヴォロネジ川⁴²⁴⁾ (Воронажь) まで行き、自らの手でかれ〔ヤロポルク [D1712]〕を捕らえると、このヤロポルク [D1712] をヴラジミルまで連行して行き、そこで、かれを土牢に投じた。

420) フセヴォロド・ユーリエヴィチ [D177:K] に対する呼びかけ。

421) 「スーズダリ人とロストフ人たち」とは、ムスチスラフ [D1711] とヤロポルク [D1712] の軍勢を支えていた「従士たち」や「高官たち」(上注 419) のことを指している。ここでは、ヴラジミル人にとっての、城市間の抗争の相手として、このように呼ばれている。

422) 『ラヴレンチイ年代記』 1185(1177) 年の記事によれば、ヤロポルク [D1712] もコロクシャ川の合戦に参加しているが ([ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб.384]), 捕虜に獲られることはなく、戦場から逃げ出してリャザンへ身を逃れたと考えられる。なお、『ノヴゴロド第一年代記』 6674(1176) 年記事のこの合戦の描写では、ムスチスラフ [D1711] とともに「兄弟のヤロポルク [D1712]」も捕虜としたとされているが、これは、のちにヤロポルク [D1712] をリャザンに連行して、投獄したと混同していると考えられる。

423) 「他国の公のせいで」(в чюжемь князи) は単数形であることから、グレーブ [C542:H] が庇護していたムスチスラフ [D1711] を指しているだろう。

424) 「ヴォロネジ」(Воронажь) が城市を指しているかどうかは不明だが、リャザン城市の南方のヴォロネジ川(ドン川の左岸支流)の上流域一帯のなんらかの地名である。

グレーブ [C542:H] の義理の兄弟であるムスチスラフ・ロスチスラヴィチ [D1711] は⁴²⁵⁾、評議をして、スヴァトスラフ⁴²⁶⁾ [C411:G] のもとに使者を遣って、こう言った。「フセヴォロド [D177:K] のもとに〔使者を〕派遣してください。これは、ムスチスラフ [D1711] とヤロポルク [D1712] の〔解放の〕ためなのです」。また、かれ〔スヴァトスラフ〕のもとには、グレーブ [C542:H] の妃⁴²⁷⁾ も派遣されて行き、夫の公と息子〔ロマン [H2]〕について〔かれらを解放するための〕請願を行った。そこで、スヴァトスラフ [C411:G] は、フセヴォロド [D177:K] のもとにチェルニゴフ主教ポルフィーリイ (Пьрфюрий)、聖母修道院⁴²⁸⁾ 典院エフREM (Офрем) を派遣した。フセヴォロド [D177:K] はこの二人を2年間自分のもとに留め置いた⁴²⁹⁾。

スヴァトスラフ [C411:G] は、グレーブ [C542:H] を解放して、ルーシ⁴³⁰⁾ に行かせるようにと、

425) この「ムスチスラフ・ロスチスラヴィチ」は、コロクシャ川の合戦で捕虜になり、ウラジミルに連れてこられたムスチスラフ [D1711] を指すと見るべきだろう。この「ムスチスラフ」については、原文では зять Глебовъ となっており、зять は親族の女性(姉妹または娘)の配偶者、つまり「義理の兄弟」か「婿」を指す言葉である。しかし、ムスチスラフ [D1711] はグレーブの妻の兄弟だから、グレーブにとっては「妻の兄弟」にあたり、中世ロシア語では шурин としなければならない(上注 320 参照)。これは、年代記者の誤解にもとづく誤記と見るべきだろう。

また、「評議をした」相手は、かれと同様に捕虜の身となっていたグレーブ [C542:H] 公とその息子ロマン [H2] と考えられる。このロマンが、この時点(1177年4月～6月)ではすでに、スヴァトスラフ [C411:G] の娘と結婚していたことから(本年代記 6688(1180)年の記事では、ロマンはスヴァトスラフの娘婿(зять)と呼ばれ(下注 491)、ラヴレンチイ年代記) 6688(1180)年の記事では、スヴァトスラフはロマンの舅(тесть)と呼ばれている[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб.387])。ロマン [H2] は、姻戚関係を頼って、当時キエフ公だったスヴァトスラフに、自分たちを解放させるためのとりなしを頼んだのではないか。

なお、ウクライナ語訳の注([Літопис руський, 1989: С. 322, прим. 6])は、зять を「娘婿」と解釈して、この「ムスチスラフ・ロスチスラヴィチ」をムスチスラフ勇猛公 [J5] に同定している。そして、ムスチスラフは、再婚相手として(最初の結婚はガーリチのヤロスラフ八智公 [A1211] の娘) リャザン公グレーブ [C542:H] の娘を娶ったと解釈しているが、その可能性は低い。

426) 当時(1177年3月～6月頃)スヴァトスラフ [C411:G] はキエフの公座に就いており、諸公の利害関係を取りまとめる立場にあった。また、スヴァトスラフは「ロスチスラフ一族」の承認のもとにキエフの公座に就いており(上注 414 を参照)、スモレンスクのロマン [J1] やムスチスラフ [J5] とは良好な関係を保っていたと考えられる。

427) ムスチスラフ [D1711] とヤロポルク [D1712] の姉妹にあたるエフロシニヤのこと(上注 320 参照)。かの女の逝去については、本年代記 6686(1178)年の記事で簡単に触れられている(下注 468)。

428) 現在もチェルニゴフにある、エレッスキイ聖母就寝修道院(Успенский собор Елецкого монастыря)のこと。1069年～1097年に創建された、聖救世主首座教会(Спасский собор)とならんでチェルニゴフにあるもっとも古い教会。

429) 公の名代の使節として派遣された高位聖職者を自分の城市内に留置することは、1140年にキエフ公フセヴォロド [D41] が、ノヴゴロド主教ニフォントに対して行った前例があるが([イパーチイ年代記(2): 322頁, 注 203, 208])。派遣先の公(都市)に対して大きな屈辱を与える行為だった。

430) グレーブ [C542:H] をリャザンに戻すと、フセヴォロド [D177:K] にとって潜在的な脅威となることから、「ルーシ」(キエフもしくはスヴァトスラフの拠点城市であるチェルニゴフ)にグレーブを引き取ることを提案したのである。

〔フセヴォロド [D177:K] に〕申し入れた。しかし、グレーブ [C542:H] 自身は「わしはここで死んだほうがまだ、行くつもりはない」と言った。

そして、そんな時に、グレーブ [C542:H] は死んでしまった。6月30日のことだった⁴³¹⁾。かれの息子ロマン [H2] は、もはや抵抗することはできず、〔フセヴォロド [D177:K] に忠誠を誓う〕十字架接吻をした。ムスチスラフ [D1711] とヤロボルク [D1712] は土牢に囚われたままだったが、後になって引き出されて、〔二人は〕目を潰されてから解放された⁴³²⁾。

6686 [1178] 年

ノヴゴロド人が、代表者をムスチスラフ・ロスチスラヴィチ⁴³³⁾ [J5] のもとに派遣して、かれを大ノヴゴロドへと〔公として〕招聘した。かれは、ルーシの【607】地から離れることを

431) 1177年6月30日に相当する。グレーブ [C542:H] の死について、『ノヴゴロド第一年代記』6685(1177)年の記事は、「リャザン公グレーブがヴラジミルの土牢で逝去した」[HIII: C. 35, 224]と短く報じている[HIII: C. 35, 224]。

432) その後の二人の運命については、次注433を参照。

433) 以下の「ムスチスラフ」のノヴゴロド就位の記事は一般的な書き方がされていることから、この「ムスチスラフ」がユーリイ手長公 [D17] の孫のムスチスラフ・ロスチスラヴィチ [D1711] であるか、大ムスチスラフ公 [D11] の孫のムスチスラフ・ロスチスラヴィチ [J5] であるかは定めがたい。

直前の記事がムスチスラフ [D1711] とヤロボルク [D1712] の解放で終わっていることから、文脈から見れば、この「ムスチスラフ」は、ムスチスラフ [D1711] と受け取るのが自然である。実際に、『ノヴゴロド第一年代記』6685(1177)年の記事によれば、フセヴォロド [D177:K] の手で盲目にされたムスチスラフ [D1711] は、「ルーシに行った。かれは爛れた眼をして導かれて行き、スモレンスクにたどり着いた」とあり、この後の、9月5日(1177年)はスモレンスクのボリス＝グレーブ教会での奇蹟で視力を回復し、さらに、1177年11月頃には、「冬にムスチスラフ公 [D1711] が兄弟のヤロボルク [D1712] とともにノヴゴロドに到着した。そこでノヴゴロド人はムスチスラフ [D1711] を〔ノヴゴロドの〕公座に就け」とある。ちなみに、ムスチスラフ [D1711] はノヴゴロド着任後まもなく、1178年4月20日に(『ラヴレンチイ年代記』によれば1178年の復活祭光明週間〔4月2日～4月8日〕に)ノヴゴロドで没している。[HIII: C. 35, 224]。

しかしながら、本記事に続いて語られている大規模なチュヂ人討伐遠征を行ったのは、大ムスチスラフ公 [D11] の孫のムスチスラフ・ロスチスラヴィチ [J5] の方である。『ノヴゴロド第一年代記』6687(1179)年の記事によれば、このムスチスラフ [J5] は、1179年11月1日にノヴゴロドの公座に就き、1179/1180年冬にチュヂ人、オチェラ人の地への遠征を行ったとされている。([HIII: C. 36, 225])。

キエフで編集された本記事は、「ロスチスラフ一族」に近い年代記記者の手になると推定されており、また本記事は「ムスチスラフ」称賛のニュアンスが強いことから、年代記のクロノロジーから見て不自然ではあるが(1178年の事件がない)、この「ムスチスラフ」は大ムスチスラフ公 [D11] の孫のムスチスラフ [J5] と考えるべきだろう。

望まず⁴³⁴⁾、かれら〔ノヴゴロドの使者たち〕に言った。「わしは自分の父の地から離れて、自分の兄弟たちと別れ別れになることはできない。なぜなら、〔兄弟たちは〕自分の父の地のために、心底から苦しみを受けることを望んできたのだから」。かれ〔ムスチスラフ [J5]〕は、いつも大いなることのために努力し、自分の家臣たちとともに協議を重ね、自分の父の事業を行っていたからである。かれ〔ムスチスラフ [J5]〕はすべてを自分の心の中で考慮して、〔ノヴゴロド公として〕行くことを望まなかった。しかしながら、かれの兄弟たち、かれの家臣たちは、かれにこう言って、強いてかれを〔行せることに成功した〕。「兄弟よ、そなたは、名誉をもって招聘されているのです。行って下さい、かの地〔ノヴゴロド〕もわれらが父の地でないわけでもないでしょう」。

かれ〔ムスチスラフ [J5]〕は、自分の兄弟と自分の家臣たちの言うことを聞いて、ノヴゴロドの貴族たちとともに出発した。〔ノヴゴロドの〕主教は十字架を手に、ノヴゴロド人や典院たちとともにかれを出迎えた。全員が聖ソフィア教会の中に入り、聖なる救世主と聖母に拝礼を行った。こうして、かれ〔ムスチスラフ [J5]〕は、栄光と榮譽をもって自分の祖父、自分の父の公座に座した⁴³⁵⁾。

ムスチスラフ [J5]は大ノヴゴロドの公座に就いたとき、神はムスチスラフ [J5]の心に、チュヂ人討伐遠征⁴³⁶⁾を行うという善き考えを起こさせた。かれ〔ムスチスラフ〕はノヴゴロド人たちを呼び寄せると、かれらに言った。「兄弟たちよ、見よ、邪教徒どもがわれらに侮辱を与えている。これまで、われらは、神と聖母の助けに恃んできた。自分たちのために企てをなし**[608]**、ノヴゴロド地を邪教徒どもから解放してきたのだ」。このかれの言葉は、ノヴゴロドのすべての有力者たちに気に入られた。かれらは、かれ〔ムスチスラフ〕に言った。「公よ、このこと〔チュヂ人討伐遠征〕が、神とあなたの意に沿うものであるなら、われらは〔参加する〕準備ができています」。

こうして、ムスチスラフ [J5]はノヴゴロド人の兵を集めて、これを編成した。総勢で2万

434) この「ルーシの地」はモレンスクのこと。当時ムスチスラフ [J5]はモレンスクに公座を持っていた。

435) 1179年11月1日のこと。上注433参照。

436) チュヂ人は、ノヴゴロドの地の西側に広がる現在のエストニア地方に居住していたフィン系の民族で、古くからノヴゴロド人はこの地に掠奪遠征を繰り返していた。エストニアとロシアの境界にあるペイブシ湖は、現在でもロシア語で「チュヂ湖」(Чудское озеро)と呼び、湖の西側はチュヂ人の居住地だった。

なお、『ノヴゴロド第一年代記』6684(1176)年の記事では、チュヂ人がプスコフに攻めてきて戦闘があったことが記録されている。また、同年代記6687(1179)年の記事では、「冬にムスチスラフ [J5]はノヴゴロド人とともにチュヂ人、オチェラ人のところに侵攻し、かれらの全土を焼いた。かれら〔チュヂ人、オチェラ人〕は海へ逃げたが、そこでかれらの多くが斃れた」と記されている。このことから、ムスチスラフ [J5]のチュヂ討伐遠征は、公座の就いた直後の、1179年11月から翌年の2月頃までにかけての時期だったことが分かる。

人になることが分かった。そして、ムスチスラフ [J5] はチュヂの地を目指して出発した。かれらの地へ侵入すると、かれらの全土で戦うときまで陣を張り、それからかれらの全土を焼いた。こうして、奴隷や家畜を捕獲して帰郷した。かれらは、大いなる栄光と榮譽をもって、邪教徒に対する勝利を神から得ることができたのである。

かれ〔ムスチスラフ〕はチュヂ〔の地〕から帰還したときに、プスコフ⁴³⁷⁾に入城し、自分の甥ボリス⁴³⁸⁾ [J13] の件でその百人長⁴³⁹⁾を捕まえた。それは、かれら〔プスコフ人〕は、かれの甥ボリス [J13] を〔公として受け入れる〕ことを望まなかったからだった。そして、〔プスコフの〕民衆と〔ボリス受け入れについて〕約束をすると、そこからノヴゴロドへ向かった。そこ〔ノヴゴロド〕にはひと冬のあいだ⁴⁴⁰⁾滞在した。

春になると⁴⁴¹⁾、〔ムスチスラフ [J5] は〕自分の家臣たちと評議して、ポロツクの自分の義理の兄弟フセスラフ⁴⁴²⁾ [L221] を討伐すべく出陣した。かつて、かれ〔フセスラフ〕の〔曾〕祖

437) プスコフはノヴゴロド・ヴェリーキイから南西に 180km 行った地点にある都市。ノヴゴロドの附属都市だったが、1137 年にノヴゴロドから一定の独立を勝ち取っていた。

438) ムスチスラフ [J5] の年少の甥ボリス [J13] は、1176 年 4 月にポロヴェツ軍がロシ川沿岸の 6 つの城市を掠奪したときに、諸公討伐軍の一員として従軍している (上注 397 参照)。その後、父あるいは叔父たちの意向でプスコフに公座を与えられたのだろう。

439) 「百人長」(сотьскѣи) は 100 人編成規模の部隊を指揮する軍司令官を指し、プスコフのような小規模の城市では、城市防衛軍の長の役割を担っていた。

440) 1179/1180 年の冬のこと。

441) 1180 年 3 月～4 月を指している。

442) 「フセスラフ・ヴァシリコヴィチ」(L221) については、1175 年 2 月に、ヴラジミル〔クリヤジマ河畔の〕の公ヤロポルク [D1712] が、ヴィテプスク公「フセスラフ」の娘を娶ったという記事がある。(上注 349 を参照)。この記事によって、フセスラフ (L221) は、この 1180 年の時点ではポロツクへ公座を移していたことがわかる。

フセスラフ [L221] がムスチスラフ [J5] にとって「自分の義理の兄弟」(на зятя на своего) ということから、フセスラフは、キエフ公ロスチスラフ [D116:J] の娘と結婚していたことがわかる。この結婚について年代記では記されていないが、1167 年にゴロデツ公ヴォロダリ・グレーボヴィチ [L53] とポロツク公位にあったフセスラフ [L221] が対決したとき、後者はダヴィド [J3] と同盟している。おそらくこの前後で、ロスチスラフ [D116:J] の子たちはフセスラフ [L221] と自身の姉妹を結婚させ、同盟関係の担保にしたと推察される。

ヴォイトヴィチによれば、この結婚によってフセスラフは、ロスチスラフ [D116:J] の一族 (息子たち) からの支援を得て、ポロツク地方を支配する権力を握った (ポロツク公になった) が、それと引き替えにヴィテプスクをダヴィド [J3] に引き渡さざるをえなかったとしている。[Войтович 2006: С. 290-291]

父⁴⁴³⁾がノヴゴロドを襲来して、教会〔ソフィア大聖堂〕の聖体保管器⁴⁴⁴⁾や典礼用聖具を掠奪し、郷村⁴⁴⁵⁾の一つをポロツクに併合したことがあった⁴⁴⁶⁾。ムスチスラフ [J5] は、これらのノヴゴロドの領地と損害をすべて取り戻そうと望んだのだった。こうして、かれ〔ムスチスラフ〕はノヴゴロドの兵を引き連れて、ルキ⁴⁴⁷⁾ (Лукы) へと到着した。【609】

かれ〔ムスチスラフ〕の兄弟であるスモレンスクのロマン [J1] は、このことを聞くと、自分の息子のムスチスラフ⁴⁴⁸⁾ [J12] を、ポロツクの自分の義理の兄弟〔フセスラフ [L221]〕のもとに、援軍として派遣した。そして、自分の兄弟のムスチスラフ [J5] のもとには、自分の家臣を派遣して、こう言った。「そなたはかれ〔フセスラフ〕から侮辱を受けたことはないではないか。それなのに、かれを討伐する遠征を行っている。それなら、先にわしを討伐しに来るがよい」。かれ〔ムスチスラフ [J5]〕は、自分の年長の兄弟の心を害することを望まず、ノヴゴロドへと引き返して行った。

かれ〔ムスチスラフ [J5]〕は重い病を患い、力を失い、舌も回らなくなった。かれは、自分の従士たち、公妃に目を向けて、心の底から深く息をついて、涙を流し、かれらにこう言い始めた。「見よ、わしは命ずる、わが子供のウラジーミル [J52] 〔の後見〕をボリス・ザハーリ

443) すべての写本で「祖父」(дед)になっているが、これはポロツク公フセスラフ [0811:L] を指しており、フセスラフ・ヴァシリコヴィチ (L221) にとっては「曾祖父」(прадед) に当たる。ただし、дед の語には先祖一般を指す用法もあり、この部分もそのように理解することも可能である。

444) 「聖体保管器」(ерусалим) については、上注 251 を参照。

445) 「郷村」(погост) は、北方のノヴゴロド地方で村をあらわす言葉で、貢税徴集の単位となっていた。

446) 『ノヴゴロド第一年代記 (古輯)』6574(1066) 年の記事に「フセスラフ [0811:L] が来たりて、ノヴゴロド〔人〕を女子供ともども捕虜に獲った。かれ〔フセスラフ〕は聖ソフィア教会の鐘を持ち去った。おお、その時の災いのなんと大きかったことか。かれは燭台さえ持ち去った」[НПЛ: C.17] と記されており、この個所は、明らかにこのときのポロツク公フセスラフによるノヴゴロド来襲と掠奪の事件のことを言っている。

447) 「ルキ」(Лукы) は、現在のヴェリーキエ・ルキ (Великие Луки) に相当し、ロヴァチ川 (Ловать) 中流域左岸にあったノヴゴロド地方の城市のこと。ノヴゴロドからは南南西方向に約 250km 離れている。ノヴゴロドから軍船でロヴァチ川を遡り、連水陸路を経て西ドヴィナ川に入りポロツクに向かう遠征路の場合、ほぼ中間地点に当たる。この地名の初出は 1168 年の記事で、健康を損ねていたロスチスラフ [D116:J] が、ノヴゴロドで公座についていたスヴァトスラフ [J4] をルキで出迎えさせている [イパーチイ年代記 (6) : 注 402]。

448) スモレンスク公ロマン [J1] の息子ムスチスラフ [J12] は、ボリス [J13] (上注 438) とともに、1176 年 4 月のポロヴェツ討伐遠征に派遣されている。

チ⁴⁴⁹⁾に委ねることを。これとともに、兄弟のリューリク [J2] とダヴィド [J3] に、領地とともにかれらの手に〔息子の後見を〕委ねる。わしについては、神の御意のままである」。こうして、〔ムスチスラフ [J5] は〕自分の息子〔ウラジーミル [J52]〕を自分の兄弟に委ねるように命じ、両手を天に向かって挙げると、心の底から息をついて、涙を流し、その魂を神の手に引き渡したのだった。

ロスチスラフ [D116:J] の子、大公ムスチスラフ [D11] の孫であるムスチスラフ [J5] が逝去したのは、6月13日の殉教聖女アキリナ (Аньюлина) の祝日の金曜日だった⁴⁵⁰⁾。かれは、聖体礼儀で聖体に与った〔のちに亡くなった〕。こうして、主教イリアとすべての典院たちは、名誉をもって、称賛の聖歌を唱いながら、芳香のお香を焚きながら、かれの遺体に布を巻いた。

【610】

ノヴゴロドの地のすべて〔の人々〕はかれ〔ムスチスラフ [J5]〕を悼んで泣いた。かれのことをもっとも泣き悲しんだのは、ノヴゴロドの上層の有力者たちだった。かれの遺体は、ヤロスラフ・ウラジーミロヴィチ [13] 大公の息子ウラジーミル [A] が眠っている同じ棺の中に安置された⁴⁵¹⁾。

泣き悲しむ者たちはこう言った。「ご主人様、われらはあなたとともに邪教徒の地へと遠征し⁴⁵²⁾、これをノヴゴロド地方に従属させることはもはやできません。われらがご主人様、あなたは邪教徒のあらゆる土地を望み、多くのことを言っていました。ご主人さま、われらは、

449) 「ボリス・ザハーリチ」(Борис Захарьич) は、ロスチスラフ公 [D116:J] のときから、代々スモレンスク公に仕えていた貴族で軍司令官。本年代記の1167年の記事では、ロスチスラフ公の死のときに公に同行しており ([イパーチイ年代記(6):259頁,注415])、その後も、かれの息子ムスチスラフ [J5] に勤務していた。かれは、1182年の諸公を糾合したポロヴェツ討伐遠征のときには、スモレンスクの軍隊を率いて参加している [Древняя Русь 2015: С. 79]。

450) これは1180年の6月13日で、確かに金曜日に相当する。なお、『ノヴゴロド第一年代記』の6688(1180)年の記事では死亡した日は「6月14日」になっている [НПД: С. 36, 226]。『ラヴレンチイ年代記』6688(1180)年の冒頭の記事でも、「五旬節の週の土曜日」となっており、1180年の場合、これは6月14日に相当する。[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб.387]

451) ウラジーミル・ヤロスラヴィチ [A] の埋葬場所については、『原初年代記』6560(1052)年の記事に「ウラジーミル・ヤロスラヴィチがノヴゴロドで逝去し、かれ自身が建てた聖ソフィア教会に安置された」([ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 160]) となっており、ノヴゴロドの首座教会である聖ソフィア教会であることがわかる。また、『ノヴゴロド第一年代記』6688(1180)年の記事では、ムスチスラフ [J5] の遺体は「聖ソフィア〔教会〕の聖母副祭壇に安置された」となっている。[НПД: С. 36, 226]

452) この年の記事の始めの部分に、ムスチスラフ [J5] がチュヅ人討伐遠征を行った記事があり、この「邪教徒」はチュヅ人を指している。

あなたとともに死んでしまえば良かったのに⁴⁵³⁾。そなたの祖父フセヴォロド⁴⁵⁴⁾が、われらをあらゆる侮辱から救い出したように、あなたは邪教徒どもから多くのノヴゴロド人を救い出してくれました⁴⁵⁵⁾。わがご主人様、あなたはこの事業に力を尽くし、自分の祖父が敷いた道を引き継いで歩んでこられたのです。ご主人様、今はもう、あなたを見ることはできません。われらの太陽が沈んでしまったのですから。そして、われらは全ての者から侮辱を受けています」。

このように、ノヴゴロドの多数の者たちは、かれのことを泣き悲しんだ。強き者も弱き者も、乞食にも清貧の者も、修道士たちも。なぜなら、かれはあらゆる乞食たちに施しを与えたのだから。それから、人々は自分の家へと散っていった。

このロスチスラフ [D116:J] の子で篤信の公ムスチスラフ [J5] は、年齢は中年で⁴⁵⁶⁾、容貌は美しく、あらゆる徳を身に付け、有徳で、万人に対して愛情を抱いていた。加えて慈悲深く、**[611]** 修道院を建設して、修道士たちを慰め、すべての典院たちを慰め、かれらを親愛をもって受け入れ、かれらから祝福を受けていた。教区の教会を建設し、司祭たちや主教の位にある者には然るべき敬意を払っていた⁴⁵⁷⁾。

戦争に強く、つねにルーシの地とキリスト教徒のために死ぬべく覚悟していた。なぜなら、かれはキリスト教徒が邪教徒に捕らえられているのを見て、自分の従士たちにこう言っていたからである。「兄弟たちよ、おまえたちは自分の智恵をなにも持っていないのか。もし今、わ

453) 「ご主人様、われらは、あなたとともに死んでしまえば良かったのに」(добро бы ны, господине, с тобою умерти, стовршему толикою свободе...)の文言は、『アレクサンドロス大王物語』の中の大王の死のテキストからの借用である [Вилкул 2010: С. 386]。全体として、本年代記のムスチスラフ [J5] のノヴゴロド公としてのチュヂ討伐遠征や臨終の場面では、この『物語』からの語句の部分的な借用が目立っている。

454) 「祖父」(дед)が正しければ、ここは「ムスチスラフ [D11]」とすべきところ。ムスチスラフ [D11] がノヴゴロド市民に慕われていたことについては、『原初年代記』6610(1102)年のノヴゴロド公座をめぐるムスチスラフ [D11] とヤロスラフ [B21] の争いのエピソードを参照 ([ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб.275], さらに [イパーチイ年代記 (1): 251 頁, 注 44])。

455) 『イパーチイ年代記』の記録では、ムスチスラフ [D11] は 1116 年にノヴゴロドとブスコフの人々を率いてチュヂ討伐遠征を行っている。この時のことを言っていると思われる。

456) 「年齢は中年」(възрастомъ середни)とは、ムスチスラフ [J5] 自身は、1172 年ごろにガーリチのヤロスラフ [A1211] の娘と結婚しており ([Войтович 2006: С. 521])、かりに当時 20 歳前後とすれば 1150 年前後の生まれで、死亡の時点では 30 歳～40 歳ということになり、これがルーシ国家における「中年」の年頃ということになる。

457) 「加えて慈悲深く」からこの個所までの文言は、1172 年の記事にある、スヴァトスラフ・ロスチスラヴィチ [J4] (ムスチスラフ公 [J5] の兄弟にあたる) への讃詞 ([イパーチイ年代記 (6)]: 290 頁) と多くの点でテキストが共通しており、この記事を書き集めるときに、先行記事の兄弟への讃詞をそのまま利用した可能性が高い。

れらがキリスト教徒のために死ぬのなら、われらの罪は浄化されるだろう。神はわれらの血を殉教者として見なしてくれるだろう。どうか、神はその慈悲を与えて下さいますように。神に栄光を。われらは今死のう、誰でも死ぬのだから」。

かれはこう言うと、自分の兵たちに勇気を与え、かれは全霊をもって自分の父の地のために戦ったのだった。かれは、従士たちに親切で、財産を惜しむことなく、金や銀を蓄えことなく、自分の従士たちに与えていた。あるときには、自分の魂を正しくして、自分の父や自分の祖父のために力を尽くし、生き年生ける者が償うべき万人の負債を払っていた⁴⁵⁸⁾。ルーシの地に、かれを望まない者、かれを愛さない者などはいなかった。かれは、いつも大いなる事業を行おうとしていた。

しかし、かれは若くして亡くなった⁴⁵⁹⁾。かれの兄弟たちは、かれが死んだことを聞いて、大きな悲しみにくれ、ルーシの地はすべてかれを悼んで泣いた。**[612]** かれの雄々しさを忘れることができなかつたのである⁴⁶⁰⁾。黒頭巾族の者たちもみな、かれとの良き関係を忘れることができなかつた。

この年⁴⁶¹⁾、スヴァトスラフ [C411:G] が、真ん中の息子のフセヴォロド⁴⁶²⁾ [G4] の妻として、

458) 前注と同様に、この段落の「従士たちに親切で...」からここまでの文言は、スヴァトスラフ [J4] への讃詞とほとんど共通である。

459) 上注 456 でルーシ国家における中年の年齢は 30~40 歳ごろと推測したが、この表現を見ると、当時の感覚からしても、この年齢での死去は早世であったことがわかる。

460) 1171 年 7 月にロマン [J1] がキエフの公座についた際に、ムスチスラフ [J5] はその付属城市の一つであるベルゴロドに座した。おそらくかれが黒頭巾族ともっとも密接な関わりを持っていたのは、アンドレイ [D173] の謀略によって 1172 ないし 73 年に同地を追われるまでの間と考えられる。しかし、黒頭巾族への指揮権は当時ロスチスラフ [D116:J] の子らには敵対していたヤロスラフ [I2] にあったことから (上注 202, 2055 を参照)、関係性が複雑であったか、ムスチスラフ [J5] を讃えるために虚偽の記述をした可能性もある。

461) 直前のノヴゴロド公ムスチスラフ [J5] の死 (1180 年 6 月) からは時系列がさかのぼり、1178 年もしくは 1179 年のこと。ウクライナ語訳もポーランド語訳も 1179 年説をとっている。

462) スヴァトスラフ [C411:G] の息子については、本年代記でこれまで、ウラジーミル [G2] とオレーグ [G5] の言及がある。このフセヴォロド [G4] (この個所が初出) は、兄ウラジーミルと弟オレーグの間に位置しており、年代記記者の知る限り兄弟の「真ん中」ということなのだろう。

なお、先の記述で、スヴァトスラフの息子は、さらにムスチスラフ [G1] (チェルニゴフ公在位 1216 年、1219 ~ 1223 年) とグレーブ [G3] (同 1215-1217 年) が確認できる。

カジミェシュの娘⁴⁶³⁾ (Казимѣрна) をポーランドから連れてきた。使徒ピリポの齋戒期⁴⁶⁴⁾のことだった。

この年、フセヴォロド・ユーリエヴィチ [D177:K] が、ウラジーミル・スヴァトスラヴィチ⁴⁶⁵⁾ [G2] を、ヴラジミル〔クリャジマ河畔〕の自分のもとに呼び寄せ、かれを、自分の姪である、ミハルコ [D175] の娘と娶せた⁴⁶⁶⁾。ウラジーミル [G2] は〔新〕妻とともにチェルニゴフの父のもとに行った。そこに、キエフにやって来た〔父の〕スヴァトスラフ [C411:G] が住んでいたからである⁴⁶⁷⁾。

この年、リャザン公のグレーブ [C542:H] の妃⁴⁶⁸⁾ が逝去した。

この年、フセヴォロド [C41] の妃⁴⁶⁹⁾ が逝去した。スヒマ修道尼の得度を受けていた。その

463) 「カジミェシュの娘」(Казимѣрна) は、ポーランド大公カジミェシュ二世正義公 (Sprawiedliwy) (在位 1177～1190 年, 1190～1194 年) の娘のこと [Balzer 1895: S. 184-186]。

スヴァトスラフ [C411:G] の姉妹 (フセヴォロド [C411:G] の娘) がカジミェシュ二世の異母兄ヴワディスワフ 2 世の息子であるシレジア公ボレスワフに嫁いでおり、フセヴォロド [G4] から見て伯叔母がポーランドに嫁いでいたことになる。ただし、カジミェシュの母サロメアは、継子ヴワディスワフとは不和であり ([イパーチイ年代記 (2): 注 153, 286] 参照)、この二つの婚姻に関連があるかどうかは不明。この当時すでにヴワディスワフ二世は死去している (1159 年没)。

464) 「使徒ピリポの齋戒期」(Филопово говѣнье) は、別名「キリスト降誕祭の齋」(Рождественский пост) と言い、使徒ピリポの記念日の 11 月 14 日から降誕祭前日 12 月 24 日まで (おそらく 1179 年のこと) の期間を指している。

465) ウラジーミル [G2] は、1175 年にミハルコ [D175] とフセヴォロド [D177:K] がチェルニゴフを出陣してヴラジミルへの遠征に出かけたとき、父の命令によって援軍として従軍している (上注 370 参照)。それ以来、フセヴォロド [D177:K] とは緊密な関係にあった。フセヴォロドは亡くなった兄ミハルコ [D175] の娘 (自分にとって姪にあたる) の後見人として、この結婚を取りはからったのである。

466) 1175 年の夏頃に、チェルニゴフ公スヴァトスラフ [C411:G] は、息子オレーグ [G5] に命じて、ミハルコ [D175] の妻をヴラジミル〔クリャジマ河畔〕のフセヴォロド公 [D177:K] のもとに送り届けている。「ミハルコの娘」(Михалкова дщерь) も母親と一緒にヴラジミルへ行き、フセヴォロドの庇護のもとにそこに住んでいたと考えられる。

467) 当時のキエフ公スヴァトスラフ [C411:G] は、1176 年 7 月から「ロスチスラフ一族」の承認のもとにキエフの公座に就いていたが (上注 410 参照)、キエフにおける実質的な権力基盤は弱かった。そのため、自らの拠点城市であるチェルニゴフとキエフの間を行き来していたと思われる。

468) この、グレーブ [C542:H] の妃エフロシニヤについては上注 320, 427 を参照。

469) 「フセヴォロドの妃」(Всеволожая) は、キエフ公スヴァトスラフ [C411:G] の母親にあたり、臨終のときには息子の庇護を受けてキエフに住んでいたのだろう。かの女の父親は大ムスチスラフ公 [D11] で、かりに 1127 年にフセヴォロド [D41] と結婚したとすれば、70 歳近い高齢だったことになる。

遺体はかの女が自ら建立したキエフの聖キリル⁴⁷⁰⁾〔修道院〕に安置された。

この年⁴⁷¹⁾の8月、異族がルーシの地に襲来した。神を恐れぬイシュマエル人⁴⁷²⁾、呪われたハガルの民⁴⁷³⁾、穢れて生まれた者どもで、サタンの行動と習俗をもつ、コンチャク⁴⁷⁴⁾ (Кончак) という名の悪の首長が〔率いていた〕。かれらは、義しき信仰のキリスト教徒たち、神の名を称賛する教会を、邪教によって汚していた。わたしは、かれらをキリスト教徒のみならず、神自身の敵であると言おう。もし、神の敵ども愛する者がいれば、その者は神から何か受けることなどできようか。この神を辱めるコンチャクは、われらの罪ゆえに、自分の仲間たちとともにペレヤスラヴリに襲来し、キリスト教徒に対して多くの悪事をなした。【613】そして、ある者は捕虜にし、ある者は撃ち殺した。多くの赤子が殺された。

その時、スヴァトスラフ [C411:G] はキエフを出陣して、トレポリ (Трыполь) よりも〔ドニエプル川の〕下流のところで陣を張って、ロスチスラフ一族が自分のもとに駆けつけてくるのを

470) これは、キエフの丘から北西へ2kmほどのところにあるキリル修道院 (Кирилловский монастырь) を指している。1169年の記事で「フセヴォロドの修道院」(Всеволозь монастырь) と呼ばれているものにあたり、フセヴォロド [C41] 公がキエフ公在位 (1140-1146年) のときに創建されたと推定されている。ここで、「かの女みずからが創建した」というのは、創建がフセヴォロド公の妃の主導によるところが大きかったのだろう。[イパーチイ年代記 (6): 264頁, 注 444] を参照。

471) 記事の時系列から、1179年と推定できる。

472) 「イシュマエル」(Измалтянь) は旧約聖書の人物名に由来する。アブラハムの妻サラが、夫との間に子供が出来ないために侍女ハガルにアブラハムと関係させて産まれた子である。サラはのちに生まれた自身の子供イサクの相続権を脅かすという不安から、成長したイシュマエルを母ハガルとともに追放した。ポロヴェツ人をイシュマエルの子とした最初の例は『原初年代記』の1096年の記事で、ポニャク・ハンがルーシに攻めてきたときである。同記事の説明では、年代記記者によってイシュマエルの子であると考えられた部族は、トルクメン、ベチェネグ、トルク、ポロヴェツであった [ロシア原初年代記: 252 - 254頁]。

473) 「ハガルの民」(агаряне) という呼称は、後ウマイヤ朝からナスル朝にいたるまでイスラーム勢力が勢力を保っていたイベリア半島の史料においても使われており、ポロヴェツ人に適用された原因については、L・チェキンによって考察されている。かれの説明は以下のものである。アンナ・コムネナのギリシア語史料には Туркомяνοι (トルコ人) という呼称が1071年にマンジケルトでビザンツを追い詰めたセルジューク朝トルコに適用されている。かれらは黒海沿岸までは侵攻していないから、ルーシの年代記記者は余所からその情報を得たことになる。ミュラのニコラオスの聖遺物をバりに遷移した記念日がビザンツには存在しないのにロシアには残っていることから、この話と同時期にムスリム (ハガルの民) であるセルジューク朝トルコの情報が入ったのだとチェキンは推察している。前注 472 に指摘したように、「トルクメン」と「ポロヴェツ」がともにイシュマエルの子であり、近縁であるという知識をルーシの年代記記者が持っていたことから、ポロヴェツ族に対する「ハガルの民」のラベリングが行われた [Chekin 1992: pp. 17-19]。

474) 「コンチャク」(Кончак) は、北ドネツ川中流域に展開していたポロヴェツ部族の首長。『イパーチイ年代記 (6): 287頁, 注 614] 参照。

待っていた。ポロヴェツ人が和平の交渉に来るのを待っていたのである。しかし、戦争をしようとしているとの報告があった。

その時、ペレヤスラヴリ⁴⁷⁵⁾から使者が急ぎやって来た。ポロヴェツ人が城市〔ペレヤスラヴリ〕を包囲して戦っているというのである。ルーシの諸公はこれを聞くと、出陣してスーラ川を越え、ルコムリ⁴⁷⁶⁾ (Лукомль) の城砦付近で陣を張った。ポロヴェツ人は〔そのことについて〕報告を受けると、自分たちが来た道を再び速駆けして引き返して行った。諸公もまたそれぞれ帰郷した。

この年、オレーグ・スヴァトスラヴィチ [C431] が逝去した。1月16日⁴⁷⁷⁾のことだった。〔遺体は〕聖ミハイル教会⁴⁷⁸⁾に安置された。その後、かれの弟イーゴリ [C432] がノヴゴロド・セヴェルスキイの〔公座に〕就いた⁴⁷⁹⁾。ヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ [C412] は、チェルニゴフの〔公座に〕就いた。

ヤロスラフ [C412] は、自分の娘を、ペレヤスラヴリのウラジーミル・グレーボヴィチ⁴⁸⁰⁾ [D1782] に嫁がせた。11月8日⁴⁸¹⁾のことだった⁴⁸²⁾。

この年、ディミトリオスの日⁴⁸³⁾の前日に、大フセヴォロド公 [D177:K] に4番目の娘が生まれ、洗礼名をペラゲア (Полагья) と名付けられた。公女としての名はスプイスラヴァ (Сбыслава) だっ

475) 当時は、ウラジーミル・グレーボヴィチ [D1782] が公座に就いていた (下注 480 参照)。

476) 「ルコムリ」(Лукомль) はスーラ川中流右岸にルーシ側が建設した城砦。ドニエプル川左岸支流のスーラ川はペレヤスラヴリ公領とポロヴェツ共住地の境界のような役割をはたしており、この城砦はルーシ諸公にとってポロヴェツ人との戦いにおいて前線基地に相当していた。

477) 1180年1月6日に相当する。

478) 本年代記の6682(1174)年の記事に「スヴァトスラフ [C411:G] はチェルニゴフの公の館に聖ミハイルの石造りの教会を定礎した」とあり (上注 147)、この聖堂に埋葬された可能性がもっとも高い。

479) それまで公座をもっていたブチーヴリから、より城市としての格の高いノヴゴロド=セヴェルスキイへと移ったということ。

480) ウラジーミル [D1782] は、1157年頃の生まれ (上注 10) と推定されるので、当時はおよそ22歳だった。かれは、1169年のおよそ12歳の頃から、父グレーブ [D178] の拠点城市だったペレヤスラヴリを継承して、公支配を続けていた。

481) 1179年の11月8日に相当する。前の記事に比べると時系列の混乱がある。

482) この結婚は、のちに明らかになる、スヴァトスラフ [C411:G] が目指した〈オレーグ一族〉による「ルーシの統一支配」(下注 503 参照) の構想の中で、スヴァトスラフの主導によって成立したものだろう。

483) 「ディミトリオスの日」(Дмитров день) はテッサロニキの殉教聖人ディミトリオス (ロシア語でドミートリイ) の記念日で10月26日に相当する。そこから、フセヴォロド公の娘の誕生は、1179年10月25日になる。

た。洗礼を受けたのは伯叔母のオリガ⁴⁸⁴ だった。

6688 [1180] 年

スヴァトスラフ [C411:G] はリューベチ (Любеч) へ行き、自分の兄弟たち、すなわち [チェルニゴフ公の] ヤロスラフ [C412], イーゴリ⁴⁸⁵ [C432], フセヴォロド⁴⁸⁶ [C433] を自分のところに呼び寄せて、かれらは約定を結んだ⁴⁸⁷。

[そのとき] ここ、キエフでは大いなる悪が起こった⁴⁸⁸。すなわち、[キエフの] 丘にある館や教会堂が**[614]**焼けたのである。大いなる府主教座の聖ソフィア教会も焼失してしまった。

この年、スヴァトスラフ [C411:G] は、自分の息子グレーブ⁴⁸⁹ [G3] を、リャザンの領地のコロムナ (Коломна) へと派遣した⁴⁹⁰。これは、リャザンの諸公と自分の娘婿⁴⁹¹ であるロマン [H2] を支援するためであった。[そのとき、かれらが] フセヴォロド [D177:K] と抗争をしていたか

484) この、フセヴォロド [D177:K] の姉妹のオリガ (Олга) について本年代記では一貫して注意が払われている。かの女は、1150 年には、ガーリチ公ヤロスラフ [A1211] に嫁ぎ [イパーチイ年代記 (4) : 333 頁, 注 62], 1171 年の政争で息子を連れて夫のヤロスラフから離れ、一時はポーランドに亡命した (上注 69, 152), その後、夫のもとを離れて、実家であるヴラジミル [クリャジマ河畔の] のフセヴォロド公 [D177:K] のもとに身を寄せた (上注 82)。さらに、本年代記 6689(1181) 年の項の冒頭には、かの女の死亡についての記事が記されている。

485) イーゴリ・スヴァトスラヴィチ [C432] は、ノヴゴロド=セヴェルスキイ公だった (上注 479)。

486) フセヴォロド・スヴァトスラヴィチ [C433] は、クルスク (Курск) の公座に就いていた。

487) リューベチは、1097 年にルーシの統一のための諸公会議が行われた歴史的な場所であり、スヴァトスラフ [C411:G] がこの地に、オレーグ一族諸公を召集したのは、地理的に集合しやすい場所だったこともあるが、同時に、モノマフ一族諸公に対抗して、オレーグ一族の結束を固めるための象徴的な意味もあったのではないかと。下注 494 参照。

488) このキエフの大火は通常の火災のひとつと考えられるが、ここでは、あたかもキエフの公座にあったスヴァトスラフ [C411:G] の「高慢な思慮」(下注 504) からくる行為 (リューベチでの協議と約定) に対する神罰として、火災 (大いなる悪) が引き起こされたような書き方がなされている。

489) グレーブ・フセヴォロドヴィチ [G3] についてはここが初出。

490) 「コロムナ」(Коломна) はモスクワ川がオカ川に流れ込む河口近くにある城市。ここが「リャザンの領地」というのは『ラヴレンチイ年代記』6688(1180) 年の記事によれば、ロマン [H2] の側についていた兄弟のフセヴォロド [H5] とウラジーミル [H4] が、コロムナに支配地として拠点を構えていたことによる (次注 492 参照)。

491) ロマン [H2] がスヴァトスラフ [C411:G] の娘婿 (зять) であること、すなわちスヴァトスラフの娘と結婚していたことについては、上注 425 参照。

らである⁴⁹²⁾。

フセヴォロド [D177:K] は、スヴァトスラフ [C411:G] が娘婿〔ロマン [H2]〕を支援するために息子〔グレーブ〕を派遣したことを聞いて、かれ〔グレーブ〕を自分のもとに召喚した。グレーブ・スヴァトスラヴィチ [G3] は行くことを望まなかったが、否応なくかれ〔フセヴォロド〕のもとに出向いて行った。なぜならば、かれ〔グレーブ〕は、かれ〔フセヴォロド〕の手中にあって〔逃れられない状態だった〕からである。かれ〔フセヴォロド〕は、かれ〔グレーブ〕を捕らえて、鎖を掛けて、自分の領地のヴラジミルへとかれを連行させた。かれには、衛兵がつけられた。かれ〔グレーブ〕の周辺にいた従士たちも同様に捕らえられた⁴⁹³⁾。

スヴァトスラフ [C411:G] はこのことを聞くと、大いに憤慨して、怒りを発し、自らの〔浅〕智恵で思慮して言った。「わしは、フセヴォロド [D177:K] に復讐したいが、それはできない。だが、ロスチスラフ一族がいる。あの者たちは、わしに対して、ルーシの地であらゆる忌まわしいことをなしている。ウラジーミル〔・モノマフ〕 [D1] の一族の者の中で、〔わしの〕近くにいる者が、〔復讐の相手としては〕最適である⁴⁹⁴⁾」。

492) このリャザン地方のグレーブ [C542:H] の息子たちの内争を利用した、スヴァトスラフ [C411:G] とフセヴォロド [D177:K] との「代理戦争」については、『ラヴレンチイ年代記』6688(1180)年の記事に次のようにやや詳しく記されている。

コロムナと周辺地の支配公だったフセヴォロド [H5] とウラジーミル [H4] が、フセヴォロド [D177:K] に〈父〉としての忠誠を誓って、兄ロマン [H2] による領地の没収（ロマンはキエフ公で舅のスヴァトスラフ [C411:G] の後ろ盾を得ていた）から、守ってくれるよう要請した。フセヴォロドは、たちまち遠征軍を組織して、ヴラジミルからコロムナに到着し、スヴァトスラフの息子グレーブ [G3] を捕縛した（次注 493 参照）のちに、進軍して、城市ポリソヴォ＝グレーボヴォを占領した。さらに、リャザンの城市に接近すると、この軍勢にかなわないと見たリャザンのロマン [H2] とイーゴリ [H3] は、フセヴォロドの条件を全面的にのんで和議を結んだ。フセヴォロドは、リャザン地方の兄弟諸公に対して、「それぞれ年長の度合いに応じて」（по старъишиньству）領地を分配し、自らはヴラジミルへ帰還した。

493) 『ラヴレンチイ年代記』6688(1180)年の記事では、このグレーブ [G3] 逮捕とヴラジミルへの連行については、「コロムナで、フセヴォロド公 [D177:K] は、グレーブ・スヴァトスラヴィチ [G3] を捕らえ、かれをヴラジミル〔クリャジマ河畔の〕へ〔捕虜として〕送った」〔ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 387〕と簡単に記している。

494) このフセヴォロド [C411:G] の言葉の意味は、ヴラジミル地方のフセヴォロド [D177:K] に対しては、遠隔であり介入できないが、キエフの「近くにいる」（ヴィシエゴロド、ベルゴロド、スモレンスク）「ロスチスラフ一族」に対してなら、自分の「復讐」をなし遂げることができる、ということ。この言葉から、フセヴォロドは、自分のキエフ地方での覇権確立の戦いを、モノマフ一族に対するオレーグ一族の優越を狙った戦いと位置づけていることがわかる。

この時、ダヴィド・ロスチスラヴィチ⁴⁹⁵⁾ [J3] はドニエプル川を船で進んで、釣り〔狩猟?〕をしていた。スヴァトスラフ [C411:G] はチェルニゴフの側の〔河岸を船で〕進んでいた。ダヴィド [J3] に対抗するように釣りをしていた⁴⁹⁶⁾。そのときは、スヴァトスラフ [C411:G] は、自分の妃⁴⁹⁷⁾ および寵臣のコチカリ⁴⁹⁸⁾ (Кочкаръ) と相談して〔ダヴィド捕縛について〕決めたが、その決定を自分の重臣たちには伝えなかった。【615】

スヴァトスラフ [C411:G] は、自分の息子グレーブ [G3] が〔捕らえられていることを恨んで〕、すぐに戦いを決意した。怒りを堪えることができなかったのであり⁴⁹⁹⁾、これは、十字架〔接吻の誓い〕への違反であった⁵⁰⁰⁾。

かれ〔スヴァトスラフ [C411:G]〕はドニエプル川を〔左岸から右岸へ〕渡った。かれは、自分の智恵で次のように思慮していた。「わしはダヴィド [J3] を捕まえよう。リューリク⁵⁰¹⁾ [J2] はかの地から追放しよう。そして、兄弟たちとともに⁵⁰²⁾ ルーシの統一支配を手にしよう⁵⁰³⁾。そのあとで、フセヴォロド [D177:K] に対して、自分の屈辱を晴らそう」。神は〔このような〕われらの高慢な思慮⁵⁰⁴⁾ を好まず、驕れる者を懲らしめておとなしくさせるものである。

495) この頃、ダヴィド [J3] はヴィシエゴロドを拠点城市としていた。以下のスヴァトスラフによる襲撃事件も、ダヴィドがヴィシエゴロドの郊外の河岸で狩りをしていたときに起こったのだろう。

496) スヴァトスラフは、ダヴィドを捕縛することを狙っており、その機をうかがっていたのである。

497) スヴァトスラフ [C411:G] の妃 (княгиня) は、ポロツクのヴァシリコ [L22] の娘で、1143 年に結婚している。〔イパーチイ年代記 (2) : 329 頁, 注 244〕。その意味では、スヴァトスラフの対「ロスチスラフ一族」の戦いの背景には、ポロツク公の勢力が「ロスチスラフ一族」の支配 (影響力) から逃れようとする動きも働いていたと考えられる。

498) 「コチカリ」 (Кочкаръ) は、寵臣 (милостьник) と言われているように、スヴァトスラフ [C411:G] に常に側仕えしていた貴族である [Энциклопедия СПИ-3: С. 96-97]。ここでは、かれと公妃は、スヴァトスラフの上級の家臣である「重臣たち (мижи свои лѣпшии) と区別されており、グレーブ [J3] への攻撃は、この二人の悪しき忠告による陰謀によるものだったような書き方がされている。

499) 息子のグレーブ [G3] がフセヴォロド [D177:K] に捕らえられた件について、モノマフ一族に対して復讐をせずにはおられないという「怒り」のこと (上注 494 参照)。

500) ここで言う十字架接吻の誓いは、おそらく、ロスチスラフ息子たちが、スヴァトスラフ [C411:G] にキエフの公座を引き渡したときに行われた和議の時の誓約 (上注 414 参照) を指しているのだろう。

501) この頃、リューリク [J2] は、キエフに近いベルゴロドに公座を持っており、「かの地」 (земля) とは、ベルゴロド及びその周辺のリューリクの領地を指している (下注 513 参照)。ベルゴロドは 1162 年の時点で父公ロスチスラフ [D116:J] によってムスチスラフ [J5] に与えられて以来、一貫して「ロスチスラフ一族」の拠点城市となっていた。

502) 〈オレーグ一族〉諸公、すなわち、ヤロスラフ [C412] や甥のイーゴリ [C432]、フセヴォロド [C433] などを指している。上注 487 参照。

503) この「ルーシの統一支配」 (един власть Руская) とは、キエフの公座とその周辺城市、チェルニゴフ公領、ベレヤスラヴリ公領の支配権を、オレーグ一族の親族および姻族で固めることを指している。

504) 「ロスチスラフ一族」の立場に近い年代記記者は、スヴァトスラフ [C411:G] の行為を「高慢な思慮」 (высокая мысль) によるものとして否定的に評価しており、この性格付けは以下にも繰り返されている。

スヴァトスラフ [C411:G] は、ダヴィド [J3] の天幕にたちまち一撃を仕掛けた。ダヴィド [J3] は何も知らず、自分が誰かから攻撃を受けるなど考えてもいなかった。なぜなら、かれ〔スヴァトスラフ [C411:G]〕とは尊い十字〔接吻の誓い〕によって〔攻撃しないことが〕約束されていたからだった⁵⁰⁵⁾。

そのことを信じていたかれ〔ダヴィド [J3]〕は、かれ〔スヴァトスラフ [C411:G]〕の手から脱出すると、自分の妃を連れて小舟へと逃れた。かれら〔スヴァトスラフの手勢〕は、〔ドニエプル川の〕高い岸辺まで追いかけて、かれ〔ダヴィド [J3]〕をめぐめて矢を射かけた。神はかれ〔ダヴィド〕が危害を受けまいよう護った。

スヴァトスラフ [C411:G] は、かれ〔ダヴィド〕の従士たちを捕え、かれが残した天幕〔の物資〕を捕獲した。そして〔キエフへと〕戻ると、ヴィシエゴロド⁵⁰⁶⁾へと向かった。こうして、スヴァトスラフ [C411:G] は、〔高慢な〕思慮という罪を犯すことになった。かれは、ヴィシエゴロド郊外で一夜を明かし、翌日にダヴィド [J3] を捜して、かれのもとへと出発したが、いかなる行路においてもかれを見つけることはできなかった。

かれ〔スヴァトスラフ〕は、立ち上がり、ドニエプル川を〔右岸から左岸へと〕渡って、こう言った。「われらのことは、すでにロスチスラフ一族たちに知られてしまった。わしはもはや、キエフに身を置くことはできない⁵⁰⁷⁾」。

こうして、かれ〔スヴァトスラフ〕はチェルニゴフへ、兄弟たち⁵⁰⁸⁾のところへやって来た。そして、自分の息子たちと年少の兄弟たち⁵⁰⁹⁾をみな呼び寄せた。そして、チェルニゴフの全地方の〔市民兵〕と自分の従士たちを集合させた。そして、かれらと評議して、言った。「われらはどこへ向かって出陣**[616]**すべきか。スモレンスクへか、キエフへか⁵¹⁰⁾」。イーゴリ [C432]

505) 上注 500 参照。

506) ヴィシエゴロドはダヴィド [J3] の拠点城市であり、襲撃を受けたダヴィドが、ここに逃げ込んだと考えたのである。実際にはダヴィドはリューリク [J2] が拠点を構えるベルゴロドに逃げていた（下注 513 参照）。

507) スヴァトスラフ [C411:G] は、策謀による不意打ちで、ダヴィド [J3] とリューリク [J2] をルーシの地から排除しようとしたが失敗した。約定を破った以上、かれらがキエフに反撃を仕掛けてくるのは確実であり、公然と「ロスチスラフ一族」と対立した場合、単独では軍事的な優位もキエフ市民の支持も得られないと判断したのである。

508) チェルニゴフでは、スヴァトスラフ [C411:G] の弟のヤロスラフ [C412] が公座に就いていた。

509) 前注の実弟ヤロスラフ [C412] の他に、ノヴゴロド＝セヴェルスキイ公イーゴリ [C432]、クルスク公フセヴォロド [C433] を指している。

510) スモレンスクはロマン [J1] が公座を置いている「ロスチスラフ一族」の拠点城市、キエフは次の記述にあるように、リューリク [J2] がまもなく公座に就いた。この会話は、チェルニゴフ諸公（オレーグ一族）を糾合して、すぐに「ロスチスラフ一族」を討伐しようとしている、スヴァトスラフ [C411:G] のあせりを表現している。

は、かれ〔スヴァトスラフ〕に言った。「父よ⁵¹¹⁾、静かであることが良いでしょう⁵¹²⁾。しかし、すでにそれが適わないのなら、あなたが成功するよう神がとりはからってくれるでしょう」。

さて、ダヴィド [J3] は、ベルゴロドの兄弟⁵¹³⁾〔リューリク [J2]〕のもとへと逃げて行った。リューリク [J2] は、スヴァトスラフ [C411:G] がドニエプル川を渡っ〔てチェルニゴフへ逃げた〕ことを聞くと、キエフに入城した。日曜日のことだった⁵¹⁴⁾。そして、自分の祖父と自分の父の公座に座した。

そしてかれ〔リューリク [J2]〕は、自分の二人の兄弟であるフセヴォロド・ヤロスラフヴィチ⁵¹⁵⁾ [I23] とイングヴァル・ヤロスラヴィチ⁵¹⁶⁾ [I22] を呼び寄せるために使者を派遣して、かれら二人を自分のもとに連れてきた⁵¹⁷⁾。また、ガーリチ公ヤロスラフ [A1211] からの援軍と

511) この呼びかけについては、下注 528 を参照。

512) キエフに向かうにせよ、スモレンスクに向かうにせよ、すぐに「ロスチスラフ一族」討伐の遠征を組織することは軍事的に無理だという判断からの発言だろう。これ以降の事態の推移を見ると、イーゴリ [C432] のこの意見は容れられ、スヴァトスラフ [C411:G] は直接的な討伐遠征はあきらめたようである。

513) ベルゴロドの公座にリューリク [J2] が就いていたことについては上注 501 を参照。

514) 具体的な日付は不明だが、およそ 1180 年夏～秋の時期である (下注 523 参照)。

515) フセヴォロド・ヤロスラヴィチ [I23] については、6675(1167)年の項に、この年、父ヤロスラフ [I2] が、フセヴォロドを、トゥーロフ公ユーリイ [B321] の娘と結婚させたという記事がある [イパーチイ年代記 (6): 253 頁, 注 378]。かれは、1173 年に父ヤロスラフ [I2] がキエフの公位に就き、翌年にはルチェスクに退去した時期も、父の拠点城市ルチェスクの公座にとどまり、その後は兄弟のイングヴァル (次注) とともにルチェスクで公支配を行っていたと考えられる。本記事には、父親のヤロスラフ [I2] についての言及がないことから、ヤロスラフ自身はすでに没していた可能性が高い。

516) イングヴァル [I22] については、この個所が初出。兄弟のフセヴォロド [I23] (前注) とともに、ルチェスクに座していたのだろう。

517) 二人の公の父ヤロスラフ [I2] は、「ロスチスラフ一族」諸公にとっては「最年長」の従兄弟にあたり、1173 年 11 月にヤロスラフ [I2] がキエフの公座に就いたときは、リューリク [J2] を初めとする「ロスチスラフ一族」の全面的な支援を受けていた (上注 210 参照)。このたびの、〈オレーグ一族〉に対抗するための援軍としての二人の召集も、そのような親族関係に基づいて行われたものである。この時点でかれらの父親のヤロスラフ [I2] がすでに没していたとすれば (上注 515)、かれらにとってこの召集は、一族の「年長者」(リューリク [J2]) による命令ということになる。

して、トゥドル・エルチチ⁵¹⁸⁾ (Тудор Гальчич) も〔連れて来た〕⁵¹⁹⁾。

かれ〔リューリク [J2]〕は、ダヴィド [J3] をスモレンスクにいる自分の兄弟ロマン [J1] のもとに、援軍として派遣した。ところが、スコフシン⁵²⁰⁾ (Сковьшин) の松林まで来たところで、〔ダヴィド〕のもとに「あなたの兄ロマン [J1] が神に召された⁵²¹⁾」という報告が届いた。かれ〔ダヴィド〕はこれを聞いてひどく悲しんで泣き、急ぎスモレンスクへと向かった。〔スモレンスクでは〕主教コンスタンチン (Костянтинъ) が十字架を手にかれを迎えた。典院、司祭、全てのスモレンスク人も〔かれを迎えた〕。ダヴィド [J3] は、聖母教会⁵²²⁾ に入り、自分の祖父と自分の父の公座に座した。

ロスチスラフ [D116:J] の息子、ムスチスラフ [D11] 大公の孫であるロマン [J1] が逝去した⁵²³⁾。その遺体は、神を讃美する聖歌が歌われ、芳香の香が焚かれるなかで、主教コンスタンチンとすべての典院たちの手で布で巻かれた。その遺体は聖母教会に安置された。すべてのスモレンスク人は、かれが自分たちに親切であったこと思い出して、かれを悼んで泣いた。かれの息子たちは誰よりも激しく泣き、その顔を涙で濡らしていた。そして、自分の親のための最後の奉神礼【617】が執り行われ、かれの遺体が布で巻かれ、棺に納められた。公妃は棺の前に立って、

518) 「トゥドル・エルチチ」は、イパーチイ写本では Гальчич、フレーブニコフ写本では Гелчич の綴りになっているが、これは、本年代記 6668(1160) 年の記事の、スヴァトスラフ [C43] とイジャスラフ [C35] の抗争のときに、前者に荷担したロスチスラフ [D116:J] の援軍要請に応じて、ガーリチから駆けつけた軍司令官 Тудор Елчич と同一人物である（〔イパーチイ年代記 (6) : 216 頁, 注 158〕参照）。このときもかれは、ガーリチ公ヤロスラフ・ウラジミルコヴィチ八智公 [A1211] に勤務していたが、20 年を経た、本記事の時点でも勤務を続けていたことがわかる。

519) ガーリチのヤロスラフ八智公 [A1211] は、自分に反抗している息子ウラジミルコ [A12111] の岳父で庇護者であるスヴァトスラフ [C411:G] の討伐のために、リューリク [J2] の援軍要請に応じたと考えられる。（上注 153）参照。このような、ヤロスラフ八智公と「ロスチスラフ一族」諸公の同盟関係は、すでに 1174 年の時点でも認めることができる（上注 192）。

520) 「スコフシン」(Сковьшин) は、キエフからスモレンスクに向かう街道にあった松林 (бор) の名称だが、場所については不明。

521) ロマン [J1] の死については、下注 523 参照。

522) 「聖母教会」(церковь Святыя Богородица) は、1101 年にウラジーミル・モノマフ [D1] によって創建されたスモレンスクの主教座教会で、聖母就寝 (Успение) に奉献されている（〔イパーチイ年代記 (6) : 290 頁, 注 633〕も参照）。本記事に続く、死去したロマン [J1] への讃詞にあるように、かれはこの教会に埋葬された。

523) スモレンスク公ロマン [J1] の死亡の具体的な日付は、史料からは知ることはできないが、スヴァトスラフ [C411:G] がチェルニゴフへの逃走して、リューリク [J2] のキエフ入城した直後のことだったことは、直前の記述からわかる。また、弟のムスチスラフが死亡した時 (1180 年 6 月 13/14 日) にロマンが存命だったことはほぼ確実であり、また、ロマンの死が切っ掛けとなったと推定される、スヴァトスラフ [C411:G] によるフセヴォロドへの攻撃が 1180/1181 年冬に行われていることから（下注 529）、1180 年夏～秋の時期に、ロマンは死去したと推定することができる。[Dąbrowski 2008: S 402-403] 参照。

ひっきりなしに泣き、次のように叫んでいた。「わたしの至福で慎ましく温順な、正義の王よ、あなたはまさに正しくロマンという名を得ていたのです。かれはあらゆる徳が相応しいのですから⁵²⁴⁾。あなたは、スモレンスク人から多くの誹りを受けましたが⁵²⁵⁾、あなたがかれらの悪意に対して怒りを示したところも、悪をもって報復しようとしたところも、わたしは見たことはありません。あなたは、すべての事を、神に委ねていたのです」。

この篤信の公ロマン [J1] は背が高く、肩幅が広く、容貌は美しく、あらゆる徳をそなえていた。温順で慎ましく、悪意を持たず義に篤く、万人を愛し、自分の兄弟たちにも真の偽らざる親愛を抱き、神への畏れに満たされ、乞食たちを慈しみ、修道院の世話をしていた。かれは、石造りの聖ヨハネ教会⁵²⁶⁾を建立し、これを教会のあらゆる装飾を施し、黄金の聖像画(イコン)や琺瑯〔の聖具〕で飾り、自分の親族たちの記念の儀式を行い、なによりも罪の赦しを求めて、自分の魂の救いのために〔祈った〕。かれは、自分の祖父と自分の父に倣って、生きとし生ける誰も免れることができない共通の負債を返還したのだった⁵²⁷⁾。

〔キエフの〕リユーリク [J2] のもとにも、ロマン [J1] の死の報が届いた。かれは **[618]** 悲しみ、あたかも父親に対するようにかれを悼んで泣いた。なぜなら、〔ロマンは〕年長者だったからである。

スヴァトスラフ [C411:G] は、自分の兄弟たち、ポロヴェツ人たちとともに〔軍勢を〕集合させた。スヴァトスラフ [C411:G] は、自分の兄弟たちに言った。「見よ、わしはヤロスラフ [C412] よりも年長である。そして、イーゴリ [C432] よ、そなたはフセヴォロド [C433] よりも年長で

524) 「ロマン」の名にかかわるこの文言は、かれの守護聖人が「ロマン」の洗礼名を持つ聖ボリス公 [14] であったことによって解釈できるかもしれない。ちなみにロマン [J1] の兄弟ダヴィド [J3] の洗礼名は「グレーブ」と推定されており、ロマン [J1] とダヴィド [J3] は、一族のとしての君公聖人ボリス公 [14] とグレーブ公 [15] に倣って名を受けていると考えられる。[Литвина, Успенский 2006: С. 529-530, 598] を参照。

525) 「スモレンスク人から多くの誹りを受けた」(многия досады прия от смолнян) ことについては、たとえば、1175年にモレンスク人がロマンの息子ヤロ波尔ク [J11] をスモレンスクから追放して、ムスチスラフ [J5] を公として受け入れたこと(上注 351)などを指しているのだろう。

526) 「石造りの聖ヨハネ教会」(церковь камена святого Иоана) は、1173年に創建されたスモレンスクのヴァリャジキにあった神学者ヨハネ教会を指している。

527) この、ロマン [J1] の死に際しての年代記記者の讃詞には、やはりムスチスラフ [J5]、スヴァトスラフ [J4] への讃詞と同様の文言を見ることができる。「キエフ集成」の最終的な編纂時にキエフ公であったリユーリク [J2] の周辺にいた年代記記者の手になるもので、「ロスチスラフ一族」諸公を称揚する目的で書かれていると考えられるだろう(上注 457, 458 参照)。

ある。今は、わしはそなたたちにとって父にあたる者である⁵²⁸⁾。イーゴリ [C432] よ、わしはそなたに命じる。ヤロ斯拉フ [C412] とともにここに残って、チェルニゴフと自分のすべての領地の守りにあたれ。わしは、フセヴォロド [C433] とともにスーズダリへ向けて進軍し、自分の息子グレーブ [G3] を捜し出そう。わしとフセヴォロド [D177:K] とのことは、神が裁きを下すであろう」⁵²⁹⁾。

こうして、〔スヴァトスラフ [C411:G]〕は兄弟たちとふた手に別れて、自分はスーズダリに向けて進軍した。かれは、ヤロボルク・ロスチスラヴィチ⁵³⁰⁾ [D1712] を引き連れて行った。かれはまた、ポロヴェツ人〔の軍〕を二つに分け、半分は自分が引き連れて行き、半分は〔チェルニゴフに残留する〕兄弟たちのもとに残した。

スヴァトスラフ [C411:G] は行軍して、道中で息子のウラジーミル⁵³¹⁾ [G2] とすべてのノヴゴロド人の部隊と合流した⁵³²⁾。なぜなら、かれの息子のウラジーミル [G2] は、大ノヴゴロドで公として支配していたからである。そして、かれ〔スヴァトスラフ [C411:G]〕はスーズダリ

528) このスヴァトスラフ [C411:G] の発言にある年長序列の確認と、自分がオレーグ一族の「兄弟たち」の中で最年長であり「父にあたる者」であるという認定は、スヴァトスラフの、ルーシの地統一支配の戦略にとって重要な思想的基盤だった。

529) スヴァトスラフ [C411:G] のスーズダリ遠征については、『ノヴゴロド第一年代記』6688(1180)年の項に「その年の冬、オレーグ [C4] の孫のスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] は、軍を率いてルーシからスーズダリのフセヴォロド [D177:K] を討つべく進軍した」[НПЛ: С. 36, 225] とあり、1180/1181年冬に行われたことがわかる。

530) フセヴォロド [D177:K] に土牢に幽閉されていたヤロボルク [D1712] は、1177年に眼を潰されて解放され(上注430)、一旦はスモレンスクへ行くが、1177/1178年冬にノヴゴロドに招かれてトルジョクの公座に就き、1178年に兄弟のムスチスラフ [D1711] が没すると、跡を襲ってノヴゴロド公となった。しかし、まもなく、フセヴォロド [D177:K] の攻撃を受けて公座を追われる(以上『ノヴゴロド第一年代記』6685(1177)～6686(1178)年の項)。その後の消息について年代記に記録はないが、1173年～1176年の間にも庇護を受けていた(上注321)スヴァトスラフ [C411:G] の庇護を求めて、チェルニゴフに亡命したと考えられる。そしてこの度、仇敵であるフセヴォロド [D177:K] を討伐する遠征に参加したのである。

531) この頃のウラジーミル [G2] の行動については、本年代記では、1179年末に新妻とともにチェルニゴフへ行ったという記事があるだけだが(上注465)、『ノヴゴロド第一年代記』6688(1180)年の記事によれば、1180年6月にノヴゴロド公ムスチスラフ [J5] が没したのち、ノヴゴロド人の招聘によって、8月17日にウラジーミル [G2] はノヴゴロドの公座についている[НПЛ: С. 36, 226]。

532) この合流地点について『ノヴゴロド第一年代記』には具体的な記載があり、「ヴォルガ川のトヴェリ川河口で合流した」(съясася на Волзѣ усть Тфѣри)としている[НПЛ: С. 36, 226]。つまり、スヴァトスラフ [C411:G] = ヤロボルク [D1712] 軍はチェルニゴフからデスナ川を遡り、スモレンスク経由でヴォルガ川上流に入り、ノヴゴロドからのウラジーミル [G2] 軍は、トルジョク経由でトヴェルツァ川を遡ったことになる。

の地へと進入した⁵³³⁾。

これに対抗して、フセヴォロド [D177:K] は、すべてのスーズダリ人、リャザン人、ムーロム人の部隊を率いて、〔スーズダリから〕出陣し、ヴレナ⁵³⁴⁾ (Влена) 川の河岸でかれ〔スヴァトスラフ [C411:G]〕と遭遇した。両軍はヴレナ川の両岸に陣を張り、この川を挟んで2週間戦った。なぜなら、この川の流れは激しく、岸は険しかったからである。【619】スーズダリ人は丘の上、谷間、切り通しなどに布陣していたため、スヴァトスラフ [C411:G] の部隊がこれに近づくことはできなかった。

フセヴォロド [D177:K] の従士たちは、スヴァトスラフ [C411:G] を討つべく馬を進めようとした。しかし、この心が義しいフセヴォロド [D177:K] は、流血を望まず、自分は、かれ〔スヴァトスラフ〕への討伐には向かわなかった。

フセヴォロド [D177:K] はリャザンの諸公を派遣した。かれらは、スヴァトスラフ [C411:G] 陣営の天幕に襲撃を仕掛け、ある者は踏みにじり、ある者は捕らえて捕虜とし、また別の者は斬り殺した。こうして、〔リャザンの諸公は〕たちまちスヴァトスラフ [C411:G] の遠征隊を撃ち破った。

フセヴォロド・スヴァトスラヴィチ⁵³⁵⁾ [G4] は、自分の部隊を率いて、速やかにルーシの部隊とのところに追いついた。そのため、リャザンの諸公は逃げ出した。他の者は捕虜となったり、撃ち殺されたりした。イヴォル・ミロスラヴィチ⁵³⁶⁾ (Ивор Мирославич) は捕らえられた。

スヴァトスラフ [C411:G] は、フセヴォロド [D177:K] のもとに自分の司祭を派遣して、こう

533) 本年代記には、スヴァトスラフ [C411:G] 勢のトヴェーリでの合流からヴレナ川の対峙までの軍事行動について書かれていないが、『ノヴゴロド第一年代記』では「〔スヴァトスラフ勢は〕ヴォルガ川全域を荒廃させ、すべての城市を焼いた」(положиша всю Волгу пусту и города и все пожгоша) [НПЛ: С. 36, 226] と記されている。

534) 「ヴレナ川」(Влена) は、ヴォルガ川右岸支流のドゥブナ川(Дубна)の支流で現在のヴェリャ川(Веля)に同定されている。その河口はトヴェーリから東に約70km、ペレヤスラヴリ(ペレスラヴリ=ザレスキイ)からだど西に約50km離れており、両者のほぼ中程に位置している。なお、『ノヴゴロド第一年代記』の記事には、「ペレヤスラヴリから40露里(ヴェルスタ)離れた、ヴレナ川で」と記されている [НПЛ: С. 36, 226]。

535) このフセヴォロド [G4] は1179年頃にポーランドのカジミェシュ二世の娘と結婚した記事が見える(上注462)。フセヴォロドはなんらかの事情で、父親フセヴォロド [C411:G] の遠征隊の本隊には加わらず、少し遅れて強兵を率いて遠征に参加して、ヴレナ川の戦場で合流したのだろう。

536) 「イヴォル・ミロスラヴィチ」は、リャザン諸公(もしくはフセヴォロド [D177:K]) 配下の軍司令官(貴族)。

言った⁵³⁷⁾。「兄弟にして息子よ⁵³⁸⁾、わしはそなたに多くの善きことをなしてきた。わしは、そなたからいかなる見返りも望まなかった。ところがそなたは、わしに対して悪しきことを企み、わしの息子〔グレーブ[G3]〕を捕らえて捕虜とした⁵³⁹⁾。そなたが探しているわしは近くにいるぞ。この川〔ヴレナ川〕から〔軍を〕遠ざけよ。そしてわしに道を譲れ。わしが川を渡ってそなたの近に行けるように。そこで、われらのことは神の裁きに委ねようではないか。そなたが、道を譲らないのなら、わしのほうが〔道を〕譲ろう。そなたはこちら側に来るがよい、ここで神の裁きに委ねようではないか⁵⁴⁰⁾」。

フセヴォロド[D177:K]は、この使者を捕まえると、ヴラジミルへと連行するように命じた。こうして、スヴァトスラフ[C411:G]に対して返事をしなかった。

スヴァトスラフ[C411:G]は、何日も〔返事を〕待っていたが、暖かい天候になることを恐れて⁵⁴¹⁾、急いで【620】出発して〔撤退した〕。

フセヴォロド[D177:K]は、かれ〔スヴァトスラフ〕の陣営にむけて〔軍隊を〕派遣し、多くのものを掠奪した。しかし、かれ〔スヴァトスラフ〕自身を追いかけるようには命じなかった。

スヴァトスラフ[C411:G]は、スーズダリの地から撤退する道中でドミトロフ⁵⁴²⁾(Дмитров)の城市に火をかけた。〔スヴァトスラフは〕スーズダリの地から出ると、自分の兄弟のフセヴォ

537) 複数の資料が使われているため記述が錯綜しているが、この使者は、両軍がヴレナ川を挟んで対峙していたときに、スヴァトスラフ[C411:G]が派遣したものである。

538) スヴァトスラフ[C411:G]が、自分の聴罪司祭という側近の使者を通じて、フセヴォロド[D177:K]に対して「兄弟にして息子よ」(brate и сыну)と呼びかけたことは、スヴァトスラフが、相手に対して自分を「年長者」「父にあたる者」と見なしていることを誇示している。これに対して、フセヴォロドが、使者を捕らえて留置し、返事をしなかったことは、この〈侮辱的〉な呼びかけに対する〈侮辱的〉な報復行為と解釈することができる。

539) このグレーブ[G3]逮捕については、上注493を参照。

540) このスヴァトスラフ[C411:G]の言葉は、神判による決着を促しているが、具体的には、和議(ряд, крестоцелование)を促しているのか、あるいは決闘や広い場所での会戦(поле)を促しているのか定めがたい。

541) 『ラヴレンチイ年代記』6689(1181)年の並行記事では「春の増水を恐れて」(убояся разводья)となっている[ПСРЛ T.1, 1997: Стб. 388]。つまり、春の暖気で河川の氷が融けて、行軍や掠奪品運搬のための氷上での通行ができなくなることを危惧したのである。

542) 「ドミトロフ」(Дмитровъ)は、ヴレナ川の対峙の場所から南西方向に20～30kmの場所にあり、スヴァトスラフ[C411:G]軍の撤退の途上に位置していた。この城市は、後代の『ヴォスクレセンスカヤ年代記』6662(1154)年の記事によれば、ユーリイ手長公[D17]と公妃がヤフロマ川(Яхрома)河岸に滞在していたときに、フセヴォロド[D177:K]が生まれ、その洗礼名ドミートリイにちなんで、その誕生の地に城市を建立して「ドミトロフ」(ドミートリイの町)と名付けたとしている。[ПСРЛ T.7, 2001: C. 60]

ロド [C433], 自分の息子のオレーグ⁵⁴³⁾ [G5], ヤロポルク⁵⁴⁴⁾ [D1712] をルーシへと行かせた。そして, 自分自身は息子のウラジーミル [G2] とともに, 大ノヴゴロドへ向けて出発した⁵⁴⁵⁾。

ヤロスラフ [C412] は, イーゴリ [C432] と協議をして, とともにドルツク (Дръютъск) へと進軍した⁵⁴⁶⁾。かれらは, ポロヴェツ人を引き連れて行った。他方, イーゴリ [C432] の弟フセヴォロド [C433] はチェルニゴフに残して行った。オレーグ・スヴァトスラヴィチ [G5] も [同じくチェルニゴフに残された]。

ポロツクの諸公は, 援軍として到来するスヴァトスラフ [C411:G] を出迎えるために, やって来た⁵⁴⁷⁾。それは, 二人のヴァシリコ [L22] の息子たちだった⁵⁴⁸⁾。すなわち, ヴィテプスクのブリャチスラフ [L222] とその兄弟フセスラフ⁵⁴⁹⁾ [L221] がポロツク人を率いていた。また,

543) スヴァトスラフ [C411:G] の息子オレーグ [G5] が, スーズダリへのフセヴォロド討伐遠征に参加したことについては, この部分が初めての言及だが, 当時, かれはチェルニゴフ公領の最北東の辺地ロパスナ (Лопасна) に領地を与えられていたことから (上注 389), 遠征の途中から合流した可能性がある。

544) ヤロポルク [D1712] については, 『ノヴゴロド第一年代記』 6688(1180) 年の記事では, 遠征後に「[スヴァトスラフは [C411:G]] ヤロポルクをノヴィ・トルグ [トルジョク] の公座に就けた」として, やや異なった記述がなされている [НПЛ: С. 36, 226]。

545) 遠征軍の撤退の途中で, スヴァトスラフ [C411:G] が, 息子ウラジーミル [G2] が公座に就いていたノヴゴロドへ向かったことは, 『ノヴゴロド第一年代記』 6688(1180) 年の記事の最後にも記されている。

この行動は, 同年代記の翌 6689(1181) 年の記事に「この年, ノヴゴロドの人々はオレーグ [C4] の孫スヴァトスラフ [C411:G] とともにドルツクへ進軍した」とあるように, ドルツク遠征の準備のために, ノヴゴロドの市民軍を組織することが目的だった。

546) 「ドルツク」(Дръютъск; Друцк) は, ポロツク公領の南で, スモレンスク公領との境界に位置する城市。スモレンスクからだと西南西の方向に約 150km 離れており, ヴィテプスクからだとは, 南に 100km ほど下る位置にある。現在はベラルーシ, ヴィーツェプスク州の同名の村落。

当時, グレーブ・ログヴォロドヴィチ [L112] が公座に就いており (下注 554), スモレンスク公になったダヴィド [J3] が強い影響力を及ぼしていた。1181 年に行われたヤロスラフ [C421] とイーゴリ [C432] によるこの遠征は, チェルニゴフを拠点とする〈オレーグ一族〉による, スモレンスクを拠点とする「ロスチスラフ一族」に対する, ルーシの支配権をめぐる勢力争いの一環として起こされたもので, 当時, ダヴィド [J3] がポロツク諸公に対して影響力を行使する拠点であったこの城市を占領し, 支配下に入れることが目的だった。

547) 以下に名の挙がっているポロツク諸公がどこに「やって来た」か書かれていないが, ノヴゴロドからのスヴァトスラフ [C411:G] の援軍はロヴァチ川を遡ってポロツク地方へと向かうはずであり, ロヴァチ川上流域, たとえば城市ルキあたりを目指したと考えられる。

548) スヴァトスラフ [C411:G] は, このヴァシリコ [L22] の娘を妃としており (上注 497 参照), その二人の息子たちは, スヴァトスラフにとっては義理の兄弟に相当する。スヴァトスラフの援軍も, このような姻戚関係によるところが大きいだろう。

549) フセスラフ [L221] は, 当時ポロツク公だった (上注 439 参照)。

かれらとともにリープ人⁵⁵⁰⁾ (либь), リトアニア人 (литва) がいた。

ロゴジスク⁵⁵¹⁾ (Логажеск) のフセスラフ・ミクーリチ [L22411], アンドレイ・ヴォロダレヴィチ (Володышичь)[L2242], かれの甥のイジャスラフ⁵⁵²⁾ [L22412], ヴァシリコ・ブリャチスラヴィチ⁵⁵³⁾ [L2221] もいた。

かれらは全員集合すると、ドルツクは迂回して、スヴァトスラフ [C411:G] を迎えるために出発した。

他方、スモレンスクの公ダヴィド [J3] は、自分の全部隊を引き連れてドルツクに入城した。かれは、グレーブ・ログヴォロドヴィチ⁵⁵⁴⁾ [L112] と合流すると、ヤロスラフ [C412] を迎え討つべく出発した。ダヴィド [J3] は、スヴァトスラフ [C411:G] がやって来る前に、ヤロスラフ [C412] とイーゴリ [C432] と戦おうと望んでいたのである。しかし、ヤロスラフ [C412] とイーゴリ [C432] は、スヴァトスラフ [C411:G] がまだ来ないときに、ダヴィド [J3] と戦おうとはしなかった。二人は防御の【621】固い場所へと進軍し、双方はドルチ川⁵⁵⁵⁾ (Дрьють) の両岸で一週間のあいだ対峙した。しかし、ダヴィド [J3] の部隊から射手と槍兵⁵⁵⁶⁾ が何度か近づいて

550) リープ人 (либь) は、現代ロシア語では ливы と表記するフィン・ウゴル系の言語の民族。当時は、ポメラニア (ポモージェ) 地方を中心に、西ドヴィナ川流域にも居住しており、リトアニア人と棲み分けていた。さらに、西ドヴィナ水域に支配を拡大していたポロツク地方諸公とも、リトアニア人と同様に関係を有していた。なお、後代の「リヴォニア」の地域名は、「リープ人の地」を意味している。ここでかれらは、リトアニア人とともに、西ドヴィナ川流域を支配するポロツク公フセスラフ [L221], ヴィテプスク公ブリャチスラフ [L222] に動員されて、遠征に参加したと考えられる。

551) 「ロゴジスク」(Логажеск; Логожск) は、ポロツク地方の南西寄りに位置し、ミンスクの周辺附属都市の役割を果たしていた。現在のベラルーシ、ミンスク州のラゴイスク (Лагойск) 市に相当する。

552) この段落に名が挙がっているフセスラフ [L22411], アンドレイ [L2242], イジャスラフ [L22412] の三人は、いずれも、フセスラフ [L221] 及びブリャチスラフ [L222] の年下の兄弟である。ヴォロドシャ (Володша) (ヴォロダリ) [L224] の息子と孫たちにあたる。ヴォロドシャは、1160年にミンスクで降伏して十字架接吻をしたあとそこにとどまっておき [イパーチイ年代記(6):214頁,注144], かれの息子と孫も、ミンスクとその周辺城市を公支配していたと考えられる。

553) ヴァシリコ [L2221] は、ヴィテプスク公ブリャチスラフ [L222] の息子で、年少の公として遠征に参加したのだろう。

554) グレーブ・ログヴォロドヴィチ [L112] は、当時のドルツク公。かれの父ログヴォロド [L11] は、1160年にポロツク公だったとき、ヴァシリコ [L22] の息子たちと、ポロツク公領南部の支配権をめぐる争っている ([イパーチイ年代記(6):213-214頁])。この対立図式は、20年を経て繰り返されており、ヴァシリコ [L22] の一族は、スヴァトスラフ [C411:G] (オレーグ一族) を味方につけ、ログヴォロド [L11] の一族はダヴィド [J3] (ロスチスラフ一族) を味方につけて、あたかもルーシ支配をめぐる争いの代理戦争の様相を呈している。

555) 「ドルチ川」(Дрьють; Друць) は、現在のベラルーシのドルツィ川 (Друць) に相当するドニエプル川右岸支流。都市ドルツクはこの川の右岸に位置していた。この対峙した場所は、ドルツクの郊外であろう。

556) 「槍兵」(и копейницы) はフレープニコフ写本にのみある読み。

きては、かれらと激しく戦った。

その後、スヴァトスラフ [C411:G] がノヴゴロド人を引き連れて到着し、その兄弟たちはかれが来たことを喜んだ。かれらは、ドルチ川に板の道を渡した。ダヴィド [J3] の方へ馬を進めようとしたのである。ダヴィド [J3] は夜陰に紛れて、スモレンスクへと逃走した。[スヴァトスラフ [C411:G] は]、[ドルツク城の] 外廊防柵を焼いた。ノヴゴロド人はそこから帰郷させた。自らはロガチェフ⁵⁵⁷⁾ (Рогачев) へと軍を進め、ロガチェフからはドニエプル川に沿ってキエフに向けて進軍した。

イーゴリ [C432] は、ポロヴェツ人たち、すなわちコンチャク⁵⁵⁸⁾ (Конъчак) とコビャク⁵⁵⁹⁾ (Кобяк) を引き連れていた。かれらは、ヴィシエゴロドの向かいで⁵⁶⁰⁾、スヴァトスラフ [C411:G] の到来を待ち受けていた。リユーリク [J2] はこの事を聞くと、[キエフから]ベルゴロドへと〔逃げて〕行った。

スヴァトスラフ [C411:G] のキエフにおける公支配の始まり。

スヴァトスラフ [C411:G] は、二人の兄弟〔ヤロスラフ [C412] とイーゴリ [C432]〕とともにキエフに入城した⁵⁶¹⁾。ポロヴェツ人は、スヴァトスラフ [C411:G] に、イーゴリ [C432] 〔と同行して戦うことを〕頼んだ。それは、かれ〔イーゴリ〕がポロヴェツ人たちとともにドロブスク (Долобськ) で布陣をするためであった⁵⁶²⁾。そこで、スヴァトスラフ [C411:G] は、かれ〔イーゴリ〕を行かせた。

リユーリク [J2] は、スヴァトスラフ [C411:G] がポロヴェツ人を援軍として呼び寄せたこと、〔ポロヴェツ人が〕ドロブスクでイーゴリ [C432] とともに布陣していることを聞いた。そ

557) 「ロガチェフ」 (Рогачев) は、ドルチ川とドニエプル川の合流点にある城市で、現在もベラルーシ、ホメリ州の同名の都市。ドルツクからだと南に約 140km 下った地点にある。スヴァトスラフ [C411:G] 軍は、ドルチ川を下ってドニエプル川に入り、キエフ攻略を狙ったのである。

558) ポロヴェツの首長コンチャクについては、上注 122 を参照。

559) ポロヴェツの首長コビャクについては、上注 121 を参照。

560) ヴィシエゴロドからドニエプル川を挟んだ対岸 (左岸) の地点で、デスナ川がドニエプル川に合流する河口の地点に相当する。

561) スヴァトスラフ [C411:G] のキエフ公座への復位の時期ははっきりしないが、1181 年夏頃と推定される。

562) 「ドロブスク」 (Долобськ) は、キエフの丘から南東方向の対岸 (左岸) にある小さな湖。現在の「ドロブスケ湖」 (Долобське озеро) に相当する。このドロブスク湖は、ペレヤスラヴリからキエフに至る街道の終着点であり、ポロヴェツの援軍がキエフ攻略のために駆けつけ、合流するには、ここで布陣して落ち合うのがもっとも好都合である。

して〔リューリク [J2] は〕、ムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ⁵⁶³⁾ [D1151] を黒頭巾族とともに派遣した。また、自分の軍司令官ラザリ⁵⁶⁴⁾ (Лазорь) を自分の下級従士たちとともに〔派遣し〕、ボリス・ザハーリチ⁵⁶⁵⁾ (Борис Захарьич) をスデスラフ・ジロスラヴィチ⁵⁶⁶⁾ (Сдеслав Жирославич) およびトレポリから駆けつけたムスチスラフ [D1151] の部隊とともに〔派遣した〕。

【622】 ボリス・ザハーリチは、自分の公〔リューリク [J2]〕の息子ウラジーミル [J22] の家来たちを率いていた。〔遠征軍は〕神に望みをかけて、かれら〔イーゴリ [C432] とポロヴェツの連合軍〕を討つべく進軍した。

多数のポロヴェツ人がいて、恐れを持たずに〔ドロブスクの湖畔で〕布陣していた。かれらは自らの軍とイーゴリ [C432] の部隊に期待をかけており、斥候も置いていなかった。

〔そこに〕ムスチスラフ [D1151] が、かれら〔イーゴリとポロヴェツの部隊〕のところに〔トレポリから〕やって来た。黒頭巾族はかれらがいることを知って、ムスチスラフ [D1151]、自分たちの同胞たち、ルーシの軍司令官たち⁵⁶⁷⁾ に報告した。黒頭巾族は自分たちの同胞から〔状況を〕聞くと、かれら〔イーゴリとポロヴェツの部隊〕に向かって突撃し、かれらの天幕に向けて馬を走らせた。ルーシの軍司令官たちは、かれら〔黒頭巾族〕には、そのような命令を出しておらず、かれらを引き留めようとしたができなかった。まだ日の出前だったからである。しかし、かれら〔黒頭巾族〕は失敗し、かれら〔イーゴリとポロヴェツ人〕の天幕を襲うことはできなかった。ただ、かれらの側面部隊が少しだけ自分たちの隊列を立て直して、かれら〔敵〕の天幕を襲撃した。

ポロヴェツ人は、自分たちが黒頭巾族に襲われたのを見ると、かれら〔黒頭巾族〕のなかの数人を捕虜とした。そこには身分の高い捕虜はいなかった。

かれら〔黒頭巾族〕は、相手の天幕を少し襲撃しただけで、逃げ出した。黒頭巾族は逃げながら、

563) 「ムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ」[D1151] は、1176年に策略によってトレポリを占領し、ヤロボルク [J11] を追い出したあとは（上注 403）、「ロスチスラフ一族」と同盟しながら、トレポリに公座を置いていた。ロシ川河口近くのトレポリは、黒頭巾族の居住地であり、多くの黒頭巾族がムスチスラフ公に勤務していたのである。

564) この「ラザリ」は、リューリク [J2] に勤務していた軍司令官（貴族）。1147年の記事に、イジャスラフ [D112:I] に仕えていた千人長ラザリ・サコフスキイの名がみえ（〔イパーチイ年代記 (3) : 349 頁、注 117〕）、ウクライナ語訳の訳注はこの人物と同一としているが、これは 30 年以上以前の出来事であることから、別の人物と見るべきだろう。

565) ボリス・ザハーリチはロスチスラフ [D116:J] 及びその一族に代々仕えた貴族。上注 449 参照。

566) 「スデスラフ・ジロスラヴィチ」(Сдеслав Жирославич) についてはここが初出。ボリス・ザハーリチと同様、リューリク [J2] に仕える貴族だろう。

567) 「ルーシの軍司令官たち」(воеводам руским) とは、リューリク [J2] に勤務していたラザリ、ボリス、スディスラフ（上注 564, 565, 566）等の人物を指している。

ルーシ人⁵⁶⁸⁾によって混乱に陥った。〔黒頭巾族〕ムスチスラフ [D1151] の部隊のところへ逃げ込んだのである。ムスチスラフ [D1151] は、〔黒頭巾族が〕撃たれて敗北したものと勘違いした。そして、ムスチスラフ [D1151] の従士たちも混乱に陥った。ムスチスラフ [D1151] はかれら〔従士たち〕を抑えることができず、黒頭巾族も自分たちの仲間を〔抑えることが〕できなかった。こうして、〔ムスチスラフ〕自身もかれら〔従士たち〕と一緒に逃げた。黒頭巾族も〔逃げた〕。

その場に残されたのは、上級の家臣たちだった。そこにいたのは、**[623]**、軍司令官ラザリとリュウリク [J2] の部隊、ボリス・ザハーリチと自分の公〔リュウリク [J2]〕の息子ウラジーミル [J22] の部隊、ステスラフ・ジロスラヴィチとムスチスラフ [D1151] の部隊だった。かれらは、神に望みをかけて、ポロヴェツ人に対抗すべく出発した。

ポロヴェツ人はこれを見ると、かれらに向かって殺到し、戦いが始まった。ルーシ人は、かれら〔ポロヴェツ人〕を川に沈めた。ポロヴェツ人はルーシ人を前にして逃げ出して、その多くがチェルトリ川⁵⁶⁹⁾ (Чертогын) で溺れ死んだ。またある者は捕虜に獲られ、別の者は斬り殺された。

イーゴリ [C432] はポロヴェツ人が敗走するのを見て、自分もコンチャクとともに船に飛び乗り、ゴロデツ (Городѣць) を目指してチェルニゴフの方面へと逃げて行った。

その時、〔ルーシ人は〕、ポロヴェツの侯コゼル・ソタノヴィチ⁵⁷⁰⁾ (Козел Сотанович)、コンチャクの兄弟のエルトゥート⁵⁷¹⁾ (Елгут)、コンチャクの二人の息子トトゥール (Тотур) とビャコバ (Бякоба)、裕福なクニャチュク (Княчюк)、チュガイ (Чюгай) を殺害した。自分たち〔キリスト教徒〕の捕虜を解放した。邪教徒⁵⁷²⁾ も〔解放した〕。

568) 本年代記で русь の語は、これまでは、もっぱらキエフ、チェルニゴフ、ペレヤスラヴリの公領、すなわち本来のルーリク王朝公族の支配地を意味する、歴史・地理的な語として用いられてきた。しかし、以下の記事で頻用される русь の語 (「ルーシの軍司令官」(воеводы руськи) のような形容詞も含めて) は人間集団を指す語として、チェルニゴフ勢 (オレーグ一族) を除外した、「ロスチスラフ一族」の陣営の人間の総称として用いられているようである。ここでは「ルーシ人」と訳した。

569) 「チェルトリ川」(Чертогын) は、ドニエプル川左岸の分流で、キエフの丘とは反対側を流れ、デスナ川河口近くで本流に流れ込む。その流れが滞留して湖となったのがドロブスク湖である。リュウリク [J2] 軍とイーゴリ [C432] = ポロヴェツ連合軍との戦闘は、この川を挟んで行われた。

570) この「コゼル」は 1168 年の記事においてオレーグ [C431] が襲撃した幕営を支配していたポロヴェツ侯コザと同一人物と推定される [イパーチイ年代記 (6) : 261 頁, 注 426]。襲撃され、略奪に遭ったのちもこの侯は 10 年余りステップにおいてその地位を保っていたことになる [Плетнева, 1990, С. 152]。

571) 「エルトゥート」は「コンチャクの兄弟」とあることから、その父はオトロク・ハンであることが判明する [イパーチイ年代記 (6) : 287 頁, 注 614] 参照。

572) 「邪教徒」(поганьѣ) とは、先のポロヴェツ人との合戦でポロヴェツ人に打ち負かされて捕虜になっていた黒頭巾族のこと。

このようにして、神はルーシ人を助けた。かれら〔ルーシ人たち〕は帰郷した。神から邪教徒に対する勝利を受けたのだった。こうして、〔ルーシ人たちは〕リユーリク [J2] のもとに凱旋した。リユーリク [J2] は、勝利を喜んだが、これに驕ることはまったくなかった。かれは、戦争よりも平和を好んでいた。なぜなら、兄弟が愛し合って共存することを望んでいたからである。それは、邪教徒によって毎日虜囚の身になっているキリスト教徒のためであった。かれ〔リユーリク〕はかれら〔キリスト教徒〕の流血を見たくなかったからである。

〔リユーリクは〕熟慮して、**[624]**自分の家臣たちと評議して決めた。スヴァトスラフ [C411:G] は年齢が上⁵⁷³⁾ であることから、かれ〔スヴァトスラフ〕と約定を結んで、年長の権利とキエフをかれ〔スヴァトスラフ〕に譲り渡し、自分はすべてのルーシの地を取ろうとしたのである。こうして、尊い十字架〔接吻の誓約〕によって約定を固め、二人は親愛を結び、また姻戚関係によって絆を深めた⁵⁷⁴⁾。

リユーリク [J2] は、ムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ [D1151] に抗議して言った。「そなたは、最初はトレポリをオレーグ一族に引き渡した⁵⁷⁵⁾。これは、今はそなたは逃げ出したが、オレーグ一族やポロヴェツ人に善きことをなす〔味方をする〕ためだった。しかし、神と十字架〔の力〕は、わが貴族たちを助けてくれた。そなたは、そのようなことはやめるがよい」。こうして、〔リユーリク〕はかれ〔ムスチスラフ〕に強く抗議をした。

その年の秋、ノヴゴロド人はウラジーミル・スヴァトスラヴィチ [G2] をノヴゴロドから追

573) スヴァトスラフ [C411:G] の年齢について年代記には正確な記録はないが、生年は 1116 年以降、遅くとも 1125 年と推定されている [Войтович 2006: C. 400-401]。その場合、この 1181 年の時点で、およそ 57～65 歳ということになる。リユーリク [J2] の年齢も不詳だが、1162 年に最初の結婚をしていることから [Войтович 2006: C. 519-520]、生年を 1145 年前後と仮定すると、この時点で 37 歳前後であり、明らかにスヴァトスラフが年長者ということになる。

574) 「姻戚関係によって絆を深めた」(свадьствомъ обуемшеся) とは、本年代記 6690(1182) 年の記事にある、スヴァトスラフ [C411:G] の息子グレーブ [G3] がリユーリク [J2] の娘と結婚したことを指している。

575) 1178 年に、ウラジーミル [D1151] が、姻戚であるオレーグ一族にたきつけられて、ヤロボルク [J11] が支配していたトレポリを策謀によって奪い取ったことを指している (上注 405 参照)。

放した⁵⁷⁶⁾。

スーズダリの方セヴォロド [D177:K] は、グレーブ・スヴァトスラヴィチ [G3] を縛めから解放し、スヴァトスラフ [C411:G] と大いなる和を結んだ。そして、縁組みを進めた。すなわち、かれ [方セヴォロド [D177:K]] は、かれ [スヴァトスラフ [C411:G]] の年少の息子 [ムスチスラフ [G1]] を妻の姉妹⁵⁷⁷⁾ と結婚させた。

576) ここでは秋のこと (1181 年) としているが、『ノヴゴロド第一年代記』では 1181/1182 年冬の出来事としている。この年代記の 6689(1181) 年の記事によれば、ノヴゴロド人のドルツク遠征のあった年の「冬に [ノヴゴロド人は] ウラジーミル・スヴァトスラヴィチ [G2] を退位させた。かれ [ウラジーミル] はルーシの父のもとに行った。一方、ノヴゴロド人は方セヴォロド [D177:K] のもとに使者を遣って、公を招聘した。そこで、かれ [方セヴォロド] は自分の義理の兄弟 [ヤロスラフ・ウラジーミロヴィチ [D1153]] を [公として] 与えた」[НПЛ: С. 37, 227] とある。このことから、ウラジーミル [G2] のノヴゴロドからの追放は、ノヴゴロド人が方セヴォロド [D177:K] と関係を修復するための政治的な行動だったことがわかる。

577) 「[方セヴォロドが] かれ [スヴァトスラフ] の年少の息子を自分の妻の姉妹と結婚させた」(да за сына его меньшого свесть свою) の「年少の息子」はムスチスラフ [G1] を指し、かれについてはここが初出である。これに関しては、『ヴォスクレセンスカヤ年代記』 6713(1205) 年の項に、方セヴォロドの妃マリアの死没についての記事があり、葬儀のときに、「方セヴォロドのもとに、かれの姻戚 (сват) であるムスチスラフ [G1] から和議の [使節] がやって来た」[ПСРЛ Т.7, 2001: С. 112] という記事があり、これによって、このムスチスラフ [G1] が、方セヴォロドと姻戚関係を結んだ上記の「年少の息子」であることが特定できる。

なお、妃マリアについては、ヴラジミルの聖母就寝女子修道院受胎告知教会のかの女の棺の銘に「マルファ [マリアの修道名]・シヴァルノヴナ」(Марфа Шварновна) とあり、この「シヴァルン」はその名称からヤース人の首長 (もしくはチェコの公) と推定されている。[Карамзин Т.3, прим. 84]

参考文献

- Абрамович 1916 — Абрамович Д. И. Жития святых мучеников Бориса и Глеба и службы им. Пг., 1916. (Памятники древнерусской литературы, Вып. 2).
- Барсов 2012 — Барсов Н. П. Очерки русской исторической географии. География Начальной летописи. М., 2012.
- Бережков 1963 — Бережков Н.Г. Хронология русского летописания. М., 1963.
- БЛДР Т. 1 — Библиотека литературы Древней Руси. Т. 1: XI-XII века. СПб., 1997.
- БЛДР Т. 4 — Библиотека литературы Древней Руси. Т. 4: XII век. СПб., 1997.
- БЛДР Т. 6 — Библиотека литературы Древней Руси. Т. 6: XIV-середина XV века. СПб., 1999.
- Вилкул 2010 — Вилкул Т. Л. О хронографических источниках Киевского летописного свода // ТОДРЛ Т.61. 2010.
- Войтович 2006 — Войтович Леонтій, Княжа доба: Портрети еліти. Біла Церква, 2006.
- Воронин 1963 — Воронин Н.Н. «Повесть об убийстве Андрея Боголюбского» и ее автор // История СССР, 1963 № 3, С. 88-97.
- Древняя Русь 2015 — Древняя Русь в средневоековом мире. М., 2015
- Еремин 1966 — Еремин И. Н. Литература Древней Руси: Этюды и характеристики. М.; Л., 1966.
- Карамзин 1991 — Карамзин Н. М. История государства Российского в 12-ти томах. Т. II - III. М., 1991.
- Карпов 2014 — Карпов А. Ю. Исследования по истории домонгольской Руси. М., 2014.
- Иоанн Златоуст 1994 — Иже во святых отца нашего Иоанна Златоустого архиепископа Константинопольского избранные творения. Беседы на послание к Римлянам. М., 1994
- Ковалев 2010 — Ковалёв, А. Убийство Андрея Боголюбского и его освещение в памятниках летописания // Электронный научный журнал SCRIPTORIUM: история древнего мира и средних веков № 5, Выпуск 6. 2010.
- Литвина, Успенский 2006 — Литвина А. Ф., Успенский Ф. Б. Выбор имени у русских князей в X-XVI вв. М., 2006.
- Літопис руський, 1989 — Літопис руський / Пер. з давньорус. Л. Є. Махновця; Відп. ред. О. В. Мишанич. К.: Дніпро, 1989. (<http://litopys.org.ua/litop/lit.htm>)
- Майоров 2001 — Майоров А. В. Галицко-Волынская Русь: Очерки социально-политических отношений в домонгольский период; Князь, бояре и городская община. СПб., 2001.
- НПЛ — Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов. М.;Л., 1950.
- Пашут 1968 — Пашут В. Т. Внешняя политика Древней Руси. М., 1968.
- Православная энциклопедия Т. 9 — Православная энциклопедия: Т. 9, М., 2010. (Электронная версия <http://www.pravenc.ru/>)
- ПСРЛ Т. 1, 1997 — Лаврентьевская летопись. (Полное собрание русских летописей. Том первый). М., 1997.
- ПСРЛ Т.7, 2001 — Летопись по Воскресенскому списку. (Полное собрание русских летописей. Том VII) М., 2001.
- ПСРЛ Т.9, 2000 — Летописный сборник, именуемый Патриаршей или Никоновской летописью (Полное собрание русских летописей. Т. 9). М., 2000.
- ПСРЛ Т. 38, 1989 — Полное собрание русских летописей: Том 38, Радзивилловская летопись. Л., 1989.
- ПСРЛ Т. 40, 2003 — Полное собрание русских летописей: Т. 40, Густынская летопись. СПб., 2003.

- Рыбаков 1972 — Рыбаков Б.А. Русские летописцы и автор «Слова о полку Игореве». М., 1972.
СККДР Вып.1 — Словарь книжников и книжности Древней Руси Вып.1 (XI - первая половина XIV в.). Л., 1987.
Соловьев 1988 — Соловьев С. М. Сочинения Кн. 1: История России с древнейших времен Т. 1-2. М., 1988.
Литвина, Успенский 2006 — Литвина А. Ф., Успенский Ф. Б. Выбор имени у русских князей в X-XVI вв. М., 2006.
Филипповский 1991 — Филипповский Г. Ю. Столетие зерзани Владимирская Русь в литературе XII в. М., 1991
Фроянов 2012 — Фроянов И. Я., Древняя Русь IX-XIII веков. Народные движения. Княжеская и вечевая власть. М., 2012.
Энциклопедия СПИ-3 — Энциклопедия «Слова о полку Игореве»: Т. 3 (К - О). СПб., 1995.
Balzer 1895 — Balzer O. Genealogia Piastów. Kraków, 1895.
Chekin 1992 — Chekin, L. S. The Godless Ishmaelites: The Image of the Steppe in 11-13C Rus'. Russian History, 19, 1992.
Dimnik 2003 — Dimnik, Martin. The Dynasty of Chernigov - 1146-1246. Cambridge University Press, 2003.
Dąbrowski 2008 — Dąbrowski, Dariusz. Genealogia Mściśławowiczów. Pierwsze pokolenia (do początku XIV wieku), Kraków, 2008
Goranin 1994 — Goranin E. Latopis kijowski 1159-1198. przelozył i komentarzami opatrzył Edward Goranin (Slavica Wratislaviensia 40). 1994, Uniwersytetu Wrocławskiego in Wrocław.
Pritsak 1981 — O. Pritsak, 'Non- 'Wild' Polovtsians' , Studies in Medieval Eurasian History, London, 1981, XIII

- イパーチイ年代記 (1) — 中沢敦夫 「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (1) — 『原初年代記』 への追加記事 (1110 ~ 1117 年)」 『富山大学人文学部紀要』 (61 号, 2014 年 8 月) 233 ~ 268 頁
イパーチイ年代記 (2) — 中沢敦夫, 藤田英実香 「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (2) — 『キエフ年代記集成』 (1118 ~ 1146 年)」 『富山大学人文学部紀要』 (62 号, 2015 年 2 月) 287 ~ 353 頁
イパーチイ年代記 (3) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香 「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (3) — 『キエフ年代記集成』 (1146 ~ 1149 年)」 『富山大学人文学部紀要』 (63 号, 2015 年 8 月) 329 ~ 389 頁
イパーチイ年代記 (4) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香 「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (4) — 『キエフ年代記集成』 (1149 ~ 1151 年)」 『富山大学人文学部紀要』 (64 号, 2016 年 2 月) 321 ~ 372 頁。
イパーチイ年代記 (5) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香 「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (5) 『キエフ年代記集成』 (1151 ~ 1158 年)」 『富山大学人文学部紀要』 (65 号, 2016 年 8 月) 221 ~ 308 頁。
イパーチイ年代記 (6) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香 「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (6) 『キエフ年代記集成』 (1159 ~ 1172 年)」 『富山大学人文学部紀要』 (66 号, 2017 年 2 月) 191 ~ 296 頁。
スズダリ年代記訳注 [III] — 「スズダリ年代記訳注 [III]」 『古代ロシア研究』 22 号, 2010 年。13 ~ 37 頁。
日食・月食・星食情報データベース — 「地球上どこでも 日食・月食・星食情報データベース」 (<http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~x10553/>)
ノヴゴロド第一年代記 [II] — 「ノヴゴロド第一年代記古輯 (シノド本) 訳 [II]」 『古代ロシア研究』 13 号, 1980 年。
三浦 2012 — 三浦清美 「中世ロシア文学図書館 (III) 中世ロシアの説教① / 非業に斃れた公たち」 『電気通信大学紀要』 (第 24 巻 1 号) 2012 年。
ロシア原初年代記 — 國本哲男, 山口巖, 中条直樹訳 『ロシア原初年代記』, 名古屋大学出版会, 1987 年

〔後記〕本稿は共同研究「初期ロシア年代記の史料学的研究」の成果であり、共同執筆者、藤田英実香は京都大学文学研究科西洋史学専修修士課程に在籍している。